ISSN-0289-9760

常磐大学人間科学部紀要

人間科学

第36巻　第１号
2018年　９月

研究論文

「近代」移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究（一）
― 興亜会と亜細亜協会を中心に ―　……　崔蘭英・北原スマ子　1

The Bed Tricks in John Fletcher's Plays
……　Miwa Tsujikawa　11

幻窓湖中の奥羽日記『三月越』（往路篇）
……　二村　博　110（一）

田上新吉における描写表現指導観
……　渡邊　洋子　86（二十五）

研究ノート

ショパンの前打音に関する一考察　―《バラード》第3番 変イ長調 作品47を例として―
……　岡部　玲子　21

“概念の集合論的定式化”再考
……　大道　一弘　31

常磐大学共通英語カリキュラム（FTEC）－理論的背景と運用－
……　森本　俊・桑原　秀則・上野真悠子・Kevin McManus　41

訳注

會澤正志齋『中庸釋義』訳注稿（九）　……　松﨑　哲之　66（四十五）

常磐大学人間科学部

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程

（目的）
第１条　この規程は、人間科学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）が行う編集作業に関して必要な事項を定めることを目的とする。
（根拠）
第２条　この規程は、人間科学部紀要編集委員会規程（1983年６月15日）第４条に基づく。
（公表）
第３条　常磐大学人間科学部（以下「本学部」という。）の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCE）（以下「研究紀要」という。）は、毎年度に１巻とし、２号に分けて編集し、冊子体で400部発行するほか、その電子版を常磐大学のホームページに公表する。
（寄稿資格）
第４条　研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、本学部の専任教員および委員会が認めた者とする。
（審査）
第５条　委員会は、委員会に提出された論文が学術論文として相応しい内容と形式を備えたものであり、かつ、未発表のものであることを確認しなければならない。
（論稿の種別）
第６条　研究紀要に掲載される論稿は、次の各号のいずれかに当てはまるものでなければならない。
　１　論文　論文とは、学術論文に相応しい内容と形式を備えた理論的または実証的な未発表の研究成果をいう。
　２　研究ノート　研究ノートとは、研究途上にあり、研究の原案や方向性を示した未発表の研究成果をいう。
　３　書評　書評とは、新たに発表された内外の著書または論文の紹介であって未発表のものをいう。
　４　学界展望　学界展望とは、諸学界における研究動向の総合的概観であって未発表のものをいう。
　５　課題研究助成報告　課題研究助成報告とは、本学課題研究助成制度に基づく研究の経過報告および研究成果の報告をいう。
　６　その他　その他の論稿であって委員会が寄稿を認めたものをいう。
（編集）
第７条　研究紀要の編集は、前条までに規定された事項を除くほか、次の各号に従って行われなければならない。
1　必要に応じて、片方の号はテーマを決めて特集号とする。
2　論文の体裁（紙質、見出し、活字など）は、可能な限り統一する。
3　紀要のサイズはB5とし、論文、研究ノート、書評および学界展望は二段組、その他は一段組で、いずれも横組とする。活字の大きさは、論文、研究ノート、書評、学界展望およびその他のいずれも10ポイントとし、いずれも明朝体とする。
附　則
１　この規程の改正には、委員会の３分の２以上の委員の同意を必要とする。
２　この改正規程は、2008年10月22日より施行する。

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』寄稿規程

（目的）
第１条　この規程は、冊子体および電子媒体で公表される常磐大学人間科学部の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCE）（以下「研究紀要」という。）に寄稿を希望する執筆者について必要な事項を定めることを目的とする。
（根拠）
第２条　この規程は、人間科学部紀要編集委員会規程（1983年６月15日）第４条に基づく。
（寄稿資格）
第３条　研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程（1983年６月15日。以下「編集規程」という。）第４条に定める者とする。
（寄稿希望者の義務）
第４条　研究紀要への寄稿希望者は、寄稿に関してはこの規程を遵守するほか、この規程の解釈については人間科学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）の決定に従わなければならない。
（原稿提出要領）
第５条　寄稿希望者は、委員会が定める原稿募集要領に従って寄稿希望書ならびに原稿を委員会に提出しなければならない。
②　委員会に提出する原稿は、編集規程第６条に定める論稿の種別に当てはまるものでなければならない。
③　委員会に提出できる原稿は、原則として一号につき一人一編とする。
④　原稿は、手書きの場合は横書きで、A4判400字詰め原稿用紙で提出する。パソコン入力の場合には、テキストファイルのフロッピーおよび横書き40字30行でA4判用紙に印刷されたものを提出する。
⑤　原稿の長さは、図表等を含め、論文は２万4,000字（400字詰め原稿用紙換算60枚）、研究ノートは１万2,000字（同30枚）、書評は4,000字（10枚）、学界展望は8,000字（20枚）を基準とする。課題研究助成報告は1,300字（3.25枚）以内とする（ただし、研究計画年次終了分に関しては、論文または研究ノートに準じたものとする）。そのほかのものについては、委員会で決定する。
⑥　提出原稿は、執筆者がコピーをとり、オリジナルを委員会に提出し、コピーは執筆者が保管する。
（原稿執筆要領）
第６条　寄稿希望者は、原稿執筆に当たっては、次の各号に従わなければならない。
１　原稿の１枚目には、原稿の種別、題目、著者名および欧文の題目、ローマ字表記の著者名を書くこと。
２　論文には、200語程度の欧文アブストラクトを付すこと。なお、アブストラクトとは別に欧文サマリーを必要とする場合は、A4判ダブルスペース３枚以内のサマリーを付すことができる。
３　書評には、著者名、書名のほか出版社名、発行年、頁数を記載すること。
４　日本語以外で執筆された部分については、執筆者の責任においてネイティブチェックを行う。
５　数字は、原則として算用数字を使用する。
６　人名、数字、用語、注および（参考）文献の表記等は、執筆者の所属する学会などの慣行に従う。
７　図および表は、一つにつきA4判の用紙１枚に描き、本文には描き入れない。なお、本文には、必ずその挿入箇所を指定すること。
８　図表の番号は、図１．、表１．、とする。そのタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に記載すること。
９　図表の補足説明、出典などは、それらの下に書くこと。
（著者校正）
第７条　初校の校正は、執筆者が行う。
（発行報告）
第８条　執筆者は、本人が寄稿した研究紀要の発行報告に代えて、論稿が掲載された当該研究紀要２冊と抜刷50部を学事センターにおいて受け取ることができる。
②　執筆者が前項に規定する数量を超える複製を希望する時は、本人がその実費を負担しなければならない。
附　則
１　この規程の改正は、委員会の３分の２以上の委員の同意を必要とする。
２　この改正規程は、2008年10月22日より施行する。
３　この規程の改正条項は、2013年12月18日から施行し、2013年９月５日に遡及して適用する。

「人間科学」第36巻　第1号（2018年9月）

研究論文

「近代」移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究（一）
― 興亜会と亜細亜協会を中心に ―

崔　蘭英　（常磐大学人間科学部）
北原スマ子（明治大学）

A Fundamental Research on the Human Network of the Intellectuals in East Asia from the Transitional Stage to "Modern Times": Focusing on Koa Board and the Asia Association

Lanying CUI（*Faculty of Human Science, Tokiwa University*）
Sumako KITAHARA（*Meiji University*）

This paper is a part of the joint research, *"A fundamental research on the human network of the East Asia intellectual in the transitional stage to 'modern times'"*. Authors have made a study on the Koa Board（興亜会）and Asia Association（亜細亜協会）from the viewpoint of the Korea side, and made clear how the Korean people were involved with them. Based on the material data obtained from this paper, further research considering how Japan, China (the Qing dynasty), and Korea created a regional alliance and how solidarity in East Asia could be made in the near future.

Ⅰ．はじめに

明治期の日本外交の目標が、欧米列強に対し、近代国家としての独立を達成し、彼らと対等の地位を確立することにあったという点は、現在の共通認識と言ってよい。一方で、もし日本が目標を達成できたとしても、清や朝鮮などの近隣諸国が独立を維持できず、欧米の勢力範囲にのみ込まれてしまうことは、自身の独立を維持する上で絶対に避けなければならなかった。そのため、むしろ欧米列強に先んじて近隣諸国を自らの勢力範囲に含むべきだという考えは、当時の日本の政治指導者の中に強くあった。

しかし、19世紀末の東アジアにおける国際関係においては、なお清を中心とする中華秩序が大きな影響力を保持しており、日清両国においては特に清を宗主国とする朝鮮に対する外交問題が大きな対立点となっていた。日本は欧米列強への対策よりも、まずこの中華秩序に基づく東アジアの伝統的構造を、どのように自国に有利なものに転換していくかという問題に直面していた。その中華秩序の歴史的転換点が、日清戦争であったことに異論は無い。日清戦争の勝利によって中華秩序の転換に「成功」を収めた日本は、更に日露戦争を経て、自身が東アジアの宗主国たらんと、帝国主義への道を驀進し始めるのである。

だが、中華秩序が破壊される以前の三国の知識人の

間には、共通言語としての漢字漢文を用い、親密な交流があったことを忘れてはならない。

朝鮮王朝は重要な外交活動として江戸時代の日本に朝鮮通信使を12回にわたって派遣してきた。目的の一つは、「日本知識人との文化的接触を通して、朝鮮の文化的威力を誇示すること」とされているが、一方迎える側の日本では「儒者文士たちは、通信使との接触と交流を終身の栄誉として、朝鮮通信使の入国があると、沿道の客館に馳せ参じ、相競って面接を求め、筆談と詩文の唱和、そして書画の揮毫を請う」[1]という状況であれば、通信使は両国の文化的交流を深めたという点で間違いなく大きな意義があったと言えよう。

また、朝鮮ではほぼ同じ時期に、それをはるかに上回る使節団を清朝中国に派遣している。『清選考』という史料によると1637年から1894年までの間に、朝鮮国王から清朝皇帝に対して派遣された正式な使節の数は494回になるが、さらに臨時の齎咨行（咨文をもたらすことが目的の使節）や皇歴齎咨行（清の暦を受け取る目的の使節）を加えると、950回程度と見積もられている[2]。

清朝中国に派遣された朝鮮の使節は滞在期間中、複数回にわたって開かれた酒宴で、清の知識人と筆談し詩文を唱和して盛んに交流を行った。帰国後も、互いに書信や詩文を交わし贈り物などをして、人脈を維持、拡大しようとしていた[3]。これは単なる「交流」を目的にするものではなく、また中国文化の「東伝」だけを意味するのでもない。意図的と非意図的に築かれた「人的ネットワーク」は、朝鮮国内の政治活動や外交問題に活かされることもあった[4]。

日本と清朝中国との間では、1873（明治６）年に日清修好条規批准書の交換が行われ、その４年後の1877年の年末に、ようやく何如璋以下の駐日外交官員が日本へ派遣されてきた。この時期の日本はまさに近代日本の形成期に当たり、国家の将来を巡ってあらゆる面において変革の動きとそれに伴う混乱が生じていた時期である。清、朝鮮も国内事情およびそれぞれ取り巻く国際情勢には程度の差があるものの、「ウエスタン・インパクト」を受けていることは共通している。

このヨーロッパの衝撃という問題については、近年、研究が緻密化し、新たな研究視点も生まれた。例えば、東アジアの朝貢貿易に参画したイギリス商社やオランダ東インド会社に関する研究では、「西洋の衝撃」によって開港した東アジアを、開港前と開港後のように截然と分けるのではなく、むしろ東アジア域内交易関係の歴史の連続性を見るべきであるという視点を提示している[5]。同時に方法論的に、ヨーロッパ中心の世界システム論に対して、東アジア地域はそのサブシステムの一つとして認識するのではなく、むしろ独自の地域システムを形成していたという考えに基づく理論が登場した。溝口雄三ほか編のシリーズ『アジアから考える』（東京大学出版会、1993年）はこのような視点を提示していたが、残念ながら日清戦争以前の東アジア国際関係に関しては、このような視角に立脚した研究は十分ではない状況にある。

朝鮮問題をめぐる近代東アジア国際関係に関する研究は、戦後多くの史料が発掘されて大きく進展し、1980年代に入ってからは様々な立場からの研究成果が発表され、より一層活発になった。とりわけ日清戦争に関する新しい傾向としては、概ね①民族的対立による開戦、②日本の政策による開戦、③日本の国民国家形成における意味を論ずるもの、の三点が挙げられる[6]。このように現在、近代黎明期の東アジア国際関係史に関しては、視点を異にする多くの議論が活発に行われているが、これらの議論はいずれも政策に焦点を当てており、三国の人々の交流に光を当ててはいない。故に筆者の二名は中国文学を専門とする平石淑子氏（日本女子大学教授）と共同研究――「近代」移行期の東アジアにおける知識人の人的ネットワーク形成に関する調査と研究――を行い、従来の政治史・外交史研究が見落としてきた、東アジアにおける漢詩、漢文による人的ネットワークの実態を明らかにし、それが東アジアの国際関係にどのような影響を及ぼしたのかを文学的な視点を加えて考察することにしている。

Ⅱ．興亜会と亜細亜協会

１．連帯への活動

三国の交流という点では、1880年２月に西洋列強のアジア侵略に対抗し、東アジア三国の連帯を主たる

目的として設立された近代日本における最初のアジア主義団体である興亜会、そして1883年1月に名称変更した亜細亜協会の集会で、日本、清朝中国、朝鮮の三国の人々が一堂に会した事実等はもっと注目すべきである。

興亜会は、相互に通商貿易をすること、教育を盛んにして言語を習得し外交軍事情報を収集することを目指した。会則を定め、会員を広くインド、ペルシャにまで求めたが、現実的な連帯相手は清国、朝鮮を想定していた。創立メンバーは特に帝政ロシアによる朝鮮、清国への侵攻に対する危機意識が強く、日・清・朝は「人同類、書同文、唇歯之邦」の間柄であるから、この三国の連帯が緊要であると考えていた[7]。

その中で最も重視したのは清との関係で、興亜会設立当時、すでに駐日清国公使館が開設されていて[8]、初代公使何如璋が創立員の名簿に名を連ね、時をおかずに興亜会支那語学校を開学したように、当初から緊密であった。

一方朝鮮との具体的な関係は、1880年8月17日の小会議開催のおり、朝鮮修信使の来着を好機として懇親会を開催し、興亜会の設立趣旨を明らかにして双方の親睦を図ろうとしたことに始まる。そこで議決に従い、会長の伊達宗城名義で規則書・会員録を添えて修信使正使金弘集にあてて会へ招待する書簡を送った。これに対し金弘集は興亜会の主旨には賛同するが、会への参加は自分の役割の範囲を越えるために属官を遣わすと回答した[9]。興亜会では情報収集のための朝鮮語教育も当初より計画していて、1880年11月に京城（現ソウル）人の金正模を朝鮮語教師として招聘したことがわかる[10]。

以上のようなことを知ることができるのは、興亜会が会報「興亜会報告」を定期的（月刊）に発行していたからである。興亜会の名称は83年に亜細亜協会と変更になるが、亜細亜協会の会報「亜細亜協会報告」と合わせ、現在復刻版で『興亜会報告・亜細亜協会報告』全2巻（不二出版、1993年）が出版されており、特に、「興亜会報告」は第1集から35集まですべて収録されていて興亜会研究の必須基礎資料となっている。

ところで、この興亜会と清国との関係については、中国語教育や公使館関係者との交流、ジャナーリスト王韜の批判など多岐にわたる研究があるが[11]、他方朝鮮との関係についての専論は管見のかぎり皆無である[12]。

そこで著者たちは朝鮮側の視点に立って、興亜会、亜細亜協会との関わりから、当時朝鮮ではアジア主義や日清との連帯の可能性をどうとらえていたのかを今後総合的に検討する予定であるが、その前提として具体的に朝鮮の誰がどのように興亜会、亜細亜協会と関係をもったのかという基礎的な事実関係を、『興亜会報告・亜細亜協会報告』を使用して本稿で明らかにしたい。

２．朝鮮人の参加と詩文

①まず会報をすべて確認できる興亜会時代（1880年2月から1883年1月）に限定して、例会や懇親会に参加した朝鮮人名を明らかにした。（表（1））

前述したように、興亜会が朝鮮人との交流、連帯に動き始める契機は1880年第二次修信使の訪日にあるが、それ以前に興亜会に出入りしていた朝鮮人が李東仁である[13]。日本事情の探査を目的に密航していた僧侶で、有力な政財界人、文化人との繋がりを求めての参加と考えられる。

姜瑋は第二次修信使と金玉均の第一次日本訪問に随行して二度訪日しているので、この3年間に興亜会の例会や懇親会に参加した朝鮮人は22名であることがわかった。大多数は第二次修信使、紳士遊覧団、第三次修信使の一員として訪日した際に、興亜会が開催した懇親会に参加したのであるが、日本に滞在していた李東仁と金正模は例会に出席していた。金正模は「興亜会報告」から朝鮮語講師として招聘された人物で、来日から6月までの間、毎月のように例会に参加していたことが判明するが、忽然と姿を消す。新聞記事などによると発狂したとされる[14]。この金正模については、その経歴、日本に来ることになった経緯、そして朝鮮語教育をどのように行なったのかといった調査はこれからの課題である。

表（1）　「興亜会」例会・懇親会参加朝鮮人名（1880 年 2 月～ 1883 年 1 月）

	姓名	本貫	生没年	字･号･役官職等	参加年月日	備　　考
1	李東仁		（1849 ～ 1881）	僧侶	1880,9,5 （高宗 17,8,1）	1879 年金玉均らの指示により日本へ密航。日本事情を視察し日本語を習得する。朝鮮人で最も早くに興亜会に出入りして会員となる。1880（明治 13）年 7 月 30 日付け会員名簿には「朝野継允」と記名。第二次修信使懇親会参加者時には「朝野東仁」と称する。第二次修信使金弘集とともに帰国したが、直後の 80 年 10 月に国王の命を受け、駐日清国公使何如璋に「朝米条約」斡旋依頼のため再渡日。80 年 5 月から 9 月にかけてイギリス駐日公使館のアーネスト・サトウと頻繁に接触し、朝鮮語を教えたこともあった。
2	李祖淵	延安	（1843 ～ 1884）	（字）景集 （号）翫西 司憲府監察	1880,9,5 （高宗 17,8,1）	第二次修信使金弘集随員（1880,8,11 東京着～ 9,8 東京発）。翌 81 年に第三次修信使従事官として再度訪日する。
3	尹雄烈	海平	（1840 ～ 1911）	中軍将	1880,9,5 （高宗 17,8,1）	第二次修信使随員。帰国後新式軍隊の別技軍を創設し、左副領官として主導的役割を果たす。 紳士遊覧団随員として渡日し、初めて同人社に留学した尹致昊の父親。
4	姜瑋	晋陽	（1820 ～ 1884）	（字）仲武、堯章、韋玉（号）秋琴、慈屺、聴秋閣、古懽堂 漢学者、詩人	1880,9,5 （高宗 17,8,1）	第二次修信使随員。1882 年金玉均に随行して再渡日する。（№22 参照）
5	金正模				① 1881,2,14 （高宗 18,1,16） ② 3,14（2,15） ③ 4,15（3,17） ④ 6,13（5,17） ⑤ 6,23（5,27） （金世模 ?）	京城人で 1880 年 11 月興亜会に朝鮮語教師として招聘される。81 年 2 月からアーネスト・サトウの二代目朝鮮語教師となったが、7 月に発狂したとされる。
6	洪英植	南陽	（1856 ～ 1884）	（字）仲育 （号）琴石 参議	1881,6,23 （高宗 18,5,27）	紳士遊覧団（1881,5,25 東京着～ 8,8 東京発）朝士として、陸軍省などを視察。この時に前島密と会い、郵便事業について話をきいた。1882 年統理交渉通商事務衙門の郵程担当者となり、この事業の準備を開始する。
7	魚允中	咸従	（1848 ～ 1896）	（字）聖執 （号）一齋 応教	1881,6,23 （高宗 18,5,27）	紳士遊覧団朝士の財政経済部門担当者として大蔵省を視察。また自分の随員の兪吉濬・柳定秀を慶応に、尹致昊を同人社に留学させ、金亮漢に造船技術を学ばせた。

	姓名	本貫	生没年	字･号･役官職等	参加年月日	備　　考
8	金鏞元	清風	（1842 ～ 1896）	（字）善長 （号）薇史 水軍虞候	1881,6,23 （高宗 18,5,27）	紳士遊覧団朝士で汽船運航に関する分野の視察を担当。すでに第一次修信使の随員（画員副司果）として、1876 年に訪日経験があった。
9	沈宜永	青松	（1853 ～ ? ）	（字）命汝 （号）霞汀 （武科出身）	1881,6,23 （高宗 18,5,27）	紳士遊覧団・李元會の随員。病欠した李の代理として懇親会に出席した。
10	金亮漢	安東	（1849 ～ ? ）	幼学	1881,10,24 （高宗 18,9,2）	魚允中の随員として渡日し、一行とともに帰国せずに残って造船技術を学ぶ。11 月興亜会同盟会員となる。朝鮮最初の国費留学生の一人。
11	玄昔運	川寧	（1837 ～ ? ）	（字）德民 （号）紫英 堂上訳官	1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使趙秉鎬随員（81,10,28 東京着～ 12,17 東京発）。すでに 1876 年第一次修信使随員（訳官）として訪日経験があった。
12	高永喜	済州	（1849 ～ 1916）	（字）子中 （号）雨亭 判事	1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使随員。すでに 1876 年第一次修信使随員（乾糧官）、紳士遊覧団朝士洪英植の随員として日本へ行った経験があった。遊覧団帰国直後にこの三次修信使随員に選ばれ、三度目の訪日となった。
13	李鶴圭	洪州	（1852 ～ ? ）	軍官	1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使随員。
14	鄭舜鎔				1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使随員。平安道碧潼郡守であった記録がある。
15	金弘培			書記	1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使随員。
16	趙漢容			訳官（ ? ）	1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使随員。
17	許潽俊				1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使従者。
18	韓禎鶴				1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使従者。
19	金仁吉		（1851 ～ ? ）		1881,12,12 （高宗 18,10,21）	第三次修信使従者。
20	金玉均	安東	（1851 ～ 1894）	（字）伯温 （号）古筠、古愚 通訓大夫経筵侍読官	1882,6,21 （高宗 19,5,6）	金玉均第一次日本訪問（1882,6,1 東京着）。日本事情視察を目的とし、有力政財界人や福沢諭吉らと会って帰国した。壬午軍乱後、第四次修信使朴泳孝（1882,10,13 東京着）の顧問として再度訪日する（第二次日本訪問）。
21	徐光範	大丘	（1859 ～ 1896）	（字）叙九 （号）緯山 承政院記注官	1882,6,21 （高宗 19,5,6）	金玉均第一次日本訪問に同行。第四次修信使では従事官として再渡日する。

	姓名	本貫	生没年	字･号･役官職等	参加年月日	備　　考
22	姜瑋	晋陽	（1820 ～ 1884）	（字）仲武、堯章、韋玉（号）秋琴、慈屺、聴秋閣、古懽堂 漢学者、詩人	1882,6,21 （高宗 19,5,6）	金玉均第一次日本訪問に随行。第二次修信使随行以来の訪日であった。（№ 4 参照）
23	兪吉濬	杞溪	（1856 ～ 1914）	（字）聖武 （号）矩堂	1882,6,21 （高宗 19,5,6）	金玉均第一次日本訪問に随行。すでに紳士遊覧団随員として渡日経験があった。最初の日本留学生（慶応義塾）の一人である。

（典拠）黒木彬文･鱒沢彰夫編集解説　復刻版『興亜会報告･亜細亜協会報告』第 1 巻（不二出版、1993 年）、韓国精神文化研究院編『韓国人物大事典』（中央M＆B、1999 年）、『韓国民族大百科事典』（韓国精神文化研究院、1991 年）、許東賢「1881 年朝士視察団の活動に関する研究」（『国史館論叢』66 輯、1995 年）、琴秉洞『金玉均と日本』（緑蔭書房、1991 年）、北原スマ子「第三次修信使の派遣と「日朝通商章程」の改定・課税交渉」（『朝鮮学報』192 輯、2004 年）など。

②「興亜会報告」には、「文苑雑識」という文芸欄がある。これは第 12 集からそれまで日本文で書かれていた会報を、より広くアジアの読者を意識して漢文表記に変えたことに伴い、構成を整え「本会記事」、「論説」、「中外異聞」、「告白」と合わせて新たに設けられた欄で、会員の漢詩文を掲載した。ここに朝鮮人の詩文も数編載せられていることに注目した。

「亜細亜協会報告」の方は現在、定期発行されてきた第 1 篇から 13 篇までと、その後の数編が確認できる状態であるが、ここにも「文苑雑録」(1 篇から 8 篇)「文苑余賞」(9 篇以降）という漢詩文掲載の欄がある。「亜細亜協会報告」は亜細亜協会が東亜同文会に吸収合併される 1900 年まで継続して発行されていたかどうか今のところ不明であるが、別に会員維持策として 1888 年より亜細亜協会から収集歴史史料の公開を目的とした『会余録』が刊行されており [15]、「会余酬唱」欄などに朝鮮人の漢詩文が掲載されている。

この「興亜会会報」「亜細亜協会報告」「会余録」に詩文が掲載された朝鮮人名をまとめたものが表（2）である。

表（2）『興亜会報告・亜細亜協会報告』及び『会余録』に詩文が掲載された朝鮮人

	作者	作者生没年、本貫、号、その他	贈答相手	贈答相手追記	題名	作成日時	掲載情報	その他
1	洪英植	（1855 ～ 1884） （本貫）南陽 （号）琴石	三島毅	興亜会同盟員、三島中洲（1830～1919）漢学者	（三島毅の「呈朝鮮諸先生」を次いで）「次韵」	1881,6,23 （高宗 18,5,27）	『興亜会報告･亜細亜協会報告』第 1 巻「興亜会報告」18 集（1881,8,10 発行）P135「文苑雑識」、七言絶句 2 首	紳士遊覧団朝士（1881,5,25 東京着～ 8,8 東京発）、興亜会懇親会出席。
2	魚允中	（1848 ～ 1896） （本貫）咸従 （号）一斎	同上	同上	（同上）「又」	同上	同上、七言絶句と五言絶句	同上、興亜会懇親会出席。

	作者	作者生没年、本貫、号、その他	贈答相手	贈答相手追記	題名	作成日時	掲載情報	その他
3	李鳳植	（1828 ～ ?） （本貫）全州	同上	同上	（同上） 「又」	同上	同上、七言絶句	朝士趙準永の随員、興亜会懇親会欠席。
4	金鏞元	（1842 ～ 1896） （本貫）清風 （号）薇史 前任水軍虞候 （武官）	興亜会社中		「恭呈興亜会列位閣下」		同上、19 集（1881,8,31 発行）　P146「文苑雑識」	紳士遊覧団朝士、興亜会懇親会出席。
5	厳世永	（1831 ～ 1900） （本貫）寧越 （号）凡斎	曽根嘯雲	興亜会創立員・議員、曽根俊虎（1847 ～ 1910）海軍軍人	「横須賀夜泊藤倉楼席上和曽根嘯雲先生玉韻」		同上、20 集（1881,9,20 発行）　P156「文苑雑識」、七言絶句	同上、興亜会懇親会欠席。
6	沈相学	（1845 ～ ?） （本貫）青松 （号）蘭沼	同上	同上	同上		同上、七言絶句	同上、興亜会懇親会欠席。
7	朴定陽	（1841 ～ 1904） （本貫）潘南 （号）竹泉 正使	同上	同上	同上		同上、七言絶句	紳士遊覧団正使、興亜会懇親会欠席。
8	兪鎮泰	（1831 ～ ? ） （本貫）杞渓 （号）杞泉	同上	同上	同上		同上、七言絶句	朝士沈相学の随員、興亜会懇親会欠席。
9	姜晋馨	（1830 ～ ?） （本貫）晋州 （号）芝圃	同上	同上	同上		同上、七言絶句	朝士姜文馨の随員、興亜会懇親会欠席。
10	李商在	（1850 ～ 1927） （本貫）韓山 （号）月南	同上	同上	同上		同上、七言絶句	正使朴定陽の随員、興亜会懇親会欠席。
11	金亮漢	（1849 ～ ?） （本貫）安東				1881,10,24（高宗 18,9,2）	同上、22 集（1881,11,30 発行）　P167「本会紀事」、五言律詩	朝士魚允中随員。一行とともに帰国せず造船技術学ぶ。1881,10,24 興亜会親睦会出席。
12	徐光範	（1859 ～ 1897） （本貫）大丘 （号）緯山 承政院記注官			（黎庶昌「興亜懇親会席上之作」に次いで）「同」	1882,6,21（高宗 19,5,6）	同上、30 集（1882,7,30 発行）　P254「文苑雑識」、七言絶句	金玉均らとの渡日時に興亜会親睦会出席。1882 年 3 月から 7 月東京滞在。
13	金鏞元	（1842 ～ 1896） （本貫）清風 （号）薇史 宣略将軍前任水師虞候			「日本幕府元老井伊直弼公碑文」		同上、35 集（1882,12,22 発行）　P295「文苑雑識」、碑文	紳士遊覧団一行とともに帰国せず、化学と養蚕を学ぶ。

	作者	作者生没年、本貫、号、その他	贈答相手	贈答相手追記	題名	作成日時	掲載情報	その他
14	池運永	（1852 ～ 1935）（本貫）忠州			「聞国内変動慨然有述」		同上、第 2 巻「亜細亜協会報告」 5 篇 (1886,5,30 刊行）P251「文苑余賞」、七言律詩 2 首と七言絶句 2 首	1882 年第 4 次修信使に同行。1886 年金玉均らの暗殺を目的に渡日。
15	金嘉鎮	（1846 ～ 1922）（本貫）安東（号）東農 駐日弁理公使			「席上次長岡通侯韻」	1888,10,31（高宗 25,9,27）	『会余録』4 集 (1889,2,19 出版） P70「水土雑輯」、七言絶句	金嘉鎮は 1887 年 7 月任命閔泳駿公使の時代は参賛官、1888,11,17 弁理公使就任。1888,10,31 興亜会親睦会参加時記録では、すでに朝鮮弁理公使とある。
16	金嘉鎮	同上	大鳥圭介公使	（1833 ～ 1911）1889 年清国駐箚特命全権公使、93 年朝鮮駐箚公使兼任	「餞大鳥公使之任中国」	1889,8（高宗 26）	同上、6 集（1889,11,11 出版） P109「会余酬唱」、七言律詩	大鳥圭介の清国公使赴任送別会出席。
17	金嘉鎮	同上			「題節署澄亜亭　並引」	同上	同上、P110「会余酬唱」、五言律詩	
18	金嘉鎮	同上			「紅葉館亜細亜協会己丑春季親睦会席上」	同上	同上、P111「会余酬唱」、七言律詩	亜細亜協会の春季親睦会出席。
19	金嘉鎮	同上			「庚寅初春上浣余将暇還本国～」	1890,3（高宗 27）	同上、9 集（1890,10,28 出版） P157「会余酬唱」、五言絶句	金嘉鎮自身の送別会出席。
20	李鶴圭	（1852 ～ ?）（本貫）洪州 代理公使	渡邊駐奥全権公使	渡邊洪基（浩堂）（1847 ～ 1901）1890 年オーストリア公使	「送駐奥全権公使渡邊仁兄大人之任所～」		同上、P159「会余酬唱」、七言律詩	李鶴圭は東邦協会（1891 年 7 月創立）第 1 回総会にも参加。
21	金洛駿	（1845 ～ ?）（本貫）光山 通訳官	同上	同上	「呈駐奥全権公使渡邊仁兄大人栄行」		同上	

	作者	作者生没年、本貫、号、その他	贈答相手	贈答相手追記	題名	作成日時	掲載情報	その他
22	李鶴圭	（1852 ～ ?）（本貫）洪州代理公使	黎庶昌駐日清国公使	（1837 ～ 1897）（字）蘋斎『古逸叢書』刊行	「庚寅重九蘋斎星使招集紅葉館登高敬次留別元韻」	1890,9,9（高宗 27,7,26）	同上、10 集（1891,4 出版）P187「会余酬唱」、七言律詩 2 首	黎庶昌清国公使送別会出席。黎は第 2 代公使（1881 年～）として勤務経験があり、この時は第 4 代公使時代（1887 年～）。
23	金洛駿	（1845 ～ ?）（本貫）光山通訳官	同上	同上	「敬次星使重陽留別韻奉呈」	同上	同上、P189「会余酬唱」、七言律詩 2 首	

（典拠）黒木彬文･鱒沢彰夫編集解説　復刻版『興亜会報告･亜細亜協会報告』第 1、2 巻（不二出版､1993 年）､亜細亜協会編『会余録』（開明書院、1977 年）、韓国精神文化研究院編『韓国人物大事典』（中央M＆B、1999 年）、許東賢「1881 年朝士視察団の活動に関する研究」（『国史館論叢』66 輯、1995 年）、韓哲昊『韓国近代駐日韓国公使の派遣と活動』（푸른역사、2010 年）など。

日本・清朝中国・朝鮮の三国の人々は同じ漢字文化圏に生きているので、言葉は通じなくとも漢文によって筆談し自作の漢詩文を贈答しあうことで相互に自らの思いを伝えあうことはできた。「興亜会報告」所収の詩文は、1882 年に金玉均とともに来日した徐光範以外は、すべて紳士遊覧団一行 11 名のものである。一覧するかぎり懇親会出席の有無とは関わりがない。彼らの詩文はどのような経緯、手続きをへて掲載に至ったのであろうか。そしてその詩文の精査は必須であるが、おおよそ日清朝三国人は同じ文化を持つ一家兄弟のような間柄で、共に語らい友好を結ぶことができたという喜びとともに、三国が協力すれば西洋何するものぞという気概を示す詩と、ただ異国の風雅をうたう詩の二つの傾向があるように思われる。

『会余録』の刊行された時代に詩が掲載されたのは金嘉鎮・李鶴圭・金洛駿の駐日朝鮮公使館関係者だけで[16]、その内容も次第に相互の友情と、別れの悲しみを詠うものになり、興亜会時代の三国連帯の主張は薄れてしまっている。

Ⅲ．おわりに

以上、本稿では朝鮮の誰が興亜会、亜細亜協会とどのような関わりをもっていたのかという基礎的な事実を具体的に明らかにした。今後はそれらの会報に掲載された詩文を精読し、興亜会、亜細亜協会に関係した朝鮮の人々が何を感じ、興亜会の三国連帯論をどのように評価、思考していたのかということを究明していきたい。さらに三国連帯という点では、興亜会、亜細亜協会に関わった清国人の思いも同様に掲載された詩文をとおして解読できよう。日本・清朝中国・朝鮮の三国の人々の興亜会、亜細亜協会を通じた交流実態の解明、そして三国の当時のアジア主義の比較は向後の遠大な検討課題である。

最後に、本稿は日本学術振興会科研費の助成による研究成果（基盤研究 (C)（一般）研究課題番号：17K03142）の一部であることを付言しておく。

[1] 上田正昭編『朝鮮通信使：善隣と友好のみのり』（明石書店、1995年）269、294頁。

[2] 夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』（名古屋大学出版会、2015年）4～5頁。

[3] 崔蘭英「清の知識人と燕行使の交流から見る人的ネットワークの構築――董文渙の日記および詩文を手掛かりに――」（『韓国朝鮮文化研究』17、2018年3月）。

[4] 崔蘭英「清の游智開と朝鮮の朝貢使節――領選使の派遣を中心に――」（『韓国朝鮮文化研究』15、2016年3月）。

[5] 代表的な研究として、石井摩耶子『近代中国とイギリス資本』（東京大学出版会、1998年）、浅田実『商業革命と東インド貿易』（法律文化社、1984年）を挙げよう。

[6] 東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容』（ゆまに書房、1997年）。

[7]「興亜会報告」第8集「清国通信」10頁（曽根俊虎・伊東蒙吉が直隷総督李鴻章に呈した書簡より）。

[8] 実藤恵秀『明治日支文化交渉』（光風館、1943年）99～101頁を参照。駐日清国公使館開設（1877年）。初代公使何如璋時代（光緒3（1877）年11月26日～、副公使張斯桂、参賛黄遵憲）。第二代公使黎庶昌時代（光緒7（1881）年12月26日～）。第三代公使徐承祖時代（光緒10（1884）年11月10日～）。第四代公使黎庶昌時代（光緒13（1887）年11月19日～光緒16（1890）年）。

[9]「興亜会報告」第10集1～11頁。

[10]「興亜会報告」第16集「和文雑報」20頁。

[11] 鱒澤彰夫「興亜会の中国語教育」（『興亜会報告・亜細亜協会報告』解説（2）不二出版、1993年）、狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察（4）第二章　興亜会について（続）―中国側の反応―」（『東亜』№413、2001年11月）、並木頼寿「明治初期の興亜会と曽根俊虎について」（『中国研究月報』544号、1993年6月）など。

[12] 佐藤三郎「興亜会に関する一考察」（『山形大学紀要』人文科学第4号、1951年）には朝鮮について比較的まとまった記述があるが、朝鮮研究の専論ではない。

[13] 李光麟「開化僧　李東仁」（『開化党研究』第10章、一潮閣、1973年）。

[14]『横浜毎日新聞』1881年7月23日付け「雑報」、萩原延寿『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄』14、『離日』148頁。

[15] 亜細亜協会編『会余録』（復刻版、開明書院、1977年）。

[16] 駐日朝鮮公使館は1887年に開設された。1886年李鑑永が弁理公使に任命されたが赴任せず、実際に赴任した初代弁理公使は閔泳駿（1887年7月6日～1888年11月17日）参賛官は金嘉鎮である。昇進して金嘉鎮は二代目の弁理公使（1888年11月17日～）となった（韓哲昊『韓国近代駐日韓国公使の派遣と活動』푸른역사、2010年）。

「人間科学」第 36 巻　第 1 号（2018 年 9 月）

研究論文

The Bed Tricks in John Fletcher's Plays

Miwa Tsujikawa（*Tokiwa University*）

Abstract：

John Fletcher, a dramatist of the early seventeenth century English theatre, was remarkable for his technique of surprising and misleading audiences. In the middle of his career, he implemented various theatrical conventions in his scenes that included distinctive audience manipulation techniques. Examples vary but include female cross-dressing and songs by women indicating their wantonness.

This study examines how Fletcher introduced the audience manipulation technique in two of the six scenes where he used the "bed trick" or its equivalent. The bed trick is a relatively minor theatrical convention that involves substituting one partner in a sex act with a third person. This study analyzes scenes with six exchanges between people including those without sexual intercourse. First, comparisons of two bed trick scenes are presented; both are used as a means to cure madness and do not withhold information from the audience. The earlier bed trick scene is conventional; the latter has more of a twist. Second, the bed trick portrayed in *The Queen of Corinth* (1617) is examined for its audience manipulation technique. Finally, three works which involve the bed trick or its equivalent are analyzed, where the women attempt to humiliate the men; only one of the three involves suppressing information from the audience.

Fletcher introduced audience manipulation in the bed trick scene in *The Queen of Corinth* and also in the exchange of bedfellows in *The Little French Lawyer* (1620). As this study will demonstrate, Fletcher presented audience manipulation techniques in his works during the latter half of his career.

Introduction

John Fletcher was a dramatist in the early seventeenth century. He was fifteen years younger than Shakespeare, with whom he co-authored three plays. Fletcher's work spanned more than fifty plays; some he wrote with other writers and others he wrote individually. He was incredibly popular throughout his career and at times more well liked than Shakespeare, but his popularity declined in later years.

Fletcher's work contained several remarkable aspects where he implemented dramatic conventions. He liked to surprise and mislead the audience. For example, in scenes with female cross-dressing, the audience would not necessarily know about the disguise beforehand. Through continuous hints, he would groom the audience with doubts about the character before the eventual revelation of the hidden disguise. I have examined the development of audience manipulation techniques in association with various dramatic conventions: female cross-dressing, indication of a woman's wantonness through songs, the association between songs and supernatural beings, and the healing of injury or love sickness with songs[1]. After examination of the scenes where

these conventions have been utilized, I concluded that Fletcher's audience manipulation technique was not present in his earlier plays. Fletcher gradually developed these techniques in the latter part of his career, although the timings of the appearance of these techniques differ according to the type of conventions employed.

This study examines the development of Fletcher's technique called the "bed trick." The bed trick is a notorious dramatic convention that involves the exchange of a sex partner. According to Desens, critics agree on the definition of a bed trick: "a sexual encounter occurs in which at least one partner is unaware of the other partner's true identity. The deceived person had expected someone else and, because the couple meet in the dark, he or she fails to detect the substitution" (11). Although this convention was used in at least forty-four plays during the English Renaissance period (Desens 11), the most widely recognized bed tricks are contained in two of Shakespeare's plays.

In *Measure for Measure* (1603)[2], the deputy duke of Vienna (Angelo) tells Isabella he will spare her condemned brother's life on the condition that she has sex with him. Duke Vincencio, who has secretly been watching Angelo's actions, devises a bed trick where Angelo's deserted fiancé (Mariana) takes Isabella's place in the darkness. In *All's Well That Ends Well* (1605), Bertram, who was forced to marry Helena, tells her that he would acknowledge her as his wife on one condition: if she could conceive his child and get the ring from his finger. In the play, Bertram tries to seduce the virgin Diana. Helena slips into the darkness and has a sexual encounter with Bertram in place of Diana. She successfully conceives his child and gets his ring. According to Bowden's description, the bed tricks of these two plays "follow this simple scheme: X, expecting to lie with A, is caused to lie with B instead through the conspiracy of A and B" (112). Bowden defined this as the "basic bed trick formula" and analyzed other bed tricks between 1603 and 1642. He concluded, "there may be some tendency for some playwrights to attempt to outdo their predecessors in ingenuity, but the basic bed trick remains the most popular form all the way down to 1642 " (115).

Marliss C. Desens analyzed Fletcher's use of bed tricks in four of his plays as well as other bed tricks found in dramas from the English Renaissance period. Within the context of marriage, Desens reviews the bed tricks in *The Two Noble Kinsmen* (1613) and *The Maid in the Mill* (1623). In *Monsieur Thomas* (*Father's Own Son*, 1615) and *The Queen of Corinth* (1617), she reviews the bed tricks in the context of male fantasies. However, Desens did not focus on Fletcher's dramatic technique in association of the bed tricks or the development of his audience manipulation technique. The subject of this study includes plot types which are not defined as a bed trick, but nevertheless have close affinity to the convention in three other plays: *The Mad Lover* (1616), *Women Pleased* (1620), and *Little French Lawyer* (1620). The bed trick in *The Maid in the Mill* is omitted because Rowley, not Fletcher, presumably writes the scene with the bed trick[3].

In this study of Fletcher's plays, six exchanges of bedfellows or spouses are analyzed. Most of them are presented comically, although certain problematic elements sometimes can make the modern audience uncomfortable. First, two bed tricks utilized as a means of curing madness are reviewed. Second, a bed trick that also uses audience manipulation is reviewed in the context of a rape. Final analysis will center on three plots involving tricks by women intended to humiliate men.

1. The Bed Trick as a Treatment for Madness

The earliest bed trick scene authored by Fletcher involved a bed trick used as a means to cure madness. In early modern England, it was widely assumed that melancholy caused by unrequited love could be healed

through various ways, including "intercourse with substitute lovers" (Austern 221). In Fletcher's plays, a doctor or friends try to cure the madness of love-stricken characters through bed tricks. There does not appear to be any other example of this kind of bed trick in the forty-four plays that Desens identifies as using bed tricks[4].

The Two Noble Kinsmen, which was co-authored by Shakespeare and Fletcher, is a tragicomedy written in 1613. Two Theban princes named Palamon and Arcite both love Emilia, who is the sister-in-law to Theseus, the ruler of Athens. Theseus attacks the corrupt ruler of Thebes, Creon, and wins the war. Creon's nephews, Palamon and Arcite, dutifully defend the city. However, they are both taken captive and imprisoned in Athens. Through the prison's window, Palamon and Arcite watch Emilia and both fall in love with her. Arcite is eventually released from prison and told never to return to Athens. Ignoring the conditions of his prison release, he does indeed return disguised as a servant of Emilia. Meanwhile, the jailer's daughter, who has fallen in love with Palamon, releases him from the prison in an effort to gain his favor in love. When Palamon does not return to the jailer's daughter, she is driven to madness. In this scene, her unrequited love for Palamon is compounded by the guilt of her father's condemnation to death, which she had only imagined.

Thus, the bed trick as a cure for madness is introduced here[5]. In order to restore the sanity of the jailer's daughter, the doctor devises a plan where her fiancée poses as Palamon and has sexual intercourse with her as "Palamon." The jailer's daughter believes that the fiancée is Palamon and the doctor is convinced that she will be sane again "within these three or foure daies" (5.2.103)[6]. In the later scene, the jailer says, "she's well restor'd/And to be marryed shortly" (5.4.27-28).

This bed trick leaves the audience uncomfortable. There are differing viewpoints concerning the plot by critics. Some do not believe the jailer's report of his daughter's recovery (Potter 151). Joan Hartwig sees that the madness of the daughter is properly cured suggesting, "love of a particular person is not so important as the fancy suggests" (189). Mary Beth Rose also concluded that the daughter's "madness and cure are wholly encompassed in the comic mode" and the plot states, "what women want is the illusion of marrying a prince" (225-26). This uncomfortable solution regarding unrequited love seems to indicate the nature of love presented in this play; specifically, when Emilia, the heroine of the main plot, also cannot choose between two suitors.

Fletcher used this type of bed trick once more in the *Mad Lover* (1616). However, in this play the deceived party was a mad man and sexual intercourse does not occur. The character Memnon, a war hero and general, returns home and falls in love with the king's sister. Having lived his entire life in the army and lacking the social graces of a courtier, Memnon simply stares at her, repeats his simple declaration of love, and tries to kiss her. In a loutish manner, he offers his heart to Calis. As a way to reject his unrefined attempt at courtship, she takes his offer literally and demands his heart: "I dare accept it Sir/Tak't in my hand and view it" (1.2.93-94). Memnon, who is half mad by the love, takes her word literally and plans to take his heart out. His brother Polidor and his friends try to cure his madness. In the first plan, musicians present him two songs and a masque. The meaning of the songs declares that men who die because of love cannot get on the boat of Charon, which goes to the land of the dead. Instead, the men will turn to beasts. Memnon is affected from the songs and masque but does not fully recover.

The friends' second attempt involves a bed trick where a whore is called upon to present herself as Calis and sent to Memnon. The whore is "at first sight resembling" Calis, and "well cloth'd too" (4.5.9). Memnon is initially fooled and believes that he is with

Calis. The whore visits him, pretending to be Calis while repenting her past, cold behavior towards him. She offers to kiss him. He tries to kiss her hand but then realizes she is not the princess because her hand was very dirty. Meanwhile, the whore continues to insist that she is the princess but Memnon notices that she "stinkes like a poyson'd Ratt behind a hanging" and "a rotten Cabbage" (4.5.44-45). He tries to make her confess her true identity through a test to prove her royalty. He declares that he will bring a special lion which would show reverence to a person "sprung from royall blood" (56). The woman confesses herself to be a whore, and Memnon laughs at his friends and exits from the stage. As a result, the friends think him to be saner than before:

> *Eumenes*. I am right glad yet,
> He takes it with such lightnesse.
> *1. captaine*. Me thinkes his face too,
> Is not so clouded as it was; how he lookes? (4.5.64-66)

The bed trick they devised had failed. In this case, the person they tried to deceive had perceived the deceit before having sexual intercourse. Contrary to the expectations of the friends (and perhaps the audience), Memnon appeared to become saner although in later scenes, the story of his madness continues.

These two plays used the bed trick as a cure for madness. Similarly, both plays are tragicomedies and in both bed trick scenes, they are comically constructed. However, the two scenes differ in many respects. The scene involving the jailer's daughter could be viewed as a sexual violation. Specifically, the jailer's daughter is a virgin and men who have more power than her devise the bed trick. The doctor, fiancé, and her reluctant father make her conform to patriarchal values. They ignore her wish to be with her true love and trick her to have sexual intercourse with another man. On the contrary, it is less plausible to perceive Memnon as a victim. Memnon is a powerful general, and his friends planned the bed trick. If he had sexual intercourse with the whore, it is difficult to surmise this act would have hurt him. While the jailer's daughter could not see through the true identity of her lover and was passively cured through the sexual intercourse with another man, Memnon regains some of his sanity by actively detecting the deceit and laughing at the schemers. The bed trick of the jailer's daughter seems to be more conventional than *The Mad Lover* written in later years.

Although the two bed tricks differ in many respects, the plan to reveal the bed trick in the beginning of the scene is the same. Audience manipulation through the bed trick did not appear in either of these two plays.

2. Rape and Audience Manipulation with Bed Tricks

Since a bed trick requires deception regarding another's identity by at least one person having sexual intercourse, it is possible that the deceived party is violated sexually or the act is considered a rape. However, in *The Queen of Corinth* (1617), the victim of rape is the deceiver, not the deceived. Two rapes occur in this play, and the second rape is a bed trick in which one of the heroines willingly changes places with the intended victim of the rape. This sensational plot is important because it used a dramatic technique that manipulated the audience.

In this play, Theanor, the prince of Corinth, courted Merione, a virtuous lady, with the queen's consent before the drama begins. However, at the beginning of the play, Merione is to be betrothed to the Prince of Argos in order to end the war between Argos and Corinth. Theanor believes that he was wronged and plans with his courtiers "the desperate cure" which is "so foule, and full of danger" (1.1.61-62). At this point, the audience is not aware of the plan. In 1.4, the first rape occurs. Merione is abducted

by the prince's courtiers and appears ravished in the next scene. When Theanor, wearing a mask, appears on stage as the one who raped Merione, she does not recognize his identity but pleads with him to marry her. Theanor draws a dagger. Suddenly, six disguised persons enter "singing and dancing to a horrid Musick, and sprinkling water on her face" and Merione faints. In this scene, the identity of Theanor is unknown to the audience. Sensational and surprising activities occur on the stage; the only detail omitted from this sensational rape scene is the act of the rape itself.

The second rape is not presented with such detail, but audience manipulation is involved in the scene. Theanor decides to rape Beliza, Euphanes' fiancé, when his plan to falsely condemn Euphanes of the first rape fails. He shares his intention with Crates, a courtier who helped him plan the rape of Merione. Crates is disgusted by Theanor's foul intention of raping another woman without just cause. While repentant over the former act, Crates tells his brother, Euphranes, about Theanor's involvement in the first rape and the intention of the second rape. Euphanes and others decide "to rush upon him in the Act, and seize him/In the height of his security" (5.1.7-8).

Euphanes says that he has "won the Lady" (5.1.1) to participate in the plan. He does not say the lady's name and does not reveal the details of the plan. However, he provides some hints to the audience in this scene. Euphanes provides instruction concerning "the lady" to Merione's brother, Leonidas:

Euphanes. For the Lady,
I know your best respect will not be wanting:
Then to avoyd suspition and discovery,
I hold it requisite, that as soone as ever
The Queene hath seene her, she forsake the place,
And fit her selfe for that which is projected
For her good, and your honour.
Leonidas. If this prosper,
Believe it you have made a purchase of
My service and my life. (5.2. 11-19)

The plan is that "the lady" will exit after the queen has seen her in order to hide her true identity. The information about the identity of the "lady" is still missing, but since her "good" and Leonidas's "honour" is concerned with this scheme, the audience might suspect that the lady must be Leonida's sister, Merione.

When Theanor was seized after the second rape, Merione, disguised as Beliza, comes to the stage. The queen asks, "Who's that, Beliza?" Beliza's fiancé, Euphanes, calls out, "My worthiest, noblest Mistris." Merione exits from the stage without uttering a word. Since there is not much time for the audience to examine the identity of the actor, most of the audience, except for the shrewd ones, presumably does not notice the disguise. However, the exit of "the lady" was carried out exactly the way Euphanes had instructed, so the audience members who remember the instruction would also recognize the hint.

Merione's brother, Leonidas, reveals the perpetrator of the rapes in front of the queen:

Leonidas. Then know, we have found out the Ravisher
Of my poore Sister, and the place, and meanes
By which th'unfortunate though faire *Beliza*
Hath met a second violence.
Euphanes. This confirmes
What but before I doubted, to my ruine:
My Lady ravish'd. (5.2.60-65)

Euphanes is lying since he knows the woman is Merione, not Beliza. However, the audience presumably cannot detect the lie since the true identity of the second victim is not yet explicitly revealed.

Before revealing the victim's true identity, an elaborate trial scene is presented. Based on the law of Corinth, the rapist is to be sentenced either to death

or to marriage to the victim without dowry. The sentence depends on the will of the victim. However, the wills of the two victims in this case differ: Merione wants to marry Theanor while Beliza wants his death. The two women argue with each other. The queen sentences her son Theanor to death and the repentant Theanor pleads to be married to Merione before he is executed. After the Queen approves the plea, two men appear on the stage: a priest to marry them and an executioner. After the queen confirms the marriage between Merione and Theanor, Euphanes reveals his knowledge of the previous events after learning the identity of the ravisher. The victim of the second rape is found to be Merione, not Beliza. The queen offers herself to the prince of Argos for marriage, and the play ends abruptly.

The pattern of the bed trick conforms to Bowden's definition of the "basic formula." The motivation of the bed trick is typical; to preserve the intended victim's virginity while also protecting the other woman's position as a wife (in this case, intended wife) of the deceived man. However, what makes this bed trick unique is that it involves a rape, not the usual sexual encounter. As Desens observes, Fletcher seems to be "seeking the maximum amount of audience titillation" in this play (112). Gossett reviewed the play as an innovative handling of a rape plot, whose conventional handling was to make victims die while executing the rapists. She states that the "audience would have been passionately surprised by the characterization, dilemma, and solution presented here" (315). Bamford compares this play to Shakespeare's *Measure for Measure*, which is a "challenging study of temptation, sin, mercy and justice." She critiques the play as a "crudely sensational thriller" (143). She criticizes the bed trick in this play as "gratuitous," and states its only purpose is "to provide the forensic excitements of last act" (143). Critics seem to agree on the fact that this particular use of the bed trick is highly sensational.

Fletcher's play without doubt thrilled his audience through the use of sensationalism. However, he also gave his audience an opportunity to enjoy the play by manipulating and surprising them by hiding information and providing subtle hints.

3. Comic Bed Tricks: Women's Devices to Humiliate Men

The third type of bed trick Fletcher created involves women devising a joke or a desperate trick against men. The first bed trick using this formula was written before *The Queen of Corinth* and the other two plays were written in later years.

In one sex-war comedy, entitled *Monsieur Thomas* (1615), men and women who like each other nevertheless trick each other. In Act 5 of *Monsieur Thomas*, a man plans to gain access to a woman's bed cross-dressed as his own twin sister. However, the woman, who was already informed of his intension by his sister, devises a bed trick using her dark-skinned maid to surprise the cross-dressing man[7].

In Fletcher's earlier sex-war comedy called *Scornful Lady* (1610), there is also the appearance of a cross-dressing man who gains access to a woman's bed to have sexual intercourse. A cross-dressing man named Welford successfully gets access to the bed of Martha. She believed Welford was a wronged woman and took pity on her (him). When the audience sees Martha the next time, she has already slept with Welford. By the end of the play, it is anticipated that the two characters are happily married.

Thomas in *Monsieur Thomas* was not fortunate like Welford. In this play, Thomas and Mary love each other, but Mary rejects Thomas because of his wild behavior. In Act 5, Thomas visits Mary wearing women's apparel and impersonates his twin sister, Dorothy. However, Dorothy had already informed Mary of his disguise. Mary and Dorothy work together to devise a trick against him with two of their maidservants. A maid pretends to mistake him

for his sister and escorts him to Mary's bed to sleep. However, a Moorish maid named Kate is waiting there[8]. Mary and Dorothy are in the room hiding and watching Thomas and Kate. In the darkness, Thomas amorously speaks words of seduction while believing the woman he is seducing is Mary. Meanwhile, the hidden women are laughing and making fun of him. Before making love, he lights a candle and discovers the dark-skinned woman lying there instead of his beloved Mary, and cries, "Devil! Devil!" Realizing he had been tricked, he beats the dark-skinned maidservant and escapes from the room. Mary and Dorothy give compensation to Kate for the beating in the form of a petticoat and waistcoat. It is typical for ladies to use maidservants and whores as a substitute in bed tricks. The audience is expected to laugh at the beguiled Thomas alongside Mary and Dorothy. However, the fact that the dark-skinned maidservant is beaten and called "devil" after being forced to replace the lady in the scene is uncomfortable for a modern audience.

Similar to the two scenes when the bed tricks are used as a means to cure madness, the audience knows beforehand the bedfellow has been exchanged. The dramatic irony is the source of pleasure for the audience, and audience manipulation had not yet been introduced into this play.

A few years after *The Queen of Corinth*, two other plot sequences of this kind were presented in the year 1620. However, these plots do not qualify as bed tricks, since sexual intercourse or intention was not involved in the scenes. In one scene, the audience is informed of the exchange of persons in the dark beforehand, but that is not the case in the other scene.

In the subplot of *Women Pleased* (1620), a usurer's wife named Isabella intends to have a love affair with a merchant named Rugio. Isabella waits for him in the absence of her husband while sleeping in a chair with a piece of string tied around her finger for Rugio to pull. Her husband returns and discovers the string around his wife's finger. Correctly guessing her intention, he removes the string from her finger and follows the string out of the room. Meanwhile, Isabella wakes and notices that her intention was discovered and assumes her husband will beat her. She persuades her servant, Jaquenett, to sit in place of her and leaves the room with a candle. The husband comes back to the dark room and beats Jaquenett, believing she is Isabella. When the husband brings the neighbors over to view Isabella's injury and humiliate her, uninjured Isabella is quietly sitting in the chair. This situation humiliates the husband and portrays him as mad. This plot does not involve the exchange of bedfellows; instead, it involves the husband's expectation of his wife's adultery, intention of beating, and the exchange of two women in the dark. This scene is a variation of the bed trick. At the onset of the scene, the audience is made aware of the exchange of the two women since Isabella explicitly asks Jaquenett to sit in her place.

The third scene, which contains an exchange of persons in order to humiliate men, is in Act 3 of *The Little French Lawyer* (1620)[9]. The audience is kept in suspense throughout the play, as they are not informed of the intention of the deceiver. In this play, the wife of an old man deceives her former lover and his friend with a proposal of an exchange of a bedfellow without sexual encounter. She later humiliates the men with another exchange of a bedfellow. Lamira was formally courted by Dinant, but is married to Champernell, an older lame man. Deserted Dinant furiously abuses Champernell and tries to have an affair with Lamira. She responds favorably to his advance. She tells Dinant and his friend Cleremont that her husband Champernell does not have sex with her: "my Lord sleeps now, and alas,/Each night he only sleeps" (3.3.24-25). She asks Cleremont to sleep in her bed besides Champernell, while she is with Dinant.

Lamira. Thus then, in my place,
You must lye with my Lord.
Cleremont. With an old man?
Two beards together? that's prepostrous.
Lamira. There is no other way, and though 'tis dangerous,
He having servants within call, and arm'd too,
Slaves feed to act, all that his jealousy,
And rage commands them, yet a true friend should not
Checke at the hazard of a life.
Cleremont. I thanke you,
I love my friend, but know no reason why
To hate my self, to be a kind of pander,
You see I am willing,
But to betray mine owne throat you must pardon.
Dinant. Then I am lost, and all my hopes defeated,
Were I to hazard ten times more for you,
You should find, *Cleremont*——
Cleremont. You shall not out
doe me,
Fall what may fall, i'll do't. (3.3.34-49)

In this funny exchange, Cleremont is ready to undertake the noble task of helping his friend. However, Lamira asks him to impersonate her and lie in bed with her old husband. Clermont views the request as preposterous. Furthermore, Lamira adds that there would be a danger to his life if he is discovered. Although he tries to reject her request, he could not deny his friend's pleading. Clermont finally concedes as he tries to conform to an ideal of true friendship.

Lamira's plot to humiliate and punish Dinant and Cleremont is a bed trick without sexual intercourse. In an earlier scene, Lamira persuades her husband to give her free rein and to resist jealousy. The audience knows that she has plotted against Dinant. Lamira's husband, Champernell, comes to the stage and secretly watches Lamira's actions. Lamira runs from Dinant around her house, kisses Dinant, speaks loudly, orders her nurse to serve them wine, and orders music. Cleremont, who comes to the upper level of the theatre, believes he is in bed with her sleeping husband. However, the audience knows he is not sleeping since Champernell is on the stage. Dinant and Cleremont are worried about waking up the husband and servants. When they finally realize Lamira tricked them, two servants and Champernell's niece, Anabell, come to the upper level of the theatre. They all learn that the sleeping companion of Cleremont was Anabell. Cleremont is ashamed that he feared his bedfellow. These double exchanges of bedfellows—the exchange of Lamira and Cleremont and the exchange of Champernell and Anabell—are not exactly bed tricks. There is no sexual intercourse between Cleremont and Anabell involved. However, certain sexual tension is present, and later in the play the two bedfellows have sex. As a result, it seems these events demonstrate a variation of the bed trick where the elements are scattered throughout the play.

Lamira's trick against Dinant and Cleremont seems to be comically presented to the audience. Mary and Dorothy's trick against Thomas in *Monsieur Thomas* is similar. However, there is a difference. First, the audience does not know the intention of Lamira or the identity of Cleremont's bedfellow. Second, the play's judgement on Lamira's action changes later in the play. Dinant and Cleremont later devise a plot against the women and the audience is dragged through many turns of events. Finally, Lamira admits her fault of humiliating him and begs to be forgiven. In *The Little French Lawyer*, the author's intentions and plot turns keep the audience in suspense.

The women's tricks of humiliating men in Fletcher's plays are all comical. Two plays written in later years have devices similar to bed tricks but without elements of sex. In one play, *The Women Pleased*, Fletcher did not use audience manipulation, but instead prioritized dramatic irony. In *The Little French Lawyer*, Fletcher used two exchanges of

bedfellows but did not reveal Lamira's deceptive intent. He gave hints but did not reveal information about the identity of the exchanged person lying in Champernell's bed. In this longer scene, Fletcher amuses the audience through suspense and surprise. In the latter part of his career, it seems that Fletcher used either audience manipulation or dramatic irony wherever he thought it was appropriate.

Conclusion

In his earlier works, Fletcher's bed-tricks were used as a cure for madness and included a comical bed-trick with male cross-dressing. In these early bed tricks, Fletcher did not hide information from the audience. Audience manipulation is first introduced in *The Queen of Corinth* together with the shocking and sensational plot involving two rapes. He concealed the identity of the woman who was raped, although included hints for the shrewd audience members to help them identify the true victim. After this play, he did not use bed tricks[10]. Alternatively, he used an exchange of women in darkness and an exchange of bedfellows, both of which were without sexual encounters. *The Little French Lawyer* was not only the second play but also the last play where he used the audience manipulation technique employing the exchange of persons.

Fletcher concealed information from the audience in only two out of six scenes with bed tricks or their equivalent; these were written in the later years of his career. All of the scenes, except for one in *The Queen of Corinth*, were comically presented to audience. Fletcher preferred to make comical scenes out of bed tricks and tended to choose dramatic irony over surprise.

Notes

1. See "Development of John Fletcher's Dramaturgical Techniques in Scenes with Women's Songs" by Miwa Tsujikawa and 辻川美和 (Miwa Tsujikawa)'s other studies written in Japanese.

2. The dates of the plays in this essay are from *British Drama 1533-1642: A Catalogue* by Martin Wiggins, unless otherwise mentioned. When Wiggins indicates the "limits" and "best guess" of the dates, I used the date of "best guess."

3. The authorial shares of the play seem to be as follows: Fletcher: 1; 3.2-3; 5.2a (to entrance of Antonio), Rowley: 2; 3.1; 4; 5.1,2b (from entrance of Antonio to end) (Hoy SB13: 96-97). The scenes related to the bed trick are in 4.3, 5.1, and 5.2b, so the author of the bed trick scenes is presumably Rowley, not Fletcher.

4. See "Appendix: A Quick Over view of the Bed-Tricks of English Renaissance Drama" on pp.143-51 of *The Bed-Trick in English Renaissance Drama* by Marliss C. Desens. The bed trick of *The Mad Lover* is not included in this list either.

5. The scenes depicting this bed trick are 4.3, 5.2, and Palamon and jailer's conversation in 5.4. According to *The New Oxford Shakespeare: Authorship Companion* edited by Gary Taylor and Gabriel Egan, The attribution on the prose scene of 4.3 is disputed and 5.4 (5.6 by *The New Oxford Shakespeare*) is written by Shakespeare, but 5.2 (5.4 by *The New Oxford Shakespeare*) is by Fletcher (Taylor 590). According to Hoy, 4.3 and 5.2 is by Fletcher, 5.4 is by Shakespeare (SB015: 71).

6. All the quotations of Fletcher's plays in this study are from *The Dramatic Works in the Beaumont and Fletcher Canon*.

7. This bed trick has many elements to consider and has been mentioned in the context of male fantasy by Desens (98-100), in the context of image of black-skinned woman by Denmead (162-63), and in the context of previous discovery by Bowden (114).

8. Kate is "Moore" in the text. Most of the critics including Wiggins see Kate as a maid with dark skin. Wiggins states her as "Kate, Mary's blackamoor maid" (Vol. 6, 486). However, the editor Hans Walter Gabler of this play in *The Dramatic Works in the*

Beaumont and Fletcher Canon described Kate as "Kate, disguised as a Moore" (Vol. 4, 426).

9. The authorial shares seem to be as follows: Fletcher: 2; 3.1-2, 4; 4.1-4, 6b (from entrance of La Writ to end); 5.1a (to second entrance of Cleremont), 2, Massinger: 1; 3. 3; 4.5, 6a (to entrance of La Writ), 7; 5.1b (from second entrance of Cleremont to end), 3 (Hoy SB9: 150).

10. Although a bed trick occurs in *The Maid in the Mill* (1623), Fletcher's coauthor Rowley is presumed to have written the scene in which it occurs. See note no. 3 for details.

Works cited

Primary texts

The Dramatic Works in the Beaumont and Fletcher Canon. 10 vols. General editor, Fredson Bowers. Cambridge UP, 1966-96.

Secondary texts

Austern, Linda Phyllis. "Musical Treatments for Lovesickness: The Early Modern Heritage" *Music as Medicine: The History of Music Therapy since Antiquity,* edited by Peregrine Holden, Ashgate, 2000, pp. 213-45.

Bamford, Karen. *Sexual Violence on the Jacobean Stage*. St. Martin's Press, 2000.

Bowden, William R. "The Bed Trick, 1603–1642: Its Mechanics, Ethics, and Effects," *Shakespeare Studies: An Annual Gathering of Research, Criticism, and Reviews,* Vol. 5, 1969, pp. 112–23.

Denmead, Louise. "The Discovery of Blackness in the Early-Modern Bed-Trick." *The Invention of Discovery, 1500-1700,* edited by James Dougal Fleming, Ashgate, 2011, pp. 153-66.

Desens, Marliss C. *The Bed-trick in English Renaissance Drama: Explorations in Gender, Sexuality, and Power*. U of Delaware P, 1994.

Gossett, Suzanne. ""Best Men are Molded out of Faults": Marrying the Rapist in Jacobean Drama." *English Literary Renaissance,* Vol. 14, No. 3, *Woman in the Renaissance,* 1984, pp. 305-27. *JSTOR*. Accessed on 21 March 2018.

Hartwig, Joan. *Shakespeare's Tragicomic Vision.* Baton Rouge, 1972.

Potter, Lois. Introduction. *The Two Noble Kinsmen,* by John Fletcher and William Shakespeare, revised ed., Bloomsbury Arden Shakespeare, 2015.

Rose, Mary Beth. *The Expense of Spirit: Love and Sexuality in English Renaissance Drama*. Cornell UP, 1988.

Taylor, Gary and Gabriel Egan, editors. *The New Oxford Shakespeare: Authorship Companion*. Oxford UP, 2017.

Tsujikawa, Miwa. "Development of John Fletcher's Dramaturgical Techniques in Scenes with Women's Songs" 『ほらいずん : 英文学研究と批評』第 48 号、早稲田大学英米文学研究会、2016 年、pp. 1-17。

辻川美和

---.「ジョン・フレッチャーの劇における歌による癒し」『レオルニアン : 言語文化論叢』日本英語教育英学会、2018 年、pp. 51-68。

---.「ジョン・フレッチャーの劇における男装――観客操作の方法とコンベンションの利用法の変遷」『ほらいずん : 英文学研究と批評』第 46 号、早稲田大学英米文学研究会、2014 年、pp. 1-15。

---.「ジョン・フレッチャーの劇における超自然的存在と歌―パロディと観客操作」演劇博物館紀要『演劇研究』第 39 号、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2016 年、pp. 57-74。

「人間科学」第36巻　第1号（2018年9月）

研究ノート

ショパンの前打音に関する一考察
―《バラード》第３番 変イ長調 作品47を例として―

岡部　玲子（常磐大学人間科学部）

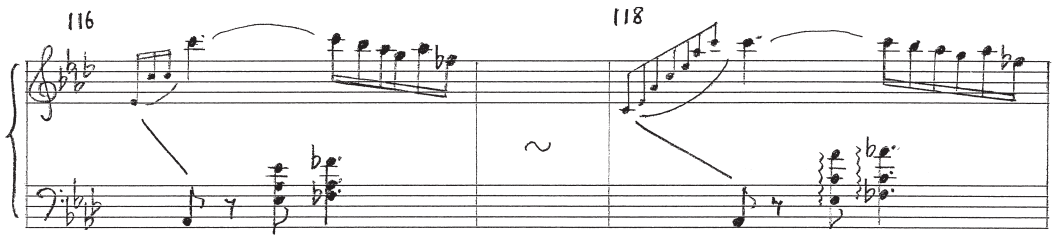
A Study on Appoggiaturas in Music by Chopin

Reiko OKABE（*Faculty of Human Science, Tokiwa University*）

１．はじめに

ショパン F. Chopin（1810-1949）の前打音[1]は、拍の前に出して弾くのではなく、拍の頭で他方の手と同時に弾き始める奏法であることは広く知られている。単音による前打音のみでなく、複数の音から成る場合も同様である。本論は、その前打音の奏法が譜面上にどのように示されてきたのか、演奏はどのように変化してきたのかを調査し、それらの関係を考察することが目的である。

例えば《バラード》第３番の場合、第116、118、120、122、231、233小節において、右手１拍目にそれぞれ２～７個の前打音が現れる。弟子のデュボア C. Duboisの楽譜には、それらの箇所に、右手の前打音の最初の音と左手の１拍目の音を結ぶ線が鉛筆で付加されている（譜例１）。これらの線は、右手の前打音の最初の音と左手の１拍目の音を同時に弾くことを示している。本論では、まず、この情報が後に出版されたエディションにおいて譜面上にどのように反映されているかを調査・考察する。そして、それらの箇所がどのように演奏されてきたのかを、各年代における代表的なピアニストの演奏の録音を調査し、楽譜との関連について考察する。



譜例 1.《バラード》第３番 変イ長調 作品47 第116、118小節 デュボアの楽譜
（右手前打音の最初の音と左手１拍目の音を結ぶ線が鉛筆で付加されている）

２．ショパン《バラード》第３番 変イ長調 作品 47 の資料における前打音の奏法表記

《バラード》第３番 変イ長調 作品 47 の資料と出版の経緯については、以下の通りである（Samson 2006）。資料には、手稿譜、初版、ショパンの弟子の楽譜が含まれるが、それらを通し番号で示す。

【手稿譜】

1．自筆譜：紛失。写真複写はポーランド国立ショパン研究所 Narodowy Instytut Fryderyka Chopina（以下､NIFC と表記）所蔵（F.1433）。1841 年 10 月。ドイツ初版の版下となった。

2．筆写譜１：フォンタナ J. Fontana による筆写譜、紛失。フランス初版の版下となった。

3．筆写譜２：サン＝サーンス C. Saint-Saëns による筆写譜。パリ、フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France 所蔵（Ms. 108）。ほぼ確実にフォンタナによる筆写譜を基としている。ショパンの死後に筆写された可能性も有るが、これにより紛失した「2. フォンタナによる筆写譜」を復元できるため、資料に含める。

【初版】

4．フランス初版

4-1　第１刷、1841 年 11 月。パリ、シュレザンジェ社 M. Schlesinger、プレート番号 M.S. 3486。

4-2　フランス初版第１刷の後の版､1841 年 12 月。パリ、シュレザンジェ社、プレート番号 M.S. 3486。

（4-1 と 4-2 との間に相違がない箇所では、単に「フランス初版」と表記する）

5．ドイツ初版　1842 年１月。ライプツィヒ、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社 Breitkopf & Härtel、プレート番号 6652。

6．イギリス初版　1842 年１月 20 日登録。ロンドン、ウェッセル社 Wessel、プレート番号 5299。

【ショパンの弟子の楽譜】

7．デュボアの楽譜集：フランス初版。パリ、フランス国立図書館所蔵［Rés. F.980（II, 12）］。

8．スターリング J. Stirling の楽譜集：フランス初版。パリ、フランス国立図書館所蔵［Vma. 241（V, 47）］。

9．イェンジェイェーヴィチ L. Jędrzejewicz の楽譜集：フランス初版。ワルシャワ、NIFC 所蔵［M/176］。

10．シェルバトフ M. de Scherbatoff の楽譜集：フランス初版。ケンブリッジ、ハーバード大学図書館ホートン文庫 Houghton Library 所蔵［f.Mus. C.4555 B.846 c］。

以上の資料における当該箇所（第 116、118、120、122、231、233 小節）の表記を纏めたものが表１（pp. 24-25）上方の「資料」1 ～ 10 の部分である。表１「資料」1 ～ 10 より、これらの資料の中で、前打音に関する記入は、デュボアの楽譜の第 116、118、120、122、231、233 小節においてみられるが、他の資料には現れていないことがわかる。

自筆譜においては、左手の１拍目の位置が少し左側にずれているが、すべての初版で左手１拍目の前に右手の前打音が入り、前打音が終わった親音符のところに左手１拍目が印刷されている。

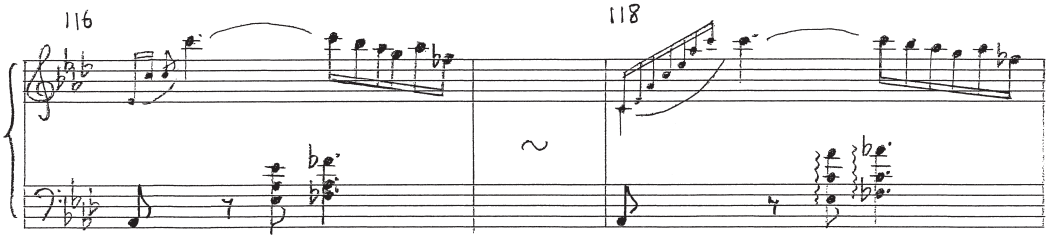
３．ショパンの死後の出版譜における前打音の奏法表記

ショパンの死後に出版された楽譜には、当然のことであるが、ショパン自身は一切かかわっていない。上述した弟子のデュボアの楽譜に加筆されたショパンの指示が、ショパンの死後に出版されたエディションに現われているかどうか、そして、現われている場合には、どのような表記で示されているかを纏めたものが、前掲の表１「各版」1 ～ 30 の部分である。各版の詳細については、表１の備考欄に記述した。

表１「各版」1 ～ 30 から、最も早く奏法の指示があったのは、著作権消滅後の最初期（1880 年頃）に出版されたエディションの中の 3. KK と 4. TK である。3. KK は左手バスにオクターヴを付加するなど、校訂者の記入が多い独自の版である。第 116、118、120、122 小節では、左手１拍目が右手前打音の最初の音の位置に揃えられており（譜例 2-1）、第 231、233 小節では、前打音の開始と同時に左手バスにオクターヴ下の音が前打音として付加されている（譜例 2-2）。その

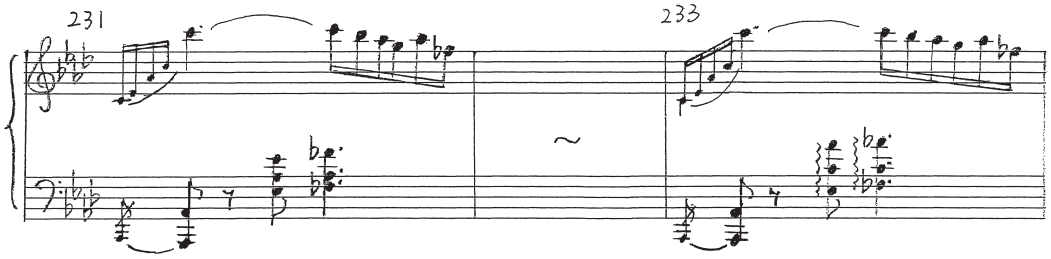
結果、前打音の開始と同時にバスの音が鳴ることになる。4. TKは奏法に関して脚注に「アルペッジョはバスと同時に始まる」と書かれている（ここではアルペッジョは前打音のことを指している）。

前打音を弾き始める位置が譜面の中に明白に線で示されているエディションは8. HS/vPで、1900年代になってからである。ここでは、前打音に7つの音がある第118、122小節と4つの音がある第231、233小節において、前打音の最初の音を左手1拍目と結ぶ点線とともに、右手の親音符と左手の3拍目を結ぶ点線も印刷されている（譜例3）。



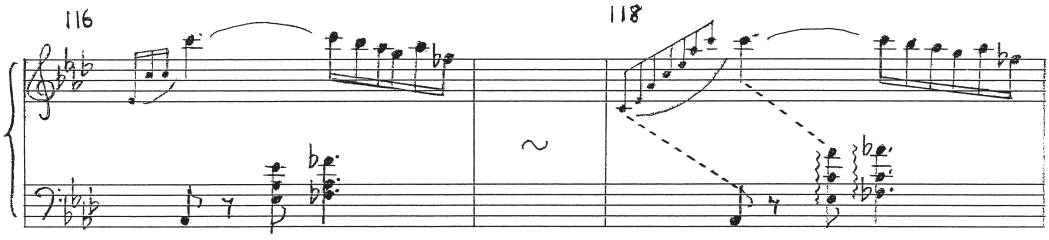
譜例2-1.《バラード》第3番 変イ長調 作品47 第116、118小節 Klindworth版

（左手1拍目が右手前打音の最初の音の位置に揃えられている）



譜例2-2.《バラード》第3番 変イ長調 作品47 第231、233小節 Klindworth版

（前打音の開始の位置に左手バスにオクターヴ下の音が前打音として付加されている）



譜例3.《バラード》第3番 変イ長調 作品47 第116、118小節 Herrmann Scholtz/v.Pozniak版

（第118小節において、前打音の最初の音を左手1拍目と結ぶ点線、右手の親音符と左手の2拍目とを結ぶ点線が付加されている）

表1.　ショパン《バラード》第3番 変イ長調 作品47　前打音の奏法に関する指示 （出版年代順）

		資料名、校訂者名等	略号	出版年	第116小節 前打音の数:3個	第118小節 前打音の数:7個	第120小節 前打音の数:2個	第122小節 前打音の数:7個	第231小節 前打音の数:4個	第233小節 前打音の数:4個
資料	1	自筆譜	A1		なし	なし	なし	なし(注1)	なし(注1)	なし
	2	筆写譜1	CF							
	3	筆写譜2	CS		なし	なし	なし	なし	なし	なし
	4-1	フランス初版1	F1	1841	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	4-2	フランス初版2	F2	1841	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	5	ドイツ初版	G	1842	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	6	イギリス初版	E	1842	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	7	デュボアの楽譜	D	1841	前打音最初の音と左手1拍目を結ぶ線が鉛筆で付加	前打音最初の音と左手1拍目を結ぶ線が鉛筆で付加	前打音最初の音と左手1拍目を結ぶ線が鉛筆で付加	前打音最初の音と左手1拍目を結ぶ線が鉛筆で付加	前打音最初の音と左手1拍目を結ぶ線が鉛筆で付加	前打音最初の音と左手1拍目を結ぶ線が鉛筆で付加
	8	スターリングの楽譜	S	1841	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	9	イェンジェイェーヴィチの楽譜	J	1841	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	10	シェルバトフの楽譜	Sch	1841	なし	なし	なし	なし	なし	なし
各版	1	Breitkopf und Härtel	BH	[1878]	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	2	Herrmann Scholtz	HS1	1879	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	3	Karl Klindworth	KK	1880－1885	なし(注2)	なし(注2)	なし(注2)	なし(注2)	なし(注3)	なし(注3)
	4	Theodor Kullak	TK	1880	脚注:「アルペッジョはバスと同時に始まる」	なし	なし	なし	なし	なし
	5	Carl Reinecke	CR	[1880-1885]	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	6	Carl Mikuli	CM	1894	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	7	Raoul Pogno	RP	1902	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	8	Herrmann Scholtz/v.Pozniak	HS/vP	[1905]	なし	点線2本あり(注4)	なし	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)
	9	Ignazy Freidman	IF	1913	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	10	Claude Debussy	CD	1915	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	11	Rafael Joseffy	RJ	1916	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	12	Leonid Kreutzer		1924	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	13	Alfred Cortot	ACo	1929	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	14	Edouard Ganche	EG	1932	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	15	Vladimir de Pachmann	VP	1935	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	16	Alfredo Casella	ACa	1946	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	17	井口基成	MIJ	1949	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	なし	なし
	18	Ignacy Jan Paderewski	IP	1950	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	19	レオニード・クロイツァー	LKJ1	1951	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ直線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ直線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ直線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ直線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ直線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ直線あり
	20	Attilio Brugnoli & Pietro Montani	BM	1955	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	21	堀内敬三	KHJ	1955	なし	点線2本あり(注4)	なし	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)
	22	全音楽譜出版社	ZOP	1957	なし	点線2本あり(注4)	なし	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)
	23	音楽之友社	OTP	1958	なし	点線2本あり(注4)	なし	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)	点線2本あり(注4)
	24	Jan Ekier	JE1	1967	脚注:「第116,118,120,122,231,233小節のすべてにおいて、両手の最初の音を同時に弾くように、ショパンが弟子のひとりの楽譜に書き込んだ」				脚注:「p.39の脚注を参照」(p.39の脚注は左欄を指す)	
	25	レオニード・クロイツァー	LKJ2	1973	巻末注:「ここと次のパッセージは右手の1番目の音符がバス音と同時にひびかなければならない」		巻末注:「ここと次のパッセージは右手の1番目の音符がバス音と同時にひびかなければならない」		なし	なし
	26	Ewald Zimmermann	EZ	1976	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	27	Jan Ekier(ウィーン原典版)	JE2	1986	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり(「演奏上の注意」にコメント有り)	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり
	28	Jan Ekier	JE3	1997	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり
	29	Jim Samson	JS	2006	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり、( )付。巻末にもコメントあり。	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり、( )付。巻末にもコメントあり。	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり、( )付。巻末にもコメントあり。	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり、( )付。巻末にもコメントあり。	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり、( )付。巻末にもコメントあり。	前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線あり、( )付。巻末にもコメントあり。
	30	Norbert Müllemann	NM	2008	脚注:「弟子の楽譜ODにおいて第116,118,120,122小節に右手最初の音と左手最初の音を同時に弾く手書きの指示がある」(ODは表1における 7.デュボアの楽譜)				脚注:「弟子の楽譜ODにおいて右手最初の音と左手最初の音を同時に弾く手書きの指示がある」(ODは表1における 7.デュボアの楽譜)	

(注1) 左手1拍目の位置が少し左側にずれている。
(注2) 左手1拍目が右手前打音の最初の位置に揃えられている(譜例2-1参照)。
(注3) 前打音の開始と同時に左手バスにオクターヴ下の音が前打音として付加されている(譜例2-2参照)。
(注4) 前打音の最初の音と左手1拍目を結ぶ点線とともに、右手の親音符と左手の2拍目を結ぶ点線も付加されている(譜例3参照)

その他の箇所における指示	備考
なし	紛失。写真複写：NIFC所蔵（F.1433）。
なし	紛失、フランス初版の製版用自筆譜。
なし	サン＝サーンスによる筆写譜：パリ、フランス国立図書館所蔵（Ms. 108）。ほぼ確実にフォンタナによる筆写譜を基としているため筆写譜1が復元可能となる。
なし	1841年11月出版　Maurice Schlesinger, Paris, plate no. M.S.3486.
なし	1841年12月出版　Maurice Schlesinger, Paris, plate no. M.S.3486.
なし	1842年11月出版　Breitkopf und Härtel, Leipzig, plate no. 6652.
なし	1842年1月20日登録　Wessel & Co, London, plate no. 5299
なし	F2を使用。
なし	F2を使用。
なし	F2を使用。
なし	F2を使用。
なし	Friedrich Chopin's Werke. Erste kritisch durchgesehene Gesammtausgabe Band Ⅰ, BALLADEN für das Pianoforte. Leipzig: Breitkopf und Härtel. Plate C. I. 3. Woldemar Bargiel (1828–1897), Johannes Brahms (1833–1897), Auguste Franchomme (1808–1884), Franz Liszt (1811–1886), Carl Reinecke (1824–1910), Ernst Rudorff (1840–1916), Leipzig: Breitkopf & Härtel. （以下書誌情報はChomiński & Turło 1990と現物による）
なし	Sämtliche Pianoforte-Werke, Band Ⅱ (pp.296–304). Leipzig: C.F. Peters, [1879]. Plate 6216.
なし	Oeuvres complètes de Frédéric Chopin, Band 1: Ballades (pp.20–28). Berlin: Bote & Bock, [1880]. Plate 12273.
なし	Klavierwerke. Instructive Ausgabe, Vol.Ⅲ: Ballades、Berlin: Schlesinger'sche Buch-und Musikhandlung, New York: G. Schirmer. Plate S. 7288(3).
なし	Pianoforte-Werke von F.CHOPIN. Neue revidirte Ausgabe, mit Fingersatz zum Gebrauch im Conservatorium der Musik zu Leipzig versehen von CARL REINECKE, Leipzig: Breitkopf und Härtel. Plate V.A49.
なし	Complete Works for the Piano, Vol.Ⅴ: Ballades (pp.26–36) , New York: G. Schirmer, 1894: Plate 11490. 1934: Plate 36391.
なし	Chopin Ballades Impromptus. Durchgesehen und nach den überlieferten Originalen bezeichnet von Raoul Pugno, Wien: Universal Edition.
なし	Blladen unt Impromptus von FR.CHOPIN, Kritisch revidirt und mit fingersatz(sic) versehen von Herrmann SCHOLTZ, Neue Ausgabe von BRONISLAW VON POZNIAKS, Leipzig: C.F. Peters.Nr.1905. Plate 9056,11567.
なし	Frédéric Chopin Balladen und Impromptus. Herausgegeben von Ignaz Freidman, Leipzig: Breitkopf & Härtel. Plate VA3815
なし	Œuvres completes pour piano: Ballades & Impromptus, Paris: Durand & Fils. Plate D. & F. 9700.
なし	Complete Works for the Piano, Vol.5: Ballades (LMC 31) (pp.28–41), New York: G. Schirmer, 1916. Plate 25646.
なし	Chopin Ballade Nr.3 As-Dur op.47 (Leonid Kreutzer) Tonmeistet-Ausgabe Nr.163 Verlag Ullstein.
なし	Édition de Travail des Œuvres de Chopin Ballades, Paris; Edition Salabert. Plate E.M.S 5138.（東京：全音楽譜出版、八田淳訳 1999）
なし	The Oxford original Edition of Frédéric Chopin. Edited from the original edition and the Manuscripts by Edouard Ganche, Ballades, London: Oxford University Press.
第26･28小節の2個の前打音に前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ点線あり。第235,236小節右手3拍目の2個の前打音にも左手3拍目と結ぶ点線あり。	Chopin. With the authentic fingering and phrasing of Vladimir de Pachmann. Transcribed and with notes by Marguerite de Pachmann-Laborí, London: Augener. Plate17424.
第26･28小節の2個の前打音に、前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ直線あり。	F. Chopin. Ballate e Fantasia, Milano; Edzioni Curci (renewed 1974).
なし	世界音楽全集《ピアノ篇》ショパン集Ⅰ、東京：春秋社。（第10刷1970）
「この版の特徴について」の6)で前打音の最初の音を拍の頭に合わせる記述あり。	Fryderyk Chopin. Dzieła wszystkie Ⅲ, Ballady. Redakcja Ignacy Jan Paderewski, Ludwik Bronarski, Józef Turczyński, Kraków-Warszawa: Polskie Wydawnictwo Muzyczne-Instytut Fryderyka Chopina.（パデレフスキ編　ショパン全集Ⅲ、東京：ジェスク音楽文化振興会、アーツ出版 1991）
第26･28小節の2個の前打音にも前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ直線あり。第235,236小節右手3拍目の2個の前打音にも左手3拍目と結ぶ直線あり。	ショパンピアノ全集 Vol. 2、バラードⅡ、東京：龍吟社。
第26小節：脚注に前打音を拍前で弾く譜例あり。	Chopin. Ballate per Pianoforte(Brugnoli – Montani), Milano: Ricordi.
なし	世界大音楽全集楽篇第19巻、ショパンピアノ曲集Ⅱ、東京：音楽之友社。
なし	全音ピアノライブラリー、ショパンバラードとアンプロンプチュ、東京：全音楽譜出版社。
なし	ショパン　バラードとアンプロンプチュ、東京：音楽之友社。
なし	Wydanie narodowe dzieł Fryderyka Chopina 1, redaktor naczelny: Jan Ekier, Ballady, Warszawa: Towarzystwo im. Fryderyka Chopina, Polskie Wydawnictwo Muzyczne.
なし	東京：音楽之友社。
なし	Frédéric Chopin, Uetext, Nach Eigenschiriften, Abschriften und Erstausgaben, Herausgegeben von Ewald Zimmermann, Fingersatz von Hans-Martin Theopold, München: G. Henle.
なし	Wiener Urtext Edition, Chopin Balladen, Jan Ekier, Wien: Musikverlag Ges.m.b.H. & Co., K.G.、東京：音楽之友社。
なし	Wydanie narodowe dzieł Fryderyka Chopina, Uetext, redaktor naczelny: Jan Ekier, Ballady op. 23, 38, 47, 52, Warszawa: Fundacja Wydania Narodowego, Polskie Wydawnictwo Muzyczne.
なし	The complete Chopin, A new critical edition, Ballades, Uetext, edited by Jim Samson, London; Edition Peters.
なし	Frédéric Chopin, Uetext, Herausgegeben von Norbert Müllemann, Fingersatz von Hans-Martin Theopold, München: G. Henle.

次いで、15. VP（1935年）では、第26、28小節の2個の前打音に最初の音と左手の1拍目を結ぶ点線、および、第235、236小節右手3拍目の2個の前打音にも左手3拍目と結ぶ点線が印刷されている。しかし、デュボアの楽譜で加筆された第116、118、120、122、231、233小節には何も指示がない。16. Aca（1946年）においては、第26、28小節の2つの音による前打音に対して前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ直線が印刷されているが、他の箇所には指示がない。17. MIJ（1949年）では、第116、118、120、122小節において前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ点線が印刷されている。

1950年以降になると、18. IP（1950年）において、「この版の特徴について」の6）で、前打音の最初の音を拍の頭に合わせることが記述されている。しかし、譜面の中には何も指示がない。19. LKJ1（1951年）ではすべての箇所で前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ直線が印刷されている。さらに、第26、28小節の2個の前打音に前打音の最初の音と左手の1拍目を結ぶ直線、および、第235、236小節右手3拍目の2個の前打音にも左手3拍目と結ぶ直線が印刷されている。続いて、21. KHJ（1955年）、22. ZOP（1957年）、23. OTP（1958年）では、8. HS/vPと同様の指示が譜面に印刷されている。

このように、1950年頃から、譜面の中で前打音の奏法に関する指示や注における記述が多くなってきたことがわかる。その中で、17. MIJ、19. LKJ1、21. KHJ、22. ZOP、23. OTPが日本で出版されたエディションであることが注目される。そして、21. KHJ、22. ZOP、23. OTPが8. HS/vPを引き継いでいることも確認できる。

この後の新しい原典版といわれる27. JE2（1986年）、28. JE3（1997年）、29. JS（2006年）では、すべてのエディションにおいて、デュボアの楽譜で加筆された第116、118、120、122、231、233小節に点線で指示が印刷されている。さらに、巻末などの注や演奏上の注意において、この指示が弟子の楽譜に加筆されたものであることと、前打音の最初の音と左手の1拍目を同時に始める指示であるというコメントが記述されている。30. NMにおいては、脚注に弟子の楽譜に関するコメントがあり、右手最初の音と左手最初の音を同時に弾くことが示されている。

４．録音における前打音の奏法

ここでは上述の前打音が出てくる箇所で、ピアニストたちがどのような弾き方をしているかについて、前打音の開始のタイミングを調査し考察する。

表２は演奏された時期が明示されている録音を調査した結果を纏めたものである。表２から、以下の３点が明らかとなる。

1）　1990年頃から、前打音を拍の頭に合わせることが一般的になった。

2）複数の録音を調査したピアニストに関して、2回ともすべての箇所で同じ前打音の弾き方をしているピアニストはいない。パハマン（1. 1912年、4. 1925年）、コルトー（5. 1929年、6. 1933年）、パレチニ（20. 1990年、26. 1995年）であるが、パレチニの1回を除いて、すべて1990年以前の録音である。

3）　1990年以前で、前打音を拍の頭に合わせることを意識していると思われる演奏は、3. パデレフスキ（1925年）、4. パハマン（1925年）、7. アラウ（1953年）、12. マガロフ（1974年）、16. ボレット（1986年）、17. ツィマーマン（1987年）である。

以上の３点に関して、次章にて楽譜との関連を考察する。

５．楽譜の表記と演奏との関係

今回は音源の数が少ないため、明確な結論付けはできない。ここで見てきたことに限れば、4. の1）で示したように、1990年頃を境として、前打音を拍の頭と合わせる奏法が一般的になったことがわかる。4. の2）に示したように、1990年より前に関しては、同じピアニストでも時によって前打音の奏法が変わっていたことが明らかとなった。そこで、1990年頃が境目となったことに対して、楽譜における表記の影響について考察する。

ショパンの著作権が消滅した直後に出されたエディションの中にも、前打音を拍頭に合わせる指示が脚注

表2.　ショパン《バラード》第3番 変イ長調 作品47 の前打音の奏法（録音年代順）

○：前打音を拍の頭、すなわち右手前打音の開始の音と左手を同時に演奏
×：前打音を拍の前に出した演奏
？：微妙なずれがある場合

	演奏者名	生没年	国	録音年	第26小節	第28小節	第116小節	第118小節	第120小節	第122小節	第231小節	第233小節	レコード番号など
1	ヴラディーミル・ド・パハマン	1848 – 1933	ウクライナ	1912	○	○	○	○	×	○	×	×	https://www.youtube.com/watch?v=DzPIuI4ATgU
2	セルゲイ・ラフマニノフ	1873 – 1943	ロシア⇒フランス、アメリカ	1925.4.13	○	○	×	○	○	○	×	○	BVCC-7357(CVE-32510-1, 32511-2)
3	イグナツィ・ヤン・パデレフスキ	1860 – 1941	ポーランド	1925	○	×	○	○	○	○	○	○	NCS1014(8)
4	ヴラディーミル・ド・パハマン	1848 – 1933	ウクライナ	1925	○	○	○	○	×	○	○	○	NCS1014(9)
5	アルフレッド・コルトー	1877– 1962	（スイス⇒）フランス	1929	×	×	○	○	×	○	○	○	CD-317(HMV DB1343/6 & Vitor7333/6
6	アルフレッド・コルトー	1877– 1962	（スイス⇒）フランス	1933.7.6/7	×	×	○	×	×	○	○	○	TOCE-7818
7	クラウディオ・アラウ	1903 – 1991	南チリ⇒ドイツ⇒アメリカ	1953	○	○	○	○	○	○	○	○	https://www.youtube.com/watch?v=x7szDmEoHPQ
8	サンソン・フランソワ	1924 – 1970	フランス	1958頃	×	×	×	×	×	○？	×	○	TOCE-6627
9	アルトゥール・ルービンシュタイン	1887 – 1982	ポーランド⇒	1959.4.28/29	×	×	○	×	×	○	×	×	BVCC-5077
10	マルタ・アルゲリッチ	1941–	アルゼンチン	1967 or 1969	×	○	○	○	○	○	×	○	https://www.youtube.com/watch?v=6JCCOsbnCKs
11	フィリップ・アントルモン	1934–	フランス	1970.2	×	×	○	×	×	○	×	×	SRCR 1646
12	ニキタ・マガロフ	1912–1992	ロシア⇒フランス、スイス	1974.12.17–20	○	○	○	○	○	○	○	×	PHCP-3558～9
13	マリア・ティーポ	1931–	イタリア	1977	×	○	×	×	○？	×	×	×	PLCC-590
14	ヴィラディーミル・アシュケナージ	1937–	ロシア⇒アイスランド、スイス	1978.9.–1979.3	×	×	○	○	×	○	×	○	POCL-9053
15	シプリアン・カツァリス	1951–	（マルセイユ⇒）フランス	1984.1	×	×	×	×	○	×	×	×	WPCS-4319～20
16	ホルヘ・ボレット	1914 – 1990	（キューバ⇒）アメリカ	1986.9	○	○	○	○	×	○	○	○	POCL-2288
17	クリスティアン・ツィマーマン	1956–	ポーランド	1987.7	○	○	○	○	○	○	○	○	POCG-1288
18	イシュトヴァーン・セーケイ	1960–	ハンガリー	1987.10.13–29	○	○	×	×	×	×	×	×	NAXOS 8.550084
19	エドワード・アウアー	1941–	アメリカ	1988.11	×	×	○	×	×	○	×	×	32CM-263
20	ピオトル・パレチニ	1946–	ポーランド	1990.4.10–13	○	×	○	○	×	○	×	○	PCCL-00089
21	仲道郁代	1963–	日本	1990.4.25–27	○	○	○	○	○	○	○	○	BVCC-18
22	エヴァ・ポブウォツカ	1957–	ポーランド	1990.8.19–21	×	○？	○	○	○	○	○	○	VICC-100
23	イディル・ビレット	1941–	トルコ（⇒パリ）	1991.3–1992.2	○	○	○	○	○	○	○	○	NAXOS 8.5550508
24	アンドレイ・ガブリーロフ	1955–	ロシア	1991.9	○	○	○	○	○	○	○	○	POCG-7079
25	アレクセイ・リュビモフ	1944–	ロシア	1992.5	○	○	○	○	○	○	○	○	WPCC-5267(FRATO2292-45990-2)
26	ピオトル・パレチニ	1946–	ポーランド	1995	○	×	○	○	○	○	○	○	WN (NATIONAL EDITION) vol.1
27	マウリツィオ・ポリーニ	1942–	イタリア	1999.4	○	○	○	○	○	○	○	○	UCCG-2092
28	太田 沙耶	不詳	日本	2008.3.23	○	○	○	○	○	○	○	○	PTNA入賞記念コンサートF級銀賞 https://www.youtube.com/watch?v=B0QGDUb-aXA
29	金田真理子	不詳	日本	2008.9.14	○	○	○	○	○	○	○	○	PTNA配信 https://www.youtube.com/watch?v=Q6wb8yIKRnw
30	後藤正孝	1985–	日本	2009.12.21	○	○	○	○	○	○	○	○	PTNA配信 https://www.youtube.com/watch?v=xi7vb2tC1Rs
31	横山幸雄	1971–	日本	2011.7.5–6	○	○	○	○	○	○	○	○	KICC－922
32	シャルル・リシャール＝アムラン	1989？–	カナダ	2015.1	○	○	○	○	○	○	○	○	ショパン国際ピアノコンクール1次予選NIFC配信https://www.youtube.com/watch?v=E4S1NSD5OMw
33	野上真梨子	不詳	日本	2015.11.21	○	○	○	○	○	○	○	○	PTNA配信 https://www.youtube.com/watch?v=XBBonWOIOfs
34	ユンディ・リー	1982–	中国	2016.3.23	○	○	○	○	×	○	○	○	https://www.youtube.com/watch?v=Ggt6aEqfoqA
35	チョ・ソンジン	1994–	韓国	2016	○	○	○	○	○	○	○	○	Music video for Ballade No.3 In A-Flat Major, Op.47. (C) 2016 Deutsche Grammophon GmbH, Berlin

などに見られるものもあった。しかし、実際の演奏が録音として残っているのは、もっと後の時代となる。ここで調査した録音においては、1990年以前の録音では、4.の3）に示したように、3. パデレフスキ（1925年）、4. パハマン（1925年）、7. アラウ（1953年）、12. マガロフ（1974年）、16. ボレット（1986年）、17. ツィマーマン（1987年）が、前打音を拍頭に合わせることを意識している演奏であると思われた。これらのピアニストの中で、パデレフスキとパハマンは、それぞれ18. IP（1950年）、15. VP（1935年）の校訂者であり、それらのエディションには、いずれかの箇所や注記において、前打音を拍の頭に合わせて始めることが記されている。したがって、この2人の演奏に関しては、楽譜からの影響というよりも、研究成果あるいは自分の演奏法を楽譜に示した可能性が考えられる。

1990年以降に前打音を拍の頭と合わせる奏法が一般的になったことへの影響として考えられることは、以下のとおりである。

18. IP（1950年）は世界中で広く使われてきたが、前述の通り、前打音の弾き方の指示が譜面上には記されておらず、「この版の特徴について」の6）で前打音の最初の音を拍の頭に合わせることについて言葉で説明されているのみである。ピアノを勉強する人は、譜面は見るが「注」はあまり見ない、ましてや巻頭や巻末の説明は読まないことが多い。したがって演奏にあまり反映されなかったと推測される。また、24. JE1（1967年）では、脚注でコメントが書かれているが譜面の中には指示がない。脚注であるため目に触れる可能性は大きいが、すべてポーランド語である。そして、24. JE1は当時の出版事情から、ほぼポーランド国内だけでしか入手できなかったと考えられる。したがって、あまり演奏に反映されなかったと推測される。

その後、1986年に27. JE2が出版された。これはウィーン原典版であり、譜面上に指示があり、脚注にコメントもある。そのコメントや解説は、英語、ドイツ語、日本語でなされており、各国で広く出版された。1990年に日本で録音した仲道郁代も録音時にこのウィーン原典版を使用していた。おそらくこのエディションにより前打音の拍頭合わせが確認され、その後の新しい原典版（28. JE3、28. JS）においても、同様の指示とコメントがあり、定着するに至ったと考えられる。

6．おわりに

今回は、まだ音源が十分に集まっていない状況での調査と考察になったが、この調査の範囲で考えられることとして、前打音の奏法は1990年頃を境に前打音を拍の頭に合わせることが一般的になったことが明らかとなった。それに対する楽譜の影響として、まずは27. JE2のウィーン原典版、そしてさらに新しい原典版（28. JE3、29. JS）が考えられた。

今回見た楽譜の中では、17. MIJ、19. LKJ1、21. KHJ、22. ZOP、23. OTPなどの1950年前後に日本で出版された楽譜に、前打音を拍の頭に合わせる指示がなされていたことが分かった。今回の調査の中では、これらの日本で出版されたエディションに前打音の拍頭合わせの指示があることが注目される。それが日本人の演奏にどのように影響があったのか、1990年頃までの日本人の演奏を入手して調査することが今後の課題となる。

さらに多くのエディション、そして多くの音源を調査できれば、今回の大まかな傾向とは違った結論が出てくる可能性もある。今後の課題としたい。

【注】

1. 前打音とは装飾音の一種で、親音符の前に補助的に置かれた音のこと。親音符の拍の前に出して演奏する方法と、拍の頭で拍と同時に始める方法がある。

【使用楽譜一覧】

紙面の都合上、使用楽譜については表1の備考欄を参照。

【参考文献】

Brown, Maurice J.E. 1972. *Chopin, An index of his works in chronological order*, 2nd revised ed. New York: Da Capo Press.

Chomiński, Józef Michał; Turło, Teresa Dalila. 1990.

Katalog Dzieł Fryderyka Chopina. Kraków: Polskie Wydawnictwo Muzyczne.

Kobylańska, Krystina. 1977. *Rękopisy utworów Chopina, Katalog*. Kraków: Polskie Wydawnictwo Muzyczne.

——— 1979. *Frédéric Chopin, Thematisch-Bibliographisches Werkverzeichnis*. Translated by Helmut Stolze, edited by Ernst Herttrich. München: G. Henle Verlag.

Samson, Jim 2006　The complete Chopin, A new critical edition, Ballades, Uetext, London: Edition Peters.

【参考ウェヴサイト】

AC Online（Annotated Catalogue of Chopin's First Editions）: http://www.chopinonline.ac.uk/aco/ 2018 年 5 月 1 日閲覧。

CFEO（Chopin's First Editions Online）: http://www.chopinonline.ac.uk/cfeo/ 2018 年 5 月 1 日閲覧。

OCVE（Online Chopin Variorum Edition）: http://www.chopinonline.ac.uk/ocve/　2018 年 5 月 1 日閲覧。

NIFC（The Fryderyk Chopin Institute）: http://en.chopin.nifc.pl/institute/ 2018 年 5 月 1 日閲覧。

＊本研究は JSPS 科研費 16K02323 の助成を受けたものです。

「人間科学」第36巻　第1号（2018年9月）

研究ノート

“概念の集合論的定式化”再考

大道　一弘（常磐大学人間科学部）

Set-theoretical Formulation of Concepts Revisited

Kazuhiro DAIDOH（*Faculty of Human Science, Tokiwa University*）

1. はじめに

本稿の目的は、吉田（1972）によって提案された「概念の集合論的定式化」（1978にも所収）とそれに関連する概念形成研究に関する議論について再検討し、発展的な議論を行うことである。概念の集合論的定式化は、伏見（1991、1996）による、焦点事例のはたらきとしての概念の異種定式化説を支える理論として用いられるなど、教授学習心理学研究にも影響を与えてきた。本稿では、吉田による概念の集合論的定式化について確認したうえで、特に、内包的定式化と外延的定式化の2つの定式化の関係、および、コミュニケーションによる概念形成をどのように捉えるべきかの2点を取り上げ、教授学習心理学的な関心から発展的議論を行いたい。

2. 概念の集合論的定式化

2－1. 吉田（1972）による提案の背景

吉田（1972）による概念の集合論的定式化は、素朴集合論を援用し、人間によって形成される概念の記述を試みるものである。より具体的には、集合の操作によって新たな集合が作られる様と、それらが含まれる集合の階梯に関する集合論的な議論をもとに、それを概念と関連させ、概念形成の集合論的定式化を試みるものである。とりわけ、内包的定式化と外延的定式化の2つの定式化が重要なものとして挙げられる。

吉田がこのような提案を行った背景として、秋山（1972）がコメント論文で吉田の指摘をうまくまとめている通り、“概念形成の心理学的研究が概念そのものの分析を怠ったり、抽象概念の正当な位置づけを欠いてきたために、実際に生じている概念形成の特殊な部分しか代表していない”ということがある。そしてこれは、秋山の述べる通り正しいといえるだろう。さらにいえば、概念に関する心理学的研究を行う当時の研究者においても、例えば、「関係概念」のように適切な関係づけが行われず、抽象のレベルにおいて混乱が見られていたことが挙げられる。そこで集合論を援用し、概念の集合論的定式化を提案することで、(1)「概念」の分析が論理化され、包括的になるとともに、(2) 概念形成研究に共通の言語が提供されることの2点が目指されたのである。

2－2. 集合から新しい集合をつくる操作

以下では、吉田（1972）の議論に即し、素朴集合論を援用した集合から新しい集合をつくる操作と、内包的定式化／外延的定式化の2つの定式化という2点について確認するが、ここでは前者を取り上げる。

集合から新しい集合をつくる操作について、吉田では、「部分集合をつくる操作」、「積集合をつくる操作」、

「巾集合をつくる操作」の３種の操作が挙げられている。しかし吉田では、抽象的な例しか添えられていない（吉田の用語での「基底」集合E、F、Gの場合の例は、図１参照）。そこで、まずは思考の操作との関連も考慮し、「部分集合をつくる操作」と「直積集合をつくる操作」（吉田の語では「積集合」となっているが、「共通部分」を積集合と呼ぶこともあり、混乱を避けることから、以後、「直積集合」と表記する）に着目し、さらにそのうち前者については、紙幅の都合上、「合併」（「和集合」とも呼ばれる）は省略し、「共通部分」に絞って、具体的な例を挙げ確認したい。

なお、集合の記述の仕方としては、①トランプのスート＝｛ダイヤ、ハート、スペード、クラブ｝、②トランプのスート＝｛ｘ｜ｘはトランプの札のマーク｝の２つがある。前者は外延的記法、後者は内包的記法と呼ばれるものである。吉田の例では、外延的記法しか用いられていないことに注意されたい。またこれらは、同一の集合を表している場合には書き換え可能であることも付け加えておく。

「共通部分」としては、次のような例を考えることができる。今、ある大学のＨ教員のゼミナール（以下、ゼミとも表記）の４年生という集合を考えるとしよう。このゼミナールの４年生には、j、k、l、m、n、o、pという名前の７名の学生がいるとする。この場合、

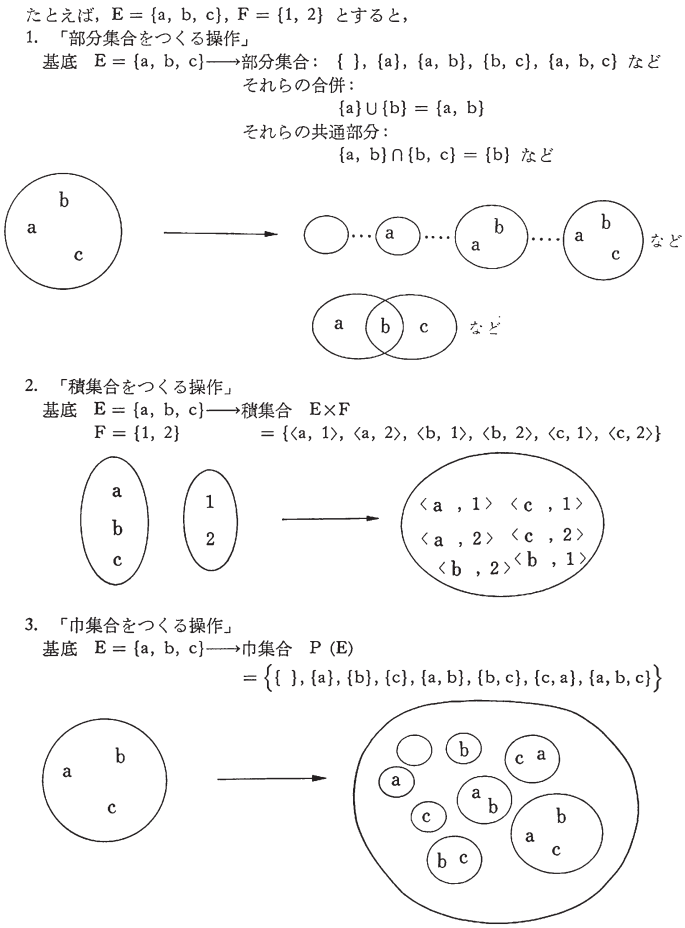


図1　集合から新しい集合をつくる3種の操作（吉田，1972，p.311）

Hゼミの4年生＝｛j、k、l、m、n、o、p｝と記すことができる。

ここで、第5回のゼミナールにk、m、pの3名が校外実習のために欠席したとしよう。その場合、「第5回ゼミに欠席したHゼミ4年生」という集合は｛k、m、p｝と表せ、「Hゼミの4年生」という集合と「校外実習期間中の学生」という集合の共通部分ということができる。

「直積集合」の具体例としてしばしば挙げられるのが、トランプの（ジョーカーを除いた）52枚のカードである。これらのカードは、トランプのスート＝｛ダイヤ、ハート、スペード、クラブ｝と、トランプのランク＝｛A、2、3、4、5、6、7、8、9、10、J、Q、K｝という2つの集合の直積によってつくられた52組の要素（元とも呼ばれるが、以下では要素を優先して用いる）からなる集合である。すなわち、トランプのカード＝トランプのスート×トランプのランク＝｛(ダイヤ、A)、(ダイヤ、2)、・・・、(クラブ、K)｝となる。2つの集合の直積は2次元的に解するとわかりやすい（図2参照）。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	J	Q	K
◇	(◇1)	(◇2)	(◇3)	(◇4)	(◇5)								
♡													
♠													
♣													

図2　直積の例としてのトランプのカード（遠山，2014，p.199）

2－3. 内包的定式化と外延的定式化

内包的定式化と外延的定式化について確認する前に、「概念」についての論理学と心理学の区別について確認しておきたい。吉田（1972）も述べている通り、論理学では、概念が“「名辞」「内包」「外延」を整え、概念として完成された状態”を扱うのに対し、心理学では“個人における概念の発生・変化の過程とその法則性を研究する”。したがって心理学では、“いま発生しつつある概念、形成途上にある概念、完成に近づきつつある概念などを、いずれも「概念」として扱う必要がある”。上記の論理学的な捉え方は、“獲得されるべき対象としての「概念」”を記述しているものといえるであろう（吉田、1972、p.304）。

それでは、内包的定式化と外延的定式化について確認しよう。吉田（1972）は、“「概念」を集合論的に定式化する際に、（新たな操作によって）指定される部分集合の母集合を構成する基底（集合）の選び方によって、内包的定式化と外延的定式化の2つの区別”を行っている（p.313、カッコ内は筆者補足）。

内包的定式化は、“基底として幾つかの「属性」の集合をとる”定式化である（p.313）。さらに吉田は、事例はそれらの属性集合の間の積集合の元として構成されるとしている。しかし、ここでいう積集合は、「共通部分」として解するのが妥当であろう。直積の場合には、トランプの例のように、集合の集まりに対し、各集合が1つずつ要素を取り出して、組にしたものを要素に持つ。すなわち、作られた集合は、｛ダイヤ、ハート、スペード、クラブ｝や｛A、2、3、・・・、K｝そのものが要素になるわけではなく、｛(ダイヤ、A)、(ダイヤ、2)、・・・、(クラブ、K)｝を要素に持つからである。内包的定式化は、吉田が他の個所で述べているように、“属性集合を基底とし、事物・事象を、いわば、「属性複合」として構成されたものとしてとらえ”ていると考えるのが良いであろう（p.318）。

一方、外延的定式化は、“基底として幾つかの「事例」の集合をとる”定式化である（p.313）。吉田も述べる通り、“基底が「属性」ではなくて、「事例」の集合である点が重要”だといえるだろう。さらに付け加えるならば、内包的定式化においては、基底として選んだ属性が既に集合になっている点も筆者は強調しておきたい。事例を考える際には、その集合に含まれる元を外延的に把握する（要素を取り出す）と考えるのが自然ではないだろうか。

3. 発展的議論

以下では、これまでの確認を踏まえ、発展的議論を行いたい。(1) 内包的定式化と外延的定式化の2つの定式化の関係について、(2) コミュニケーションによる概念形成をどのように捉えればよいか、の順に議論する。

3－1. 議論（1）：2つの定式化の関係について

内包的定式化と外延的定式化をめぐっては、以下の2つの問題点が挙げられる。まず1点目は、思考の操作を考えた場合、内包的定式化および外延的定式化に含まれないものが存在するのではないかという点である。

例えば、先に挙げた「Hゼミの4年生」という集合の中から、「3年次までに履修した学科専門科目全ての単位を修得済みのHゼミ4年生」という新しい集合を作る場合を考えてみよう。その場合、「Hゼミの4年生」という集合を外延的に捉え、全ての要素について着目し、「3年次までに履修した学科専門科目全ての単位を修得済み」という条件を満たす集合に含まれるかを判断し、共通部分に入る要素を取り出すことで作ることができる。

同じ集合を作る際、上記の取得済みの者に関する名簿があり、それを用いて考える場合には、確かにいずれの集合においても外延的に把握し、外延的定式化によって共通部分を取り出して新しい集合を作ったといえるであろう。しかし、各自の成績表を見ながら判定する場合はどうであろうか。その場合には、ゼミ生集合については外延的に把握したうえで、成績表を資料にしながら、判別ルール（＝内包的定式化）によって判定し、新たな集合を作ることになる。このように、2つ以上の集合を考える場合に、内包的定式化と外延的定式化の両者を用いるような思考について、吉田（1972）は考慮していないように思われる。

吉田においては、内包的定式化と外延的定式化の2つの定式化の区別が明確になされている。これは、それまでの定式化において、内包的定式化と外延的定式化の相互関係を、各研究者とも明確にしていないという問題点を意識したためであろう。それまでの研究の問題点を指摘するという文脈においては、個々の研究者がいずれか一方のみの概念で捉えていたために研究間の相互の関係が把握されてこなかったというのは説得的である。しかし、思考の操作という点から考える場合には、この2つの区分のみでは不十分なように思われる。人間の概念形成について記述する際には、いわば「混合的定式化」とも呼べるような、前記のような思考操作にも対応した記述概念が必要であろう。

このような例は他にも考えることができる。もう少し複雑な例として、製品等に使う目的で、常温下において「固体」の「強磁性体」の「安価」な（単体の）「金属」を探すというものを考えてみよう。この場合、候補となる金属については列挙したうえで（＝外延的定式化）、それ以外の前の3つの条件を満たすかどうかをチェックする（＝内包的定式化）ことがあるだろう。このような思考法は日常的にも多く用いられるものであり、やはりそれに対応した、混合的定式化のような記述概念も必要だといえるだろう。

また、吉田における両者の関係に関する議論には、他にも課題があるように思われる。2点目の問題点は、外延的定式化を過大に評価するとともに、内包の役割を過小評価していると思われる点である。吉田は2つの定式化について次のように述べている。

> 外延的定式化は、与えられた事例の未知の属性を定式化の中に含めることができ、内包的定式化は、与えられた属性をもつ未知・未存の事例を定式化の中に含めることができる。
>
> 両者は、いうまでもなく、互いに相補い合うべき定式化であるが、両者を包摂しうるのは、外延的定式化である。（p.320）

吉田は2つの定式化を相補うとしながらも、外延的定式化のみ可能な場面があるとし、外延的定式化を重要視しているのである。このことは、以下の叙述からもうかがえる。“内包的定式化では、属性が未知でなければならないが、外延的定式化では、属性が未知であっても、その「未知の属性」をもつ事例の集合が確定されさえすればよい”、“内包的定式化は既知の属性にもとづく概念はすべて扱えるが、それ以外は扱えないのに対して、外延的定式化は基底集合の事例にもとづく概念である限り、既知か未知かを問わず、すべて定式化できる”（ともにp.317）。

例に当てはめて考えてみよう。再度、「第5回ゼミに欠席したHゼミ4年生」という集合を考える。ここではH教員が欠席理由を知らなかったとしよう。その場合、H教員はこの時点では、Hゼミの4年生＝｛j、k、l、m、n、o、p｝という集合から、第5回ゼ

ミに欠席したHゼミ4年生＝｛k、m、p｝と外延的定式化により部分集合を指定することになる。後に欠席理由を知った際に、それが、「Hゼミの4年生」という集合と「校外実習期間中の学生」という集合の共通部分ということが明確になるとともに、｛x｜xはHゼミ所属の4年生の学生｝∩｛x｜xは校外実習期間中の学生｝と内包的定式化も可能になるというのである。このように途上の状態において内包が明確でない際には内包的定式化は行えないというのである。

この主張はもっともなように思われるが、論理学的には、すべての集合で内包的記法による記述が可能である。先の場合、外延的記法で｛k、m、p｝と表される集合は、｛x｜xはkという名前｝∪｛x｜xはmという名前｝∪｛x｜xはpという名前｝と同一である。ただし心理学的に考えると、吉田の言わんとすることは正しいように思われる。このような内包的記法は、概念の使用と関連した、すなわち、私たちが判別ルールとして使用している内包とは大きな隔たりがあると考えられるからである。

しかし、このことはまさに吉田が重視していなかった、内包の「判別ルール」としての役割の重要さを示しているのである。吉田では、抽象概念を位置づけるために巾集合の考え方を取り入れているが、その中でも、私たちが意味ある抽象概念として使用するものは、内包の面で、判定ルールとしての使用可能性の豊かなもののはずである。「判別ルール」としての豊かさというのはきわめて重要であり、この内包の豊かさが明確でないところからも、吉田が内包の役割について過小評価していることがうかがわれるのである。

吉田は、外延と内包の力動的関係については、以下のように述べている。

> まず、外延が暫定的に定まる。次に、そのような特質を信号とするような他の特質の抽象が行われ、しだいにその「概念」の内包が構成される。そして、その内包にもとづいて、また、外延がさらに再構成され明瞭化される。その外延にもとづいて、また内包が・・・という過程が進行し、しだいしだいに概念がさらに洗練され、明瞭化され、目的にとって機能を果たし有効になっていく、という過程であると考えられる（p.321）

このように両者の相互の関係を述べているにもかかわらず、吉田は内包の役割を重視しているようには思われない。認識による概念形成において、その途上の状態をも記述できることを重視するあまり外延的定式化を偏重し、内包的定式化や認識によるコミュニケーションを過小評価していると考えられるのである。

先に述べた通り、論理学的には同一の集合を表している場合、内包的記法と外延的記法を書き換えることが可能である[1]。心理学的にも、ある程度完成された概念であれば、それを要素（事例）に着目しながら外延的把握を行う場合もあれば、（共通特徴の）属性に着目しながら、内包的把握を行う場合も存在している。ここで「定式化」ではなく「把握」の語を用いたのは、定式化で表される新たな部分集合を作る場面のみでなく、当該の概念という集合単体を対象として把握する場合もみられると考えられるからである[2]。内包的把握と外延的把握は、概念の使用する際の表と裏ともいえる2つの側面である。また先述の通り、内包的に把握している集合の事例を考える際には、含まれる元を外延的に把握する（要素を取り出す）と考えるのが自然である。内包的把握、外延的把握の両側面から把握でき、概念を使用できることが重要だと考えられる。

さらに外延についても、実際には、すべてを明記することが簡単ではない例も多い。例えば、「日本の都道府県」という集合を外延的記法で書き出す場合には、47の要素を列挙する必要があり、かなり煩雑である。本稿でも、先述の「トランプのカード」という集合の例では、52組の要素をすべて記述せず、省略して記していた。このように、外延的定式化においては、要素のすべてを外延的記法で記したり、把握したりするのが容易ではないことも多い。判定ルールとして使用可能性の豊かな内包を持つ概念であれば、外延は、無限ではないにせよ無数に存在するものも多いと考えられる。外延的定式化には、このような現実的な難点もある。

したがって、内包と外延はその関心に応じ、判別ルールとしての内包に着目する場合には内包的把握を選

択し、要素（事例）に着目する場合には（集合のすべての要素に関心がある場合も含めて）外延的把握を選択して概念が使用されると考える方が、より実際の概念の使用を反映していると言えるのではないだろうか。

ただし、以下の点は強調しておきたい。問題解決場面においては、外延に着目した問題解決は個別的、特殊的な再生的解決となる一方、内包に着目した問題解決では、その内包を判別ルールとして使用した生産的問題解決が可能となる。教授学習心理学においては、概念やルールを用いた一般性を有する生産的解決が重視されている（例えば、工藤、2002）。また教授場面で、概念化、ルール化可能な場合であっても、教授者に意識されず見過ごされている場合も多いことが指摘されている（例えば、伏見・麻柄、1993）。この点からも、内包の役割の重要性を指摘しておきたい。

3－2. 議論（2）：「コミュニケーションによる概念形成」をどのように捉えるべきか

それでは、吉田の論をこどもの発達と教育の文脈で考えてみることにしたい。これは最も関心を引く論点であり、秋山（1972）によるコメント論文でもこの問題が中心に据えられている。しかし秋山では、コミュニケーションによる概念形成の観点からの議論、考察はなされていない。また、吉田（1972）においても、このコミュニケーションによる概念形成という論点は未消化のままのように思われる。

秋山（1972）では、人間の対象に対するはたらきかけとその産物を階層的ものとしてこの論点を検討している（図３参照）。秋山はこの枠組みから、吉田はレベルⅠの問題を論じていたと位置づけている。吉田が、集合論によって抽象概念が定式化された例として科学上の概念を挙げていることからもそう解することは妥当であろう。

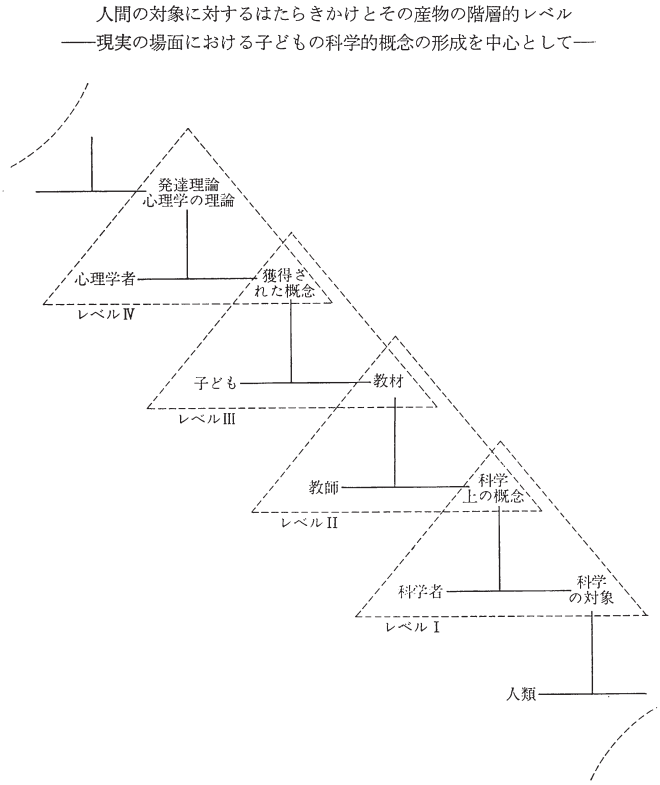


図3　概念形成における対象および産物の階層的レベル（秋山，1972，p.342）

また、吉田の“「個人にとっての新しい概念」はコミュニケーションによっても形成されるが、「文化にとっての新しい概念」は認識によってしか形成され得ない”というショーンを引用しながらの叙述や、形成途上の概念を記述することへの関心からは、認識による概念形成を重視していたこともうかがえる。ここで、認識による概念形成とは、“個体が、事物現象と直接に相互作用し、他の個体とは独立に、概念を形成する過程”（p.306）であり、コミュニケーションによる概念形成とは区別されるものである。いわば、純粋な発見とも呼びうる事態が認識による概念形成なのに対し、“他の個体によってすでに形成された概念を、直接あるいは間接に、その個体の媒介によって、形成する過程”（p.306）とされるのが、コミュニケーションによる概念形成である。したがって、吉田は秋山のいうレベルⅠの問題を、認識による概念形成の観点から論じていたということになる。

吉田においては、こどもの形成する概念についての明確な論述はない。また、コミュニケーションによる概念形成についても、“コミュニケーションによる概念形成も、受け手のもつ概念が送り手のもつ概念に接近する過程として、その外延と内包の関係については、（認識による概念形成と）ほぼ同様に考えてよいであろう”（p.321、カッコ内は筆者補足）と述べるように、認識による概念形成と大差ないように考えているようである。よって秋山（1972）の言う通り、吉田はこどもたちの概念形成もレベルⅠとアナロジカルなものと想定したと考えざるを得ない[3]。しかし、以上の吉田と秋山に共通するのは、コミュニケーションによる概念形成を明確に考慮していない点である。そのことは、秋山による階層化にも難点をもたらしていると考えられる。まずは、そこから検討したい。

ここでは、秋山のいうレベルⅠからレベルⅢについて考えてみたい。確かに、レベルⅠにおいては、認識による概念形成として考えることは妥当かもしれない。しかし、レベルⅡおよびレベルⅢにおいてはコミュニケーションによる概念形成として考える必要がある。それは、他者によって形成された概念の関わる概念形成であるからである。教師が科学上の概念を学習するのも、また教材を通してこどもが概念を作り上げるのも、コミュニケーションによる概念形成として捉えられるべきである。ただしここでは、コミュニケーションによる概念形成には、以下の2つのものが含まれていると考える。それは、内包については発見することが求められるが、正事例／負事例は明らかにされるという、「（支援された）発見学習」と、内包も明示されたうえで、正事例／負事例等の事例が提示される「概念受容学習」（工藤、2000）の2つである。

吉田では認識による概念形成との違いが意識されていなかったが、コミュニケーションによる概念形成の場合、その過程を心理学的に捉えるためには、認識による概念形成よりも考慮すべきことが多く、複雑になると考えられる。以下では、それを検討したい。

コミュニケーションによる概念形成の場合、ある程度完成された概念においては、内包および外延が記述可能な状態にあることは既に見た通りである。したがって、(1) その時点で理想状態とされる概念がまず明確にされ、記述されるべきである。(2) 学習者に提示される情報は、(1) の理想状態の概念においてどのように記述されるもの（事例、内包）がどんな順に提示されたかが記述される必要がある。さらに、(3) 学習者に形成された概念は、（途上の状態のものも含め）(1) との比較において、どのような状態に形成されたかを記述する必要がある。

以上をもとに、有意義な概念を作り上げていくことが、コミュニケーションによる概念形成を対象とした、心理学的研究の目指すところではないだろうか。私たちが用いている概念は、自身で純粋に発見したものばかりでなく、他者が発見し概念化したものも非常に多くある。また、言語によるコミュニケーションを中心と高度な概念の形成が可能なのが人間の特徴でもある[4]。例えば、高校生が学校学習で学ぶ概念も、数世紀前であれば、極々少数の人類のみが到達し得たものであることもある。人類の高度に文化的な生活は、コミュニケーションによる概念形成によって支えられていることが多いのではないだろうか[5]。したがって、このようなコミュニケーションによる概念形成をより有効にする条件を明らかにすることは、心理学研究としても非常に意義があるだろう[6]。

一方で、私たちは日常の経験から、ときに不十分や

誤ったものであっても概念を自成することが知られている。素朴概念や誤概念と（あるいは、誤ルールやル・バーとも）呼ばれるものである（麻柄・進藤・工藤・立木・植松・伏見、2006）。例として、スイカのタネを「ホネ」と呼んだこどもを考えてみよう。この子にとっては、「ホネ」は「可食部を食べにくくするもの」という内包で（このような言語化はされていなくても）概念化されており、それを過剰適用した結果、スイカのタネについても「ホネ」と概念化したと考えることが可能であろう。実際にどのような事例に触れながら、この概念（外延および内包）がいかに形成されていったかを集合論的に変化を追って記述できれば、まさしく吉田の考えるような記述の仕方ということになるだろう[7]。

さらに言えば、このような自成の概念を持ち込むために、通り一遍の教授では、コミュニケーションによる概念形成がうまくいかない例があることも知られている（例えば、麻柄他、2006; National Research Council、2000）。この難しさは、内包を明示して行う概念受容学習であっても起こることであり、いかにそのような概念の修正を行うかは、大きな課題となっている（伏見、1996; 麻柄他、2006）。そのような研究の中から生まれた教授学習心理学上の概念の例として「誤知事例」／「正知事例」がある（伏見、1996）。前者は、実際には概念の外延に含まれるにもかかわらず、含まれないと判断する事例、もしくは、外延に含まれないながらも含まれると学習者が判断する事例であり、後者は、そのような誤りの見られない事例である。人工的概念の研究でも用いられる正事例／負事例といった概念では捉えきれなかったものであり、現実の概念を取り上げたコミュニケーションによる概念形成を対象とした研究だからこそ、概念化できたものであるといえるだろう。このような概念こそ、コミュニケーションによる概念形成を対象とした、秋山（1972）のいうレベルⅣでの抽象概念であり、意味のある概念といえるだろう。

私たちは白紙の状態からあたかも写すかのように概念を形成するわけではない。この点が、人工的概念を用いた研究と現実の概念、科学的概念の形成との大きな違いである。

4. まとめ

本稿では、吉田（1972）による概念の集合論的定式化の要点を確認し、発展的な議論を行った。発展的議論では、内包的定式化および外延的定式化に関連するものとして、これらには含まれない「混合的定式化」とも呼びうる定式化を行っている場合があることを示すとともに、内包および内包的定式化の役割を正当に評価する必要があることを議論した。また、コミュニケーションによる概念形成に関連するものとして、コミュニケーションによる概念形成を心理学的に記述する際には、認識による概念形成よりも過程で考慮すべきことが多く、複雑になることが論じられ、考慮、記述すべきことが3点挙げられた。

現在の教授学習心理学では、自成の概念をも考慮したコミュニケーションによる概念形成を取り上げ、研究を進めているといえるが（例えば、麻柄他、2006）、このことも吉田の議論の再検討を通して明らかになったことである。

吉田の議論は、そもそも研究対象となっている獲得対象である概念の分析がなされていないため混乱が生じているという関心から行われたものであった。この点についていえば、現在もなお、議論は十分ではないと言わざるを得ず、今なお、関連の問題を議論することには十分な意義があったように思われる。

概念形成、教授学習は学習者が、学習者外の対象と相互作用することによって行われる。このことは、学習者外要因（教授要因）と、学習者要因を適切に記述してこそ有意義な研究になることを意味しているはずである。しかし、教育心理学をはじめとして、教授学習研究においては、相互作用する学習者側の要因（例えば、メタ認知）や、学習者が他者とどのように相互作用したかという過程に注目が集まることが多く、獲得対象にかかわる教授要因（提示する事例や内包の表現）の記述（例として、「誤知事例」、「正知事例」）に注意を払っているのは一部の教授学習心理学研究を除いては、ほとんど見られない（大道、2010）。関連分野も含めた教授要因に着目した実証的研究においても、その多くは教授学習形態（例えば、共同学習／協同学習、あるいは近年であれば、アクティブラーニング）のみに焦点を当て、それを要因とした研究が行わ

れている。ここでは、獲得対象にかかわる教授要因については意識されておらず、その点では、学習者の要因や学習者の記述のみに重きを置いた研究と同様である。

本来、このような対象にかかわる教授要因の検討は、決して予備学として位置づけられるべきものではなく、それ自体重要なもののはずである。このような点を意識しながら、獲得対象にかかわる教授要因の分析・記述を進めることが不可欠だと考えられる。またそれをもとに、実験による検証を通して知見を蓄積したり、諸概念を体系化していくことにも大きな意義があるだろう。したがって、以上のような研究を推進していくことが必要だと考えられる。

参考文献

秋山道彦（1972）コメント：特別論文（Ⅱ）「具体と抽象――概念形成研究に寄せて――」について 日本児童研究所（編）児童心理学の進歩（1972年版）　金子書房　339-343.

新井紀子（2018）AI vs. 教科書が読めない子どもたち 東洋経済新報社

大道一弘（2010）ルール学習に関する教授心理学的研究の特徴と意義　早稲田大学大学院教育学研究科紀要（別冊）、17(2)、191-201.

伏見陽児（1991）焦点事例のはたらきとしての概念の異種定式化説　茨城キリスト教大学紀要、25、85-100.

伏見陽児（1996）「概念」教授の心理学：提示事例の有効性　川島書店

伏見陽児・麻柄啓一（1993）授業づくりの心理学　国土社

工藤与志文（2000）“概念の異種定式化説”の批判的検討：概念受容学習に及ぼす帰納的推論の影響 東北教育心理学研究、7、27-42.

工藤与志文（2002）問題解決と知識体系　宇野　忍（編）授業に学び授業を創る教育心理学（第2版）中央法規　61-112.

麻柄啓一・進藤聡彦・工藤与志文・立木徹・植松公威・伏見陽児（2006）学習者の誤った知識をどう修正するか：ル・バー修正ストラテジーの研究　東北大学出版会

National Research Council（2000）How People Learn: Brain, Mind, Experience and School. Washington: National Academy Press.（米国学術研究推進会議　森 敏昭・秋田喜代美（監訳）（2002）授業を変える：認知心理学のさらなる挑戦　北大路書房）

遠山　啓（2014）親と子で学ぶ算数入門　SBクリエイティブ

吉田章宏（1972）具体と抽象：概念形成研究に寄せて 日本児童研究所（編）児童心理学の進歩（1972年版）　金子書房　297-337.

吉田章宏（1978）授業の研究と心理学　国土社

---

[1] 吉田においては、集合を表す際に外延的記法しか用いられていなかった点も想起されたい。

[2] 内包的定式化および外延的定式化は、部分集合の母集合を構成する集合の選び方に関するものであった。これに対し、内包的把握および外延的把握というのは、概念の内包もしくは外延に着目し把握している状態を表すものとして用いている。

[3] さらに秋山は、こどもに集合論（とりわけ、巾集合と集合の階梯）を教えることが抽象概念を形成させる最も適切な方法になってしまうという一般化も行っているが、これはいささか強引にも思われる。ただし、吉田論文をきっかけに抽象概念の形成めぐる討論が盛んになることを期待したいとも述べていることから、方法論的に（戦略として）意図して行っている可能性もある。

[4] 近年、再び人工知能が注目され、人工知能が人間の知性を超えるシンギュラリティが起こるのか否かが議論されている（例えば、新井、2018）。そのような中にあっても、決して、この点は軽視されるべきではないだろう。

[5] ある概念を発見した科学者が、それを他の科学者に公表する行為も、（秋山の階層の中には含まれていないが）コミュニケーションによる概念形成の1つとし

て位置づけられるであろう。

[6] 吉田（1972）の公刊当時には、コミュニケーションによる概念形成に関する研究論文は、人工的概念を用いた実験室的研究ばかりであったかもしれない。しかし、現在では、少数派であったとしても、科学的概念や現実の概念を扱ったコミュニケーションによる概念形成の研究が教授学習心理学の分野において行われている。

[7] この例のようにどのような人においても、認識による概念形成と考えられる場面が存在するのであり、そのような場面では、個体が直接相互作用する事物現象と概念との関係でとらえることが適切であろう。

「人間科学」第36巻　第1号（2018年9月）

研究ノート

常磐大学共通英語カリキュラム（FTEC）
－理論的背景と運用－

森本　　俊（常磐大学人間科学部）
桑原　秀則（常磐大学総合政策学部）
上野真悠子（常磐大学人間科学部）
Kevin McManus（常磐大学人間科学部）

Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC): Theoretical Background and Implementation

Shun MORIMOTO (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)
Hidenori KUWABARA (*Faculty of Management and Administration, Tokiwa University*)
Mayuko UENO (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)
Kevin MCMANUS (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

Starting in April 2018, Tokiwa University launched a new common English curriculum framework called "Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC)" for compulsory English classes (English I to VI). The present paper will first describe the theoretical foundation behind FTEC, including its key concepts such as the interplay between language resources and task handling, modes of expression, and MAP (Meaningful, Authentic, and Personal) conditions. It will then illustrate how FTEC has been implemented, focusing on syllabus standardization and teaching materials, faculty-based class tracking, and an accreditation system based on proficiency tests such as CASEC and TOEIC Bridge. It is expected that this paper will contribute to the implementation of FTEC by promoting a common understanding of its framework among not only English teachers but also all faculty members of the university.

1. はじめに

2017年に本学の必修英語科目（英語Ⅰ～Ⅵ）における全学共通カリキュラム・フレームワーク（Framework of Tokiwa English Curriculum: FTEC）が総合講座語学運営会議内に設置されたワーキンググループを中心に策定され、2018年4月より運用が開始された。FTECには、(a) シラバスや使用テキスト、成績評価方法の共通化、(b) 学部単位での習熟度別クラス編成、(c) CASECやTOEIC Bridgeをはじめとする外部試験のスコアによる単位認定制度等の特徴があり、2017年度までの必修英語教育とは一線を画す改革となっている。

本稿ではまず、本学の教育活動において英語教育が担う役割を論じ、英語教育の高次の目標について議論を行う。その後、言語リソースとタスク処理の相互作用から成るコミュニケーション能力モデルや Can-do と Can-say、表現モード、MAP の条件をはじめとする FTEC の主要構成概念を詳述し、FTEC の運用面について説明を行う。本稿を通し、英語教員のみならず、全学の教職員による共通理解を図り、FTEC の円滑な運営を図る一助としたい。

2. 英語教育の高次の目標

本学では、「実学を重んじ真摯な態度を身につけた人間を育てる」という建学の精神に基づき、「自立・創造・真摯」という教育理念の下、教育活動を展開している。ここでの実学とは、「社会が解決を待ち望んでいる様々な問題に取り組み、その解決策を提示することのできる学問」を指し、その実践においてコミュニケーション力、問題解決力、語学力の 3 つの重点ポイントが掲げられている。本稿で論じる英語教育は、語学力の本丸であると同時に、コミュニケーション力の育成にも大きく資するものである。

本学の 3 つのポリシー（アドミッション・ポリシー : AP、カリキュラム・ポリシー : CP、ディプロマ・ポリシー : DP）において英語教育に関連がある項目としては、CP の「2. 国際共通語としての英語に焦点を当て、一人ひとりが段階的に学べるように英語科目を編成する。」と、DP における「2. グローバル化の中で展開する知識基盤社会において、豊かな国際感覚で問題を捉え、その問題解決に真摯に取り組むことができる。（態度）」が挙げられる。CP においては、英語を国際語（international language）として捉える視点が打ち出されており、個々の学生が段階的に英語力を高めていくことができる科目編成が求められている。また、DP においては、グローバル時代の知識基盤社会における国際感覚及び問題解決力の重要性が謳われている。以上を踏まえると、本学における英語教育には、グローバル時代を生きるグローバル・パーソンの育成の一翼を担うことが期待されていることとなる。

では、グローバル・パーソンとはどのような資質を有した人材として定義することができるだろうか。FTEC では、グローバル・パーソンを「たくましさ」と「しなやかさ」を兼ね備え、世界的視野で考え行動し、「違い」を乗り越え創造的な合意形成を導くことができる者として定義し、その育成を英語教育の高次の目標として掲げている。「たくましさ」と「しなやかさ」は、それぞれ態度面と実践面から捉えることができる概念である。前者には態度面として冒険的精神や主体性、自律性が含まれ、実践面には自己表現力や独創力、実行力、論理的思考力が含まれる。一方、後者には態度面として共感を伴う分かり合いが含まれ、実践面には対話力や共創力、調整力が含まれる。「しなやかさ」は換言すれば「違いを乗り越える力」であり、多文化共生時代において不可避的に生じる文化や言語をはじめとする違いを調整し、創造的な合意形成を図ることができる力である。「たくましさ」と「しなやかさ」は、本学における「竹人」という概念にも通ずるものであり [1]、両者をバランスよく育んでいくことが肝要となる。また、この考え方はヨーロッパ評議会（2001）が策定したヨーロッパ共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: CEFR）の言語指導基本理念とも軌を一にするものであり、グローバル社会の中で異なる言語や文化の違いを乗り越えていく際の重要な鍵となっている（Council of Europe, 2001）。尚、当然のことながら「たくましさ」と「しなやかさ」は、英語のみならず、日本語を通して発揮されることが求められる。

上記の高次の目標を達成するために求められるのが、learning by doing（実際に英語を使うことを通して学ぶこと）の実践を通して学生一人ひとりが自分の学習スタイルや習熟度、将来の目標に合わせた my English（田中 , 2016）を構築し、表現者として英語を日常的な場面及び学術的な場面において機能的に用いることができる力を育成することである。これをカリキュラムの次元で具現化したものが FTEC である。

3. FTEC の理論的背景

本節では、FTEC の理論的基盤を成すコミュニケーション能力モデル、Can-do と Can-say、表現モード、MAP の条件といった主要構成概念について詳述したい。

3.1　コミュニケーション能力モデルと Can-do, Can-say

英語教育は、学習者が実践的な英語コミュニケーション能力（communicative competence）を身につけることを支援する営みである。したがって、英語教員にはコミュニケーション能力をどのように捉えるかについて共通理解を図ることが求められる。

これまでの外国語教育においてコミュニケーション能力は言語的能力（linguistic competence）、社会言語的能力（socio-linguistic competence）、談話能力（discourse competence）といった要素に還元することを通して記述されており、例えば言語能力は語彙的能力（lexical competence）や文法的能力（grammatical competence）、意味的能力（semantic competence）、音声的能力（phonological competence）といった下位要素から構成されるものとして理論化が図られてきた（Bachman, 1990; Canale & Swain, 1980）。この考え方は、現在の外国語教育における最も有力な言語能力指標である CEFR においても採用されている（Council of Europe, 2001）。

しかし、以上のような要素還元的なアプローチには、複数の問題点が存在する（Council of Europe, 2001）。第一に、細分化のあまり要素間の関連性が断たれてしまい、コミュニケーション能力の全体像を捉え切れないという点が挙げられる。例えば、文法的能力と音声的能力はどのような関係にあるのか、社会言語的能力と意味的能力はどのような関係にあるのかといった問題である。また、それぞれの能力に対していわゆる 4 技能･5 領域（i.e.,「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やりとり）」「話すこと（発表）」「書くこと」）はどのように位置づけられるのかについても不明である。これらの問題について CEFR では、以下のような言及がなされている。

The taxonomic nature of the Framework inevitably means trying to handle the great complexity of human language by breaking language competence down into separate components. This confronts us with psychological and pedagogical problems of some depth. Communication calls upon the whole human being. The competences separated and classified … interact in complex ways in the development of each unique human personality.
（Council of Europe, 2001, p. 1, 下線筆者）

ここでの論点は、コミュニケーションとは全人的な行為であり、分類された個々の能力は人間のパーソナリティーの発達において複雑に関連し合うというものである。要素還元主義における問題をどのように乗り越えることができるかについて CEFR には具体的に述べられておらず、フレームワークがこのような問題を孕んでいる点を指摘しているにとどまっている。

では、上記の問題点を踏まえ、コミュニケーション能力はどのように理論化されるべきであろうか。FTEC では田中他（2005）及び森本・佐藤（2017）に基づき、コミュニケーション能力を「言語リソース」（language resources）と「タスク処理」（task handling）の相互作用として動態的に捉える視点を採用する（図 1）。言語リソースとは言語の駒とルールであり、文法と語彙、慣用表現から構成される。ここでは「リソース」という用語が用いられているが、これは知識としての言語に留まらず、「実際のコミュニケーションの場面で援用することができるコミュニケーション上の資源」という意味合いをもつ。したがって、文法ではなく文法「力」を、語彙ではなく語彙「力」を、慣用表現ではなく慣用表現「力」をいかに育むか（リソース化）が英語学習における鍵となる。

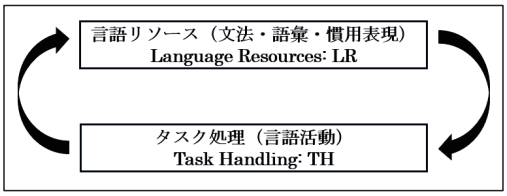


図1. 言語リソースとタスク処理の相互連関としてのコミュニケーション能力モデル

一方、タスクとは、我々が日々の生活において行うおよそ全ての活動を指し、顔を洗うことや部屋を掃除することといった言語使用を伴わないタスク（non-verbal task）と、レポートを書くことや小説を読むこと、道案内をすることといった言語使用を伴うタスク（verbal task）に大別される。外国語教育においては

当然後者を中心に扱うことになるが、状況に応じて前者も射程に含まれることがある。尚、タスクは一般に目的志向性（goal-orientedness）を有しており、何らかの目的を達成するために遂行されるものである。

言語リソースとタスク処理の関係を、「水戸駅までの行き方が分からない外国人観光客に道案内をすること」を事例に捉えると、以下のようになる。ここでのタスクは、外国人観光客に水戸駅への行き方を理解してもらうことであるが、それを遂行するためには道案内をする際に求められる文法や語彙・表現の知識が求められる。例えば、Go straight and turn right. のような命令文、You can see it on your left. のような助動詞 can といった文法項目に加え、turn, left, right, straight, blocks, on といった個々の語彙項目が含まれる。このように、言語タスクとは、言語リソースを活用して遂行されるものである。

コミュニケーション能力を言語リソースとタスク処理の観点から捉えると、英語教育は「言語リソースの充実化」と「タスク処理力の向上」という２つの柱を軸に展開されることとなり、両者は相互補完的な関係となる。ここで重要となるのが、Can-do と Can-say という概念である。Can-do はタスク処理に対応し、「英語を使って何ができるのか」を記述したものである。例えば“I can use simple phrases and sentences to describe where I live and people I know.”（CEFR Common Reference Levels: self-assessment grid Spoken Production A1）のように、I can ～. という形で記された能力記述文を指す。Can-do をリストとして設定することにより、学習者が学習を通して何ができるようになったのかを明確に把握することができ、到達度評価の際にも活用できるという利点がある（長沼 , 2007）。わが国においても文部科学省による Can-do リストの作成が各学校に求められたことを契機に広く周知されたものとなったが、それが効果的に活用されているかについては疑問が残るのが現状である。その主な理由の一つが、「～することができる」という行動面の記述に終始し、「どのような言語を使ってその行動を達成するのか」という視点が欠如していることである。上述した道案内というタスクの場合、たとえ目的を達成することができたとしても、初級の学習者と上級の学習者では用いる文法や語彙・慣用表現（言語リソース）のレパートリーにおいて大きな違いが生じるのが当然である。したがって、「どのような言語を使うのか」という視点から Can-say を記述することが必要となる。Can-do と Can-say は車の両輪の関係にあり、Can-say を伴わない Can-do をいくら列挙したとしても、それはカリキュラムの編成原理とはならない。

また、Can-do と Can-say を設定する際に重要となるのが、コミュニケーション能力を発達的視点で捉えることである（田中他 , 2005）。例えば中学１年から高校３年というスパンを考えた場合、中学１年生が遂行すべきタスクと高校３年生が遂行すべきタスクは自ずと異なるはずである。例えば、時事問題についてのまとまった英文を読み、その内容を 200 語で要約するといったタスクを遂行することは、中学生には期待できないだろう。また、同一のタスクについても、中学１年生が使用する言語リソースと高校３年生が使用する言語リソースには質的な違いが存在する。Show and Tell というタスクを例に取れば、中学１年生と高校３年生では使用する言語リソースのレパートリーは当然異なり、発話量も後者の方が多くなるはずである。以上の議論から、カリキュラムをデザインするためには、どの段階（ステージ）で、どのようなタスクと言語リソースを取り扱うのかを明確化し、コミュニケーション能力の発達をらせん状（スパイラル）に捉えることが肝要となる（図 2）。FTEC の今後の課題として、英語Ⅰから英語Ⅵまでの学修内容をタスク及び言語リソースの観点から精査し、本学独自の Can-do 及び Can-say リストを策定することが挙げられる。

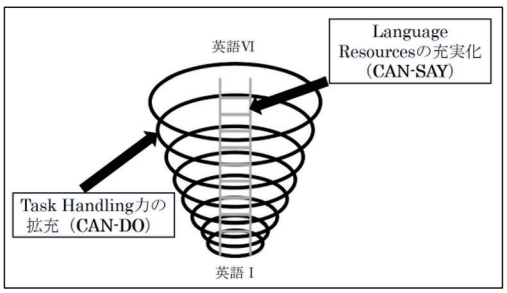


図2. コミュニケーション能力のスパイラルな発達モデル

3.2 4 技能・5 領域から表現モードへの転換

2017 年 3 月に告示された小学校学習指導要領（文部科学省 , 2017）及び中学校学習指導要領（文部科学省 , 2017）、2018 年 3 月に告示された高等学校学習指導要領（文部科学省 , 2018）では、CEFR に準拠した形で従来の 4 技能における「話すこと」を「話すこと（やり取り）」と「話すこと（発表）」に分け、「聞くこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」、「読むこと」、「書くこと」から成る 5 領域という考え方が採用された。また、大学入試改革の一環として英検や TOEIC などの外部試験が導入されることとなり、従来の「読むこと」、「書くこと」、「聞くこと」に加えて「話すこと」の力を測定することが求められるようになった。

このように、英語教育において 4 技能という概念は 5 領域となったが、FTEC ではそれらを「表現モード」（mode of expression）として捉える視点を採用する。例えば「自己紹介をする」というタスクは、聴衆を前に口頭で行う場合と、e メールで行う場合のいずれかの方法で遂行される。換言すれば、自己紹介というタスクは speaking と writing という表現モードのいずれかを通して遂行されるものである。同様に、論文の成果をポスターセッションで発表するというタスクは、ポスターを作成する（writing）に加え、研究内容の口頭による説明（speaking）、聴衆と質疑応答を行うこと（speaking, listening）という複数の表現モードが組み合わさって遂行されるものである。このようなタスクをマルチ・モーダル・タスク（multi-modal task）と呼ぶ。

このように考えると、これまで 4 技能と呼ばれてきたものは、実はタスクを達成するための表現モードであることが分かる。したがって、どのようなタスクに取り組むのかという点を捨象してリスニング力やライティング力等を議論するのではなく、特定のタスクを遂行する力を育むためには、どのような表現モードが要請されるのかという視点へ転換することが求められる。

では、4 技能における技能（skill）という概念は FTEC においてどのように位置づけられるのであろうか。結論を先に言えば、スキルとはタスクの円滑な遂行のために援用されるものである（田中他 , 2005）。例えば、プレゼンテーションは、「話すこと」という表現モードを通して遂行されるタスクであるが、効果的なプレゼンテーションを行うためには、アイコンタクトや間の取り方、聴衆の巻き込み方などプレゼンテーション特有のスキル（presentation skills）を用いることが求められる。同様に、会議の司会をするためには、議事進行のスキル（chairing skills）を援用することが必要となる。したがって、タスク処理力を高めるためには、タスク固有のスキルの指導を併せて行わなければならない。タスクと表現モード、スキルの関係を示したのが図 3 である。

図3. タスクと表現モード，スキルの関係

3.3 MAP の条件

英語教育は、素材（materials）とタスクを軸に展開されるが、FTEC では素材の選択やタスクのデザインの条件として“MAP”という概念を重要視している。MAP は、Meaningful, Authentic, Personal の頭文字を取ったものであり、それぞれ「有意味であること」、「白けない、本物であること」、「自己に引き寄せられること」を表す。

まず、Meaningful についてであるが、英語教育においては当然のことながら理解可能な素材（インプット）を学習者に提示する必要がある。第二言語習得理論では、理解可能なインプット（comprehensible input）として、学習者の現時点での水準よりも少し高く、かつ努力を通して到達可能なレベルのインプット（i+1）を提示することが重要であると言われている（Krashen, 1981）。したがって、教員は学習者のレベルを見極め、同じ素材を扱う場合においても必要な足場掛け（scaffolding）を与え、学習内容を無理なく理解し、定着することができるよう工夫を行うことが求められる。また、タスクにおいても、学習者のレベルに応じて適切な難易度を設定した上でデザインする

ことが必要となる。

Authentic は、学びの空間をいかに白けず、本物のコミュニケーションが行われる空間にするかに関する視点である。教員と学生がいずれも日本人の場合、時として会話等の活動が白けてしまい、惰性で進行することがある。教員側の工夫として、インフォメーション・ギャップ型のタスクをはじめとした、コミュニケーションを行う必然性ないしは意味の交渉（negotiation of meaning）を伴った活動をデザインすることを通して authentic な学びを実現することが可能となる。

最後の Personal とは、学習内容が自己に引き寄せられた状態を指す。例えばリーディング・タスクを行う場合、オーラル・イントロダクションや画像・映像を使って学習者の既存の知識（スキーマ）を活性化し、読むことに対する動機づけを高める工夫が必要となる（卯城 , 2009）。また、内容理解にとどまらず、読んだ内容に対して学習者にコメントさせる活動（commenting）や、関連する情報をウェブで検索し、その内容をクラスに報告させる活動（reporting）などを実践することで活動を personal なものにすることができる。

素材及び活動をどのように MAP なものにするかは、個々の教員の力量に依るところが多いが、本学の英語教育を実践する際の鍵概念として教員間で共有していきたい。

4. FTEC の運用

本節では、前節までの理論的背景を踏まえ、FTEC がどのように運用されるかについて述べたい。

4.1 各科目の内容と科目間の関係

表 1 に示されている通り、本学の必修英語科目は英語Ⅰ～Ⅵの 6 科目から構成されている。人間科学部及び総合政策学部は英語Ⅰ～Ⅵが必修であり、看護学部のみ英語Ⅴ・Ⅵが選択となる [2]。配当年次については、人間科学部健康栄養学科と看護学部のみ 3 年間であり、他の学部・学科は 2 年間である。

これまでの必修英語科目は、学部ごとに異なるコンセプトで運営されており、例えば人間科学部においては英語Ⅰ・Ⅱが listening と speaking、英語Ⅲ・Ⅳが reading と writing、英語Ⅴ・Ⅵがネイティブ教員による実践的な内容、という大枠のみが共有され、シラバスや使用テキスト、成績評価の方法等は個々の担当教員の裁量に委ねられてきた。この方針には、個々の教員が独自のペースでそれぞれの専門性や指導スタイルを活かした授業を展開することができるという利点がある一方、授業内容の難易度の差や、習熟度別クラス間における成績評価の公平性をいかに担保するか、各科目が英語教育カリキュラムの中で互いにどの

表1. 必修英語の配当年次

学部＼年次	1 年春	1 年秋	2 年春	2 年秋	3 年春	3 年秋
人間（健康栄養以外）	英語Ⅰ 英語Ⅲ	英語Ⅱ 英語Ⅳ	英語Ⅴ	英語Ⅵ		
健康栄養学科	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ	英語Ⅳ	英語Ⅴ	英語Ⅵ
総合政策	英語Ⅰ 英語Ⅲ	英語Ⅱ 英語Ⅳ	英語Ⅴ	英語Ⅵ		
看護	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ 英語Ⅴ*	英語Ⅳ 英語Ⅵ*		

*看護学部の英語Ⅴ・Ⅵは選択。

ように連関しているかが不明瞭である、といった問題点が指摘されてきた。これらの問題点を解消すべく、FTEC ではシラバスや使用テキスト、成績評価方法の共通化をはじめとする一連の改革を図り、英語授業の質的保証やカリキュラムの一貫性を高めることとした。その際、共通化を図っている他大学の実践例も参考とした（福田 , 2009; 池上・新井・西山 , 2015）。

まず、各科目の関係性について見ていきたい。上述した通り、FTEC ではコミュニケーション能力を言語リソースとタスク処理の相互作用として動態的に捉えるモデルを採用している。また、従来の 4 技能という発想から脱却し、「話すこと（やり取り・発表）」、「聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」という表現モードを統合したマルチ・モーダルな言語活動を通して英語力がスパイラルに向上していくという考え方に依拠している。ここから、必修英語科目は言語リソースの充実化を図る科目群と、タスク処理力を高める科目群に大別されることとなる。具体的には、図 4 に示されているように英語Ⅰ・Ⅱにおいて言語リソースの定着に焦点を当てた内容を展開し、英語Ⅲ・Ⅳにおいてタスク処理力の向上に主眼を置いた内容を展開する。英語Ⅰ・Ⅱ及び英語Ⅲ・Ⅳが相互に連関することにより、英語運用力を一体的に高めていくこととなる。英語Ⅴ・Ⅵについては、ネイティブ教員を積極的に配置し、言語リソースとタスク処理を区別することなく、英語Ⅰ～Ⅳで身に付けた英語コミュニケーション力をスパイラルに高めていくことが目標となる。それぞれの科目においては、全ての表現モードを通したタスクが展開される。

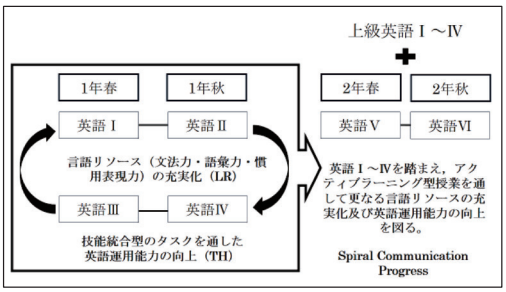


図4. 科目間の関係

4.2　使用テキストと成績評価

使用テキストについては、英語Ⅰ・Ⅱで『コミュニケーションのためのベーシック・グラマー：Living Grammar』（成美堂）を、英語Ⅲ・Ⅳで『interchange Fifth Edition Book 1』（Cambridge University Press）を、英語Ⅴ・Ⅵで『interchange Fifth Edition Book 2』（Cambridge University Press）をそれぞれ使用する。『Living Grammar』は全 22 ユニットから構成されており、各ユニットのテーマに応じた文法項目が配置されている。これらの文法項目は中学校から高等学校までで学習する基本的なものであり、大学での学修に無理なく接続できるようになっている。『interchange』は各ブック 16 ユニットから成り、全ての表現モードを通したタスクを中心に構成されている。上記のテキストは全学で用いられることになるが、全てのクラスで共通して取り扱う範囲を設定した上で、それ以外の部分や投げ込み教材については学生の習熟度に応じて各教員が判断することとなる。

e- ラーニング教材については、以前より全学共通化が図られており、今後も継続する。英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵでは、リアリーイングリッシュ社の Practical English 7 という TOEIC 対策プログラムを、英語Ⅲ・Ⅳでは旺文社の英検 CAT という英検対策プログラムに取り組み、セメスターごとに指定されたユニット数を合格させることが課題となる。通常授業と並行して e- ラーニングを活用することにより、授業時間外の学修時間を確保し、個々の理解度に応じた英語力の充実化を図ることが可能となる。

成績評価についても、上述した通りこれまでは評価規準が各教員の裁量に委ねられ、習熟度ごとの評価の公平性が十分担保されてこなかったといった問題が指摘されてきた。FTEC では、コースワーク（小テスト、課題・宿題、パフォーマンステスト等）が 50%、全学共通の期末試験が 40%、e- ラーニング教材が 10% という内訳で評価を行う。コースワークに含まれる項目を個々の教員の裁量に委ねることで一定の自由度をもたせると同時に、全学共通の期末試験を実施することで習熟度間の評価の公平性を担保することが可能となる。

4.3 クラス編成

FTEC の導入に伴う大きな変更点として、クラス編成の方法が挙げられる。2017 年度までは、各学部において学科別に習熟度別クラスを編成してきたが、クラス内での習熟度の開きが大きい学科が存在することや、学科ごとに 1 クラス当たりの人数に差が生じるといった問題点が指摘されてきた。以上の背景を踏まえ、FTEC では学科の枠を取り払い、学部単位で外部試験（CASEC または TOEIC Bridge）の得点順に 40 名程度ずつの習熟度別クラスを編成することとした。具体的には、人間科学部は 10 クラスに再履修クラスを加えた計 11 クラス、総合政策学部は 5 クラスに再履修クラスを加えた計 6 クラス、看護学部は 2 クラスに編成される（2018 年度）。尚、健康栄養学科 2 年生が履修する英語Ⅲ・Ⅳのクラス分けは 1 年生と合わせて行い、1・2 年生混合のクラスとする。同様に、健康栄養学科 3 年生が履修する英語Ⅴ・Ⅵのクラス分けは 2 年生と合わせて行い、2・3 年生の混合クラスが編成される。尚、再履修クラスを単独で開講するか否かについては、2018 年度の運用状況を見て判断を行う。

習熟度は、大きく A レベル（上級）、B レベル（中級）、C レベル（初級）に分けられ、各レベルに複数のクラスが設定される。例えば人間科学部の場合、A レベルが A1 ～ A3 の 3 クラス、B レベルが B1 ～ B3 の 3 クラス、C レベルが C1 ～ C4 の 4 クラスの展開となる[3]。全てのクラスが概ね CEFR の A1 レベル（Breakthrough）に該当し、後述する単位認定者及び A1 の上位者が A2 レベル（Waystage）程度であると考えられる[4]。クラス編成の際に留意すべき点として、純粋に外部試験の得点でクラス編成を行った場合、C レベルの学生の英語学習に対する動機づけが極端に低下し、授業運営が困難なクラスが出現する可能性が高いことが挙げられる。この点を考慮し、A レベル及び B レベルについては純粋に外部試験の得点順にクラスを編成するのに対して、C レベルについてはそこに含まれる複数クラスの平均点が同程度になるように平準化を行うこととした。したがって、例えば人間科学部の場合、C1 から C4 の 4 クラスの CASEC 平均点がほぼ同一となる。尚、クラス編成は、後述する単位認定との関係上セメスターごとに行われるため、単位認定者の増減が予想されるが、シラバスや使用教材、成績評価の共通化が図られることによって円滑に編成することが可能となる。クラス分けの詳細は、入学時の語学ガイダンスにおいて周知を行う。

4.4 外部試験による単位認定

FTEC 導入に伴う更なる変更点として、希望する学生に対して外部試験による必修英語の単位認定を積極的に行うことが挙げられる。これまでも本学においては「大学以外の教育施設等における学修および入学前の既修得単位等の認定に関する規定」に基づき、英検や TOEIC をはじめとする各種外部試験における成果を本学における科目の単位として認定する制度が運用されてきた。具体的には、上級英語Ⅱ～Ⅳに対して英検 2 級または TOEIC570 点以上、TOEFL iBT53 点以上で 2 単位、英検準 1 級または TOEIC730 点以上、TOEFL iBT68 点以上で 4 単位、英検 1 級または TOEIC860 点以上、TOEFL iBT100 点以上で 6 単位が認定される。上記に加え、2018 年度入学生からは、必修英語を対象とした単位認定制度が適用されることとなる。

FTEC における単位認定基準は表 2 の通りである。基準点の設定においては、下記中教審の答申の内容を踏まえ、語学科目運営会議内のワーキングループにおいて慎重な検討を行った。

「読む・書く・聞く・話す」の 4 技能のバランスに留意し、例えば、学内のライティングセンターなどにより、学習支援を行う。専門分野を学ぶために必要な語学力の修得を目指した教育活動を展開する。TOEFL や TOEIC などの結果に基づいて単位認定を行う場合、大学教育にふさわしい水準か、また、単位数が適当か等について吟味する。」

（中教審「学士課程教育の構築へ向けて（答申）」平成 20 年、p. 18、下線筆者）

表2. 外部試験による英語Ⅰ～Ⅵの単位認定基準

科目	単位認定基準	TOEIC L/R 換算点	単位数
英語Ⅰ・Ⅲ	CASEC 500 点以上	400 点	4 単位
英語Ⅱ・Ⅳ	CASEC 540 点以上	450 点	4 単位
英語Ⅴ・Ⅵ	TOEIC Bridge 154 点以上	500 点	4 単位

注：人間科学部健康栄養学科及び看護学部は履修時期の違いにより認定科目が異なる

FTECにおける単位認定は、セメスター単位で行われる。1年次については春セメスターに履修する英語Ⅰと英語Ⅲを、秋セメスターに履修する英語Ⅱ・Ⅳをセットとして認定を行う（健康栄養学科及び看護学部を除く）[5]。2年次については春セメスターに履修する英語Ⅴと秋セメスターに履修する英語Ⅵをセットとして認定する（健康栄養学科及び看護学部を除く）[6]。尚、従来通り単位認定は希望する学生に対してのみ行い、たとえ単位認定基準を上回ったとしても授業の履修を妨げない。尚、2018年度入学生における単位認定者（申請者）数は、人間科学部が41名、総合政策学部が18名、看護学部が15名であった。

単位認定に用いる外部試験については、2018年度は入学時及び春セメスター末にCASECを、秋セメスター末にTOEIC Bridgeを実施する予定である。得点状況及びプレースメントテストとしての弁別性、実施の容易さ等を考慮し、外部試験の一本化を含めた議論を今後行うこととなる。

4.5 上級英語について

FTECは主に必修英語科目のカリキュラム・フレームワークであるが、単位認定者の受け皿としての役割を担うことから上級英語Ⅰ～Ⅳの展開についても見直しを図った。第一に、開講年次をⅠからⅣ全てに対して1年次から4年次までとした。履修の順序に制限は無く、学生はⅠからⅣを好きな数だけ、自由に組み合わせて取ることができる。第二に、科目内容の精選化を図った。上級英語Ⅰ・Ⅱについては、英語を通して異文化理解や地球市民学について理解を深める「テーマ系」、英検やTOEICなどの「資格試験系」、文法や語彙・表現の充実化を図る「リソース」の3つの系を設定し、それぞれに複数の科目を展開する。上級英語Ⅲ・Ⅳについては、「テーマ系」と「資格試験系」の2つの系での展開となる。それぞれの授業は、文字通り上級レベルの内容を扱うものと、レベルを設定せず広く英語に興味をもつ学生が履修できるもののいずれかとなっている。今後、履修者数や単位認定者がどの程度上級英語を履修したのかについての追跡調査等を行い、2019年度以降の展開について検討を行う予定である。

5. 今後の取り組み

本稿では、FTECの理論的背景を素描し、それがコースデザインやクラス編成、教材、成績評価等の運用面にどのように反映されるかを述べた。カリキュラムの開発（curriculum development）は、単に指導内容やその配列を決定することに留まらず、「制度（system）」の設計である（Munby, 1978; Nunan, 1988）。したがって、不断のPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルを通した試行錯誤の中でより良いものへと改変されていくものである（Richards, 2001）。2018年度及び2019年度は導入の第一サイクルとなることから、策定段階で予見することができなかった問題点や課題が浮き彫りになる可能性も大いに考えられる。それらを一つひとつ改善していくことで、内容の充実化及びより円滑な運営を図っていきたい。具体的には、(1) 定期的な英語教員相互による授業見学及び振り返りの実施、(2) 英語教員対象のFD活動の推進、(3) 学内に有志の英語教育研究会を発足し、本学の必修英語を担当する全ての教員が同じ方向を見つめ、現状と課題を共有していきたい。今後は2018年度から2020年度の学内課題研究助成（課題名：「Framework

of Tokiwa English Curriculum（FTEC）に基づいた共通英語教育カリキュラムの実践と検証」（代表：桑原秀則、分担：森本俊、上野真悠子、Kevin McManus））を中心として継続的に運用及び評価・改善を行っていくこととなる。

注

1「竹人」とは本学創立者の諸澤みよ氏が提唱した概念である。詳細は、常磐短期大学創立 50 周年記念事業委員会･記念誌ワーキンググループ編（2016: 2）を参照。

2 教職課程の履修希望者は、英語Ⅴが必修となる。

3 2018 年度の総合政策学部の英語Ⅰ～Ⅵは、A1, B1, B2, C1, C2, C3（再履修含む）の 6 クラス展開、看護学部の英語Ⅰ・ⅡはA, Bの 2 クラス展開である。

4 CEFR は言語能力を A（Basic User: 基礎的な言語使用者）、B（Independent User: 自立した言語使用者）、C（Proficient User: 熟達した言語使用者）の 3 レベルに分け、それぞれのレベルが A1（Breakthrough）､A2（Waystage）､B1（Threshold）、B2（Vantage）、C1（Effective Operational Proficiency）、C2（Mastery）のように下位区分に分けられる。わが国の英語教育では、中学校卒業時に A1 ～ A2、高等学校卒業時に A2 ～ B1 レベルに到達することが目標とされている（文部科学省 , 2015）。

5 健康栄養学科及び看護学部は、1 年次配当の英語Ⅰ（春）・Ⅱ（秋）をセットして単位認定を行う。

6 健康栄養学科及び看護学部は、2 年次配当の英語Ⅲ（春）・Ⅳ（秋）をセットして単位認定を行う。健康栄養学科については、3 年次配当の英語Ⅴ（春）・Ⅵ（秋）をセットして単位認定を行う。看護学部 2 年次配当の英語Ⅴ・Ⅵは選択科目であるため、単位認定は行わない。

担当部分

1. はじめに、2. 英語教育の高次の目標：桑原秀則
3. FTEC の理論的背景：森本　俊
4. FTEC の運用（4.1 ～ 4.3）：Kevin McManus
4. FTEC の運用（4.4 ～ 4.5）、5. 今後の取り組み：上野真悠子

謝辞

本研究は、学内研究課題「Framework of Tokiwa English Curriculum（FTEC）に基づいた共通英語教育カリキュラムの実践と検証」（代表：桑原秀則、分担：森本俊、上野真悠子、Kevin McManus）の助成を受けたものである。

参考文献

池上真人・新井英夫・西山文夫 .（2015）. 松山大学英語カリキュラムの現状と課題－習熟度別クラス制における成績評価方法－ .『松山大学論集』第 26 巻第 6 号 , 227-245.

卯城祐司 .（2009）.『英語リーディングの科学』. 東京：研究社 .

田中茂範 .（2016）.『英語を使いこなすための実践的学習法－ my English のすすめ』. 東京：大修館書店 .

田中茂範・アレン玉井光江・根岸雅史・吉田研作（編）（2005）.『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み ― ECF: English Curriculum Framework』. 東京：リーベル出版.

中央教育審議会 .（2008）.『学士課程教育の構築へ向けて（答申）』

常磐短期大学創立 50 周年記念事業委員会・記念誌ワーキンググループ編.（2016）.『常磐短期大学五十周年記念誌』. 学校法人常磐大学 . https://www.tokiwa.ac.jp/tokiwa/jc50th/project/magazine/tokiwa_jc50th.pdf

長沼君主 .（2007）. Can-do 尺度はいかに英語教育を変革しうるか－ Can-do 研究の方向性－ .　ARCLE Review, 2, 50-77.

福田浩子 .（2009）. 日本の英語教育における CEFR の応用の可能性 .『茨城大学人文学部紀要. 人文コミュニケーション学科論集』6, 25-41.

森本俊・佐藤芳明（編著）.（2017）.『多文化共生時代の英語教育』. 東京：いいずな書店

文部科学省 .（2015）. 英語教育の抜本的強化のイメージ. 平成 27 年 8 月 5 日教育課程企画特別部会資

料 2-2.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/08/06/1360750_2-2.pdf

文部科学省 .（2017）.『小学校学習指導要領（平成二十九年告示）』.

文部科学省 .（2017）.『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）』.

文部科学省 .（2018）.『高等学校学習指導要領（平成三十年告示）』.

Bachman, L. F.（1990）. *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.

Canale, M., & Swain, M.（1980）. Theoretical bases of communicative approach to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm

Council of Europe.（2001）. *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Krashen, S.（1981）. *Second language acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon.

Munby, J.（1978）. *Communicative syllabus design*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nunan, D.（1988）. *Syllabus design*. Oxford: Oxford University Press.

Richards, J. C.（2001）. *Curriculum development in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

信」は行う際に〈篤く〉するためのものである。聖賢の言葉は、結局は一つに行き着くのである。

学ばないものがあれば、それを学び、できなければそのままにしない。質問していないものがあれば、それを質問し、分からなければそのままにしない。考えていない点があれば、それを考え、納得できなければ、そのままにしない。判断していないものがあれば判断し、明らかでなければそのままにしない。実行できていないものがあれば、それを実行し、篤実にしないものは、そのままにしない。人が一度でできたことは、自分はそれを百回行う。人が十回やってできたことは、自分はそれを千回行う。はたしてこの道を行い得たならば、愚であっても必ず善に明らかとなり、柔であってもその行いは強固なものとなる。

《釈義》以上はすべて〈善を明らかにし、身を誠にする〉方法である。

○本節は〈之れを誠にする〉ためのことである。〈博・審・慎・明・篤〉のはたらきを百倍にすれば、〈愚〉であっても、その〈択んだ善〉は必ず〈明らか〉となり、〈柔〉であってもその〈固く執り行った〉善は必ず〈強く〉なる。すなわち〈勇〉の徳によって〈仁〉〈知〉の徳を完成させるのであり、だからこそ百倍の効果がでるのである。

＊本稿は常磐大学二〇一八年度課題研究〈各個研究〉助成による成果の一部である。

切に問うて近く思う。仁其の中に在り」とある。『読論日札』巻四、博学而篤志には「博学は則ち博文なり。道は仁のみ。言語を以て之れを尽くすべからざれば、之れを詩書礼楽に寓し、人に教うるに事を以てし、之れをして思いて得しむ。博文約礼し、仁に習るも、自ら其の学・志・問・思の、仁を求むるの事に非ざる莫きを知らざるは、仁、其の中に在る所以なり。文を学べば固より当に其の志篤く、則ち厭わずして憤悱する所有るを伝うべし。切に問えば則ち得る所審らかにして深し。近く思うは、近く譬えを取る［雍也］、仁を為すこと己に由る［顔淵］にして、仁を得る所以なり」とあり、自注に「〈学問思辨〉は、之れを知る所以なり。之れを知るは之れを行う所以なり。故に中庸は四者と〈篤行〉と、並び称して軽重を分かたず。若し四者を以て〈力行〉に及ばずとす［集注］れば、則ち〈力行〉は重くして四者は軽し。恐らくは非なり」とある。

（八）**文行忠信**：『論語』述而篇に「子、四を以て教う。文行忠信なり」とある。『読論日札』巻二、以四教には「文行忠信は、孔門の人に教うるの目なり。前に略して之れを論ず。文は詩書執礼［述而］、博文約礼［雍也］、詩に興り、礼に立ち、楽に成る［泰伯］等、所謂行いて余力有れば、則ち以て文を学ぶ［学而］。文は吾れ猶お人のごときこと莫し［述而］。夫子の文章は、得て聞くべし［公冶長］。而して文王既に没して、文茲に在らざるか［子罕］。夫子の堯舜を祖述し、文武を憲章する［中庸］所以は、皆な是れなり。行は、入りては孝、出でては弟、慎みて信あり、衆を愛して、仁に親しむ［学而］等、夫子の躬行し以て人に示す所、即ち吾れ行いて二三子と与せざる者無き［述而］、是れなり。忠信は文行の本なり。即ち忠信を主とす［学而］。易の君子は徳に進み業を修む、忠信は徳に進む所以［乾］、是れなり。修身を論ずれば則ち忠信は本なり。教人の目を挙ぐれば、則ち四者相い並ぶ。故に曰く、四もて教うとして軽重を其の間に措かず。各々当にすべき所を言う。《自注略》夫子、四者を以て人に教う。夫子の道を学ばんと欲すれば、当に此を以て準と為すべし。若し後人の見を以て、別に教学の法を創立すれば、之れを信じて古を好む［述而］と謂うべからざるなり。《自注略》周官、卿大夫に、州長・党正・司諫・宮正、皆な徳行道芸と曰う。師氏は三徳三行を教え、保氏は以て道を養い、六芸六義を教う。道芸は文なり。徳行は行と忠信なり。礼記の四術、詩書礼楽《王制文王世子》も亦た文なり。此れ夫子の四教、亦た先王の法に因みて、信じて古を好むなり」とある。

36【現代語訳】博く学び、審らかに問い、慎んで思い、明らかに辨じ、篤く行う。

《釈義》この五つは〈これを誠にする〉方法である。〈学・問・思・辨〉は、〈善を択ぶ〉細目であり、〈学んで知る〉ことである。〈篤く行う〉は、〈固くこれを執る〉ことであり、〈安行利勉〉を兼ねて述べている。〈知〉の徳で〈善を明らか〉にし、〈仁〉の徳で〈身を誠にする〉のである。

○考察する。〈博く学ぶ〉とは、『論語』の「博く文に学ぶ」ことである。その他「詩書」「詩・礼・楽」「芸に游ぶ」などと言われていることが、これに該当する。学べば必ず疑問が生じる。『論語』にも「疑問が生じれば質問しようと思う」とあるように、〈これを問う〉のである。〈これを問う〉は、必ず繰りかえし考え議論した後に、最もよい答えを得ることができる。そのため〈問う〉は〈審らにする〉ことが肝要なのである。『論語』には「学んでも思い考えなければうわべだけの知識になってしまう」とある。そのため「切実な問題を問いただし身近な問題として考える」のである。〈思う〉ことは、時に自分の心を師としてしまう。そのため『論語』では「思い考えるばかりで学ばない」と「よこしまでかたよった見解に陥る」とするのである。そのため〈思う〉は、〈慎む〉が肝要なのである。ただ〈学び・問い・思う〉だけで折中しないと、多くの疑問が腹に満ちあふれ、多くの難題が胸を塞いでしまう。そのためその当否を判断しなくてはならない。時にゆがんだ考えや憶測によって判断してしまうと、その害ははかりしれない。そのため〈辨ず〉は、〈明確〉が肝要なのである。〈学・問・思・辨〉の四つは〈善を明らかにする〉方法であり、〈中庸を択び〉、〈学んで達道を知る〉ためのものである。重要なことは学び知ったことを必ず行事に施すことであるが、それがかりそめで薄いと、〈ひと月もそれを守ることができない〉。そのため〈行う〉は〈篤くする〉ことが肝要なのである。『論語』に示される孔子の四教の「文行忠信」は、本篇の〈学・問・思・辨〉が「文」である。これに「行」が次ぐが、「忠

志を言うは人情を曲尽し、能く言語の及ばざる所に及び、以て人を感ぜしむべし。故に夫子称して、思い邪無し［為政］とす。其の用を為す者は則ち曰く、興観羣怨し、君父に事え鳥獣草木を識る［陽貨］と。曰く、以て言う［季氏］と。曰く、授くるに政を以て達し、使して専対す［子路］と。曰く、往くを告げて来たるを知る［学而］と。而して一つとして勧懲に及ぶ者無し。故に『周官』に、楽語は則ち興・道・諷・誦・言・語［大司楽］とし、六詩は則ち風・賦・比・興・雅・頌［大師］とし、亦た勧懲に及ばざるなり。其の人情を直言する者は、漢魏唐宋の詩の、諷誦の間に至りて、人心を感発すると雖も、亦た皆な同じからざる無し。《自注略》則ち此れ詩に興るを言う者にして、其の義も亦た見るべきなり。仁義は心に根ざし、其の行事に施すには、則ち必ず礼に度る。故に曰く、礼楽は徳の則なり［左伝僖公二十七年］、と。礼以て中を教え、用いて以て己を修め人を治む。学此れに至るは、所謂礼に立つなり。《自注略》楽以て性情を養い、邪穢を滌し礼と相い須ち内外交々修まる。《自注略》以て身を修むるに足りて、以て風を移し俗を易え、天下をして知らずして化さしむるに至るは、則ち亦た楽の妙用なり。故に顔淵邦を為むるを問うに則ち対うるに韶舞を以てす［衛霊公］。所謂楽に成るは、教えの至る者なり。《自注略》程朱の本文を解くは、皆な己を修むる者を以て之れを言う。其の説は固より善し。然れども孔門の人に教うるに仁を以てす。仁とは己を修め人を治む。故に本文も亦た己を修め人を治むの道を兼ねて之れを言うなり。或は云う、人を治むる者は己を修むる自りして之れを推すのみ。此の論、其の理は則ち言を聴くべきも、其の事は則ち以て一概に之れを論ずべからざる者有り。民之れに由らしむべくんば［泰伯］、則ち之れに由らしむ所以の道を学ばざるべからず。詩の民を化し家郷邦国に及び、王朝の礼、二南韶舞の楽の如きは、学ぶ所は特だ以て自ら修むるのみに非ず、亦た以て人を治む。学者当に一端に拘わるべからざるなり」とある。

（四）**芸に游ぶ**：『論語』述而篇に「子曰く、道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」とある。『読論日札』巻二、志於道には「道に志し徳に拠り仁に依り芸に游ぶ、四者並び行い兼ねて施し、先後有るに非ざるなり。道とは天下の達道の君臣・父子・夫婦・長幼・朋友にして、忠孝仁義、人倫の日用自り、以て天下の大経を経綸し、天地の化育を知るに至るまで、凡そ行いに施す者、是れなり。徳とは知仁勇の天下の達徳にして、凡そ仁義礼智等の統名なり。心に存する者を指して之れを徳と謂い、行いに施す者を指して之れを道と謂うなり。《自注略》仁とは諸徳の元にして、百行の本なり。凡そ徳行道芸は皆な仁中の細目なり。故に道徳中に就きて、特に仁を挙げて之れを言う《自注略》。徳云仁云とは、皆な道を行う所以なり。志を立つるは道を行うに在り。故に曰く志と。道を行なうは、其の困（固か？）有の徳を乗りて之れを失わず。故に曰く拠と。諸徳は仁に統べられ、徳を乗る者は諸徳の中、仁に倚附して離さず。故に曰く依と。皆な其の道を行う所以にして、日々詩書六芸中に游泳し、以て日用の闕くべからざる者に慣習し、其の道に進むを自覚せず。故に曰く游と。此れ孔門教育の法なり。後の教学の理を以て先と為すが如き者に非ざるなり」とある。

（五）**疑わしきは問わんと思う**：『論語』季氏篇に「君子に九思有り。視ることは明を思い、聴くことは聡を思い、色は温を思い、貌は恭を思い、言は忠を思い、事は敬を思い、疑わしきは問いを思い、忿りには難を思い、得るを視ては義を思う」とある。『読論日札』巻四、九思には「洪範五事、貌には恭と曰い、言には従と曰い、視には明と曰い、聴には聰と曰い、思には睿と曰う。夫子の九思は、蓋し此れに本づく。信じて古を好む［述而］、言は古昔に則る［曲礼］、と。其の根拠有ること大抵此の如し。後世の新たに科條を創立し以て一種の学と為す者と同じからず。《自注略》故に忠告して善導す《子路》［顔淵］、言は忠信に、言は忠を思う。行いは篤敬《衛霊公》。居処恭に、事を執ること敬に［子路］、事は敬を思う《同上》［季氏］。利を見ては義を思う《子路》［憲問］、得るを見ては義を思う《子張》も、亦た九思の目なり。《……又た曰く疑えば則ち問う云々は、今の弟子は恥じて知らざるも又た問わず。》此の如きは聖門の常言にして、九思に至りて備われり。《自注略》」とある。

（六）**学びて思わざれば則ち罔し**：『論語』為政篇に「学びて思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆し」とある。『読論日札』巻一、学而不思には「〈博学・審問〉は学なり。〈慎思・明辨〉は思なり。思わざれば則ち学ぶ所死物虚霊と為りて活用すべからず。学ばざれば則ち思う所私知俗見と為りて邪僻に陥る」とある。

（七）**切に問いて近く思う**：『論語』子張篇に「子夏曰く、博く学びて篤く志し、

36【訓読文】**博く之れを学び、審らかに之れを問い、慎みて之れを思い、明らかに之れを辨じ、篤く之れを行う。**

《釈義》五者は〈之れを誠にする[35]〉の方なり。〈学・問・思・辨〉は、〈善を択ぶ[35]〉の目にして、〈学知[30]〉の事なり。〈篤く行う〉は、即ち〈固く之れを執る[35]〉者にして、〈安行利勉[30]〉を兼ねて之れを言う。〈知〉以て〈善を明らか〉にして、〈仁〉以て〈身を誠にする[34]〉なり。

○按ずるに、〈博く学ぶ〉とは「博く文に学ぶ(一)」の謂いなり。即ち「詩書(二)」と曰い、「詩礼楽(三)」と曰い、「芸に游ぶ(四)」と曰う等は是れなり。学べば必ず疑う所有り。「疑わしきは問わんと思う(五)」。故に〈之れを問う〉なり。〈之れを問う〉は、必ず反覆思繹論難し、然る後に以て其の至当を得るべし。故に〈問う〉は其の〈審らかにする〉を要とするなり。「学びて思わざれば則ち罔し(六)」。故に「切に問いて近く思う(七)」なり。〈思う〉は或いは己の心を師とす。「思いて学ばざる」の「殆き(八)」と為す所以なり。故に〈思う〉は其の〈慎む〉を要とするなり。徒らに〈学・問・思〉して、中に折中する所無くんば、則ち群疑腹に満ち、衆難胸を塞ぐ。故に断決すること有りて、以て其の当否を〈辨ず〉。〈辨ずる〉に或いは僻見臆断より出づれば、則ち其の害は大なり。故に〈辨ず〉は其の〈明らかなる〉を要とするなり。〈学・問・思・辨〉の四者は〈善を明らかにする〉の方にして、〈中庸を択び[8]〉、〈学びて之れを知る〉所以なり。要は必ず之れを行事に施す。然して其れ或いは偸薄すれば、則ち〈期月を守る能わず[8]〉。故に〈行う〉は其の〈篤くする〉を要とするなり。孔子の四教、「文行忠信(一)」は、本篇の〈学・問・思・辨〉が即ち「文」なり。之れを次ぐに〈行〉を以てし、而して「忠信」は之れを行うに篤くする所以なり。聖賢の言、其の致るは一なり。

学ばざる有れば之れを学び、能くせざれば措かざるなり。問わざる有れば之れを問い、知らざれば措かざるなり。思わざる有れば之れを思い、得ざれば措かざるなり。辨ぜざる有れば之れを辨じ、明らかならざれば措かざるなり。行わざる有れば之れを行い、篤くせざれば措かざるなり。人一たびにして之れを能くすれば、己、之れを百たびす。人十たびにして之れを能くすれば、己、之れを千たびす。果たして此の道を能くすれば、愚と雖も必ず明らかに、柔と雖も必ず強なり。

《釈義》以上、皆な〈善を明らかにして、身を誠にする〉の方なり。

○是れ〈之れを誠にする〉所以の事なり。〈博・審・慎・明・篤〉、其の功を百倍すれば、〈愚〉と雖も其の〈善を択ぶ〉所は必ず〈明〉にして、〈柔〉と雖も其の〈固く執る〉所は必ず〈強〉なり。而して能く其の〈仁〉〈知〉の徳を成すは、其の〈勇〉を以てす。故に能く百倍の功を致すなり。

【訳注】

（一）**博く文に学ぶ**：『論語』雍也篇に「子曰く、君子は博く文に学び、之れを約するに礼を以てすれば、亦た以て畔(そむ)かざるべきか」、また子罕篇に「顔淵喟然として歎じて曰く、……我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす」とある。『読論日札』巻二、博学於文には「博文約礼は、顔子も亦た之れを言う《自注略》。孔門の教法は、文行忠信[述而]なり。文は詩書執礼[述而]、凡そ六芸の文なり。礼は則ち其の行いに執るものにして、即ち約礼なり。礼を学ばざれば以て立つ無し[季氏]。礼は行いの準則為る所以なり。博・約は即ち文・行にして、忠信の人は以て礼を学ぶべくんば[礼器]、則ち忠信を主として夫子の四教を備わざるを得ず。《自注略》」とある。《》は自注。□は訳注者注。以下同じ。

（二）**詩書**：『論語』述而篇に「子の雅(正)に言う所は、詩書執礼、皆な雅に言うなり」とある。『読論日札』巻二、詩書執礼には「此れ孔門の教法、即ち博文約礼[雍也]なり。《自注略》詩は以て人情事変を知り、興観群怨し、父に事え君に事え、以て人と言うべし[陽貨]。《自注略》書は以て政事を道い、凡そ天下古今の世変事態、具備せざるは莫し。礼は則ち人の立つ所以にして、斯須も身を去るべからざる者なり。而して天下を経綸する所以の者に至りては、存せざるは莫し。此れ皆な所謂夫子の文章は得て聞くべき者なり[公冶長]」とある。

（三）**詩礼楽**：『論語』泰伯篇に「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」とある。『読論日札』巻二、興於詩には「詩は本より善悪を勧め懲らす所以に非ず。《自注略》蓋し詩の

る〉と結んでいる。さらに41節でこれを承けて、〈これを誠にすることを貴ぶ〉と言うのは、いずれも本節の〈これを誠にする〉を主として述べているのである。〈これを誠にする〉とは、〈誠〉に至る方法であり、本より軽重等級に分別して論を立てているのではない。さらに考察する。先儒は〈誠〉と〈これを誠にする〉を論じるにあたって、もっぱら私欲の有無によってその違いを判断している。そのため、彼らの〈これを誠にする〉方法は、その〈善〉を成長させることではなく、その悪を捨て去ることになる。この論では、その〈択ぶ〉ものは、不善であり、不善を択び捨て去ることになってしまい、それは〈善を択び、これを執る〉ことではない。本文に述べられる〈善を択ぶ〉とは、その要点は〈学問思辨〉にある。思うに、すべき〈善〉の中には、大小軽重があり、緩急先後があり、善と不善が似ていて見分けにくいものがある。かりそめにも〈学問思辨〉によって〈善を明らかにし〉、〈父子・君臣・夫婦・昆弟・朋友の交り〉から、〈郊社禘嘗〉〈九経〉等に至るまで、講究習熟し、現実に施せるようになって、実際の現場で〈篤実に実行する〉ことができたなら、それが所謂〈道を脩めた〉ことであり、それは〈善〉が先に入って、中に充実しているので、不善の事は入る余地はない。それはまさしく『論語』の「かりそめにも仁に志したならば、悪はなくなる」ということであり、努めてその悪を去らなくても、その悪は自ずと消えてゆくのである。これが『中庸』の本旨であろう。そのため、篇中に一度も「人欲の私」等の字が記されていないのだ。もし〈これを誠にする〉ことを、「人欲の私」があるとして解釈したならば、それは流れ至って、〈之れを誠にする〉ことはたやすいとし、〈善を択び固く執る〉ことを〈学知〉〈利行〉以下の事とみなし、貴ばず、ただ人欲を去ることだけを主張し、私欲がきれいになくなれば、〈生知〉〈安行〉という聖人の境地に至れるとする弊害が生じる。これは〈人道〉を脩めることに務めず、直接に〈天道〉を得ようとすることであり、一度に如来の境地に飛躍する説と同じである。子思の尊重する所は〈人の道〉を修めることであり、そのため〈これを誠にする〉ことを貴ぶのであって、所謂〈天の道〉とは、〈道〉が基づいている所を示しているに過ぎないことを、彼らは気づいていないのだ。いかにして〈道を脩める〉かは、『中庸』篇中に詳細に論じられている。どうして特に私欲の有無を云うことがあろうか。

36【原文】**博學之、審問之、愼思之、明辨之、篤行之。**

《釈義》五者誠之之方。學問思辨、擇善之目、而學知之事。篤行(校一)、卽固執之者、兼安行利勉而言之。知以明善、仁以誠身也。

○按、博學者博學於文之謂。卽曰詩書、曰詩禮樂、曰游於藝等是也。學必有所疑。疑思問。故問之。問之者、必反覆(校二)思繹論難、然後可以得其至當。故問要其審也。學而不思則罔。故切問而近思。思者或師己心。思而不學之所以爲殆。故思要其愼也。徒學問思(校三)、而中無所折中、則群疑滿腹、衆難塞胸。故有斷決、以辨其當否。辨或出於僻見臆斷(校四)、則其害大矣。故辨要其明也。學問思辨四者明善之方、而所以擇於中庸、學而知之。要必施之行事。然其或偸薄、則不能期月守。故行要其篤也。孔子四教、文行忠信、本篇學問思辨卽文也。次之以行、而忠信者、行之所以篤。聖賢之言、其致一矣。

有弗學學之、弗能弗措也。有弗問問之、弗知弗措也。有弗思思之、弗得弗措也。有弗辨辨之、弗明弗措也。有弗行行之、弗篤弗措也。人一能之、己百之。人十能之、己千之。果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強。

《釈義》以上皆明善誠身之方。

○是所以誠之之事。博審愼明篤、百倍其功、雖愚而其所擇善必明、雖柔而其所固執必強。而能成其仁知之德者、以其勇。故能致百倍之功也。

【校注】

（校一）會澤家本、熱田家本ともに「篤行」の下に「者」があったが消されている。

（校二）熱田家本には「反復」の下に「思繹」があり、會澤家本には頭注に「思繹」が記される。

（校三）熱田家本には、「學問思」の下に「辨」が挿入されている。

（校四）熱田本では「僻見」の下に「臆断」があり、會澤家本には頭注に「臆断」が記される。

の善を長じ、善を内に主と為せば、而ち悪自ずから生ぜず。後世牿人悪を去るも善未だ必ずしも長ぜず、口に性善と称すと雖も、其の修為に至れば則ち性悪の説と異なること無きなり」とある（《》は自注）。「苟」は集解、集注ともに「誠」とするが、會澤は「字の如し」としており、ここでは「いやしくも」と読んでおく。また「牿人」は意味がとれないが、自注には『孟子』梁恵王上の、王が犠牲の牛を忍びなく思い、牛を羊にかえさせようとした逸話を引いている。

（六）**私欲浄尽**：『論語』顔淵篇「顔淵仁を問う。子曰く、己に克ち礼に復るを仁と為す……」の集注に「仁は本心の全徳なり。克は勝なり。己は身の私欲を謂う。……日日に之れに克ち、以て難しと為さざれば、則ち私欲浄尽し、天理流行して、仁は用に勝うべからず」とある。

（七）**一超佛地**：一超直入如来地のこと。「人間は生まれながらに仏であることを自覚して、修行者が直ちに絶対の境地に入ること。〈『大慧書』上〉」（中村元『広説佛教大辞典』、東京書籍、平成十四年より）

35【現代語訳】**誠は天の道である。**

《釈義》27節の〈天を知らなくてはならない〉ことである。すなわち人道が天道に由来していることを知らなくてはならない。

これを誠にするのは人の道である。

《釈義》27節の〈人を知らなくてはならない〉ことである。すなわち達道を知り修めなくてはならない。

誠の境地は、努力せずともその行いは道に中り、考えることもなく道を知り、ゆったりありのままにしていて道に的中することであり、それに至った者が聖人である。これを誠にするとは、学問思辨して善を択び、それを固く執り行い、誠になることである。

《釈義》*34*節を承けて〈身を誠にする〉ことはすべて〈善を明らかにする〉ことであると述べる。

○〈性〉は〈天の命じた〉ものであり、〈誠〉はおのずと〈性〉に率っているので、〈天道〉と合致している。そのため〈天の道〉と言うのである。〈これを誠にす〉とは、〈人道〉を修めて〈天命の性〉に率わせることであって、人によって〈人道〉を修めさせることである。そのため〈人の道〉と言うのである。〈ゆったりありのままにして道に的中する〉は、37節の〈誠であって善に明るい〉という聖人の〈性〉であり、〈善を択び固く執る〉は、〈善に明らかとなって誠になる〉ための要点である。いずれも〈善を明らかにする〉ためのものである。学問によって胸中に〈善が明らか〉になれば、〈喜怒哀楽の未発〉の状態には、すでに様々な事態に適切に対応できる中和の気、すなわち四端の心が備わっているので、その心が適切に〈発動し行動がすべて中節を得る〉のである。本節の〈善を択ぶ〉とは8節の〈中庸を択ぶ〉と同じで、〈学問思辨〉することであり、〈善を明らかにする〉ための方法である。同じく〈固く執る〉とは、〈中庸を守る〉と同じで、〈篤実に行う〉ことであり、〈身を誠にする〉ための方法である。それらはいずれも〈道を修める〉要点であり、〈中和を極める〉根本である。

○考察する。先儒は本節の〈努力せず、考えることもなく〉を、30節の〈生知〉〈安行〉とし、〈善を択び固く執る〉を〈学知〉〈利行〉とみなした。その説はもっともである。しかし、本文の意図は、先に〈聖人〉の〈努力せず、考えることもなく〉という既成の徳を述べ、それによって〈善を択び固く執る〉ことの効能を明らかにし、〈ゆったりありのままにして道に的中する〉という聖人の境地に至れるとすることにある。すなわち〈生まれながら、学び、困しみ、知ること、そして、安んじ、利し、勉めて、行うことは、ひとつ、すなわち善を知り行い、誠になる〉という意義なのであり、ただ聖と賢との等級を分けることを主眼にして、古今の人に評価をくだす類のようなものではない。そのため、上文で三つの〈知〉、三つの〈行〉がひとつにいきつくと言い、この節でようやく〈これを誠にするは人の道だ〉と言い、〈善を択び固く執る〉の下に、直に〈学問思辨篤行、これができれば、必ず善に明るく強くなれる〉が承け、さらに37節の〈誠〉と〈明〉との意義がそれを承ける。次いでさらに38節で〈天下の至誠〉、39節で〈ひとつひとつをくまなく究めていくと至誠に至れる〉を並べ言い、最後に40節で〈至誠は神に似てい

間に、既に物に応じて中を得たる所以の者有りて存す。喜怒未だ発せずと雖も、其の性には固より中有るなり」に対応している。

（二）**先儒は……**：章句には「〈誠〉は、真実無妄の謂い、天理の本然なり。〈之れを誠にする〉は、未だ真実無妄なる能わざれば、其の真実無妄ならんことを欲するの謂い、人事の当然なり。聖人の徳、渾然として天理、真実無妄にして、〈思勉〉を待たずして〈従容として道に中れ〉ば、則ち亦た〈天の道〉なり。未だ聖に至らざれば、則ち人欲の私無き能わずして、其の徳為るや、皆な実なること能わず。故に未だ能く〈思わずして得〉ざれば、則ち必ず〈善を選び〉、然る後に以て善に明らかなるべし。未だ能く〈勉めずして中ら〉ざれば、則ち必ず〈固く執り〉、然る後に以て〈身を誠にす〉べし。此れ則ち所謂〈人の道〉なり。〈思わずして得〉るは、〈生知〉なり。〈勉めずして中る〉は、〈安行〉なり。〈善を択ぶ〉は〈学知〉以下の事なり。〈固く執る〉は〈利行〉以下の事なり」とする。大田錦城もまた「誠は生知安行の聖を言うなり。……勉強を待たずして皆な道に中る。乃ち安行なり。思慮を待たずして皆な道を得る。乃ち生知なり。従容優游として、自然に道に中る。至誠の聖人に非ずして何ぞや。……之れを誠にするは、学知勉行し、以て誠に至るを言うなり。……善を択ぶは乃ち学知なり。固執は乃ち勉行なり。……学知勉行は賢人君子の事」とし、「誠」を「生知安行」、聖人の事とし、「之を誠にす」を「学知勉行」、賢人君子の事とする。ちなみに、伊藤仁斎は「誠は、聖人の行い、真実無偽、自ら力を用いざること、猶お天道の自然に流行するがごときを謂う。故に曰く〈天の道なり〉と。〈之れを誠にする〉は、未だ真実無偽なること能わずと雖も、真実無偽に至るを求むるの謂い、人道の立つ所以なり。故に曰く〈人の道なり〉と。〈勉めずして中る〉は、礼なり。〈思わずして得〉は、智なり。〈従容として道に中る〉は、仁なり。此の三者を兼ぬるは、聖人の徳、誠の功なり。〈善を択びて固く之れを執る〉は、善悪の分を審らかにし、以て固く其の善を守るを謂う。〈之れを誠にす〉の事なり」とする。荻生徂徠は「蓋し凡人の先王の道を行いて、能く誠心を有する者は、之れを天性に得。故に曰く〈誠は天の道なり〉と。力行の久しく、習いて以て性を成せば、則ち其の初め誠心無き者も、今は皆な誠心有り。是れ人力の為す所、教の至る所なり。故に曰く、之れを誠にするは人の道なり。〈中る〉とは、……其の知らずして先王の道に暗に合するを謂うなり。人の性質を得たる者は、勉強せずと雖も、先王の道に暗合す。思慮せずと雖も、能く先王の道を得て謬らず。是れ其の誠心より発する者なり。故に曰く〈誠は勉めずして中り、思わずして得〉と。即ち上章の所謂〈夫婦の愚の与り知り能く行う者〉なり」とし、「誠」と「誠之」の違いを、「誠」を実現する「誠心」が、生知なのか、学知なのかにあるとする。凡人でも先天的に「誠心」を得ているものは、「勉めずして中り、思わずして得」ているとし、それが「天の道」であるとして、「天道を以て聖人と為すに至りては、則ち大いに子思立言の意を失す」と、朱熹を批判する。一方、学習・教えを通じて人為的な努力によって「誠心」を得て誠を実現することが「之れを誠にする」であり、「人の道」だとする。また、「〈善を択びて固く之れを執る〉は、即ち上文の〈明善〉なり。……此れに由りて以て〈身を誠にす〉べきなり。朱熹以て〈明善〉〈誠身〉を分属するは、非なり」とし、朱子が「択善」「明善」を知に、「固執」「誠身」を行に分類したことを批判する。この徂徠説に対して大田は「物茂卿、朱子を駁して曰く、天道を以て聖人と為すに至りては、則ち……、と。殆ど病風喪心の人に似たり。何ぞ誣謗の甚だしき、何ぞ忌憚無きの甚だしき、是れ豈に辨ずるに足らんや」と激しく批判をする。會澤も「択善」「固執」については朱熹的に解釈をしており、それは大田も同じであるが、大田が「誠」と「誠之」を聖人と賢人に分類していることについては批判的であり、さらに大田が自説の「誠は性なり。之れを性のままにするなり。偽無きなり」を、『荀子』性悪の「学ぶべからず、事とすべからずして、人に在る者、之れを性と謂う。学びて能くすべく事として成るべきの人に在る者、之れを偽と謂う。此れ性偽の分なり」を引用して立証することなどは、【訳注】（五）に「性悪の説と異なる無し」と見られるように、批判的であったと思われる。

（三）**月旦評**：『後漢書』許劭伝に、「劭、靖と倶に高名有り。好みて共に郷党の人物を覈論し、毎月輒ち其の品題を更む。故に汝南の俗に月旦評有り」とあり、許劭が許靖と毎月の朔日に郷党の人物を評価した故事から、人物評価のことを意味する。

（四）**先儒の……**：本節注（二）参照。

（五）**苟しくも仁に志せば、悪無きなり**：『論語』里仁篇のことば。『読論日札』巻一、「其の志苟しくも《字の如し》、仁を為すに在れば、必ず悪を為すに至らず。古は其

《釈義》上を承けて〈身を誠にする34〉は皆な〈善を明らかにする〉の事なるを言うなり。

○〈性〉は天の命ずる所、〈誠〉は自然にして〈性に率い1〉、〈天道〉と合す。故に〈天の道〉と曰うなり。〈之れを誠にす〉とは、〈人道〉を脩めて〈天性〉に〈率い〉、人を以てして〈人道〉を脩めしむるものなり。故に〈人の道〉と曰うなり。〈従容として道に中る〉は、〈誠自りして明なる37〉の〈性〉にして、〈善を択びて固く執る〉は、〈明よりして誠なる37〉の要なり。皆な〈善を明らかにする〉所以なり。其の中既に〈善に明らか〉なれば、則ち〈喜怒哀楽の未だ発せざる4〉も、中有りて存する[一]が、故に〈発して皆な節に中る4〉なり。〈善を択ぶ〉とは〈中庸を択ぶ8〉と同じく、即ち〈学問思辨〉して、〈善を明らかにする〉所以の方なり。〈固く執る〉とは、〈中庸を守る8〉と同じく、即ち〈篤く行う〉にして、〈身を誠にする〉所以の方なり。皆な〈道を脩むる〉の要にして、〈中和を致す4〉の本なり。

○按ずるに、先儒は〈勉めず思わず〉を以て、〈生知〉〈安行30〉と為し、〈善を択び固く執る〉を以て〈学知〉〈利行30〉と為す[二]。其の言固より是なり。然れども本文の意、先に聖人の既成の徳を言い、以て〈善を択び固く執る〉の功を明らかにし、〈従容として道に中る〉に至るべしとす。即ち〈生知・学・困、其の之れを知るは一にして、安行・利・勉、其の功を成すは一30〉の義にして、専ら聖と賢との等級を分くるを主として、古今の人を月旦評[三]に表す等の類の如きに非ざるなり。故に上文に〈三知〉〈三行〉の〈一〉なるを言い、此こに至りて乃ち〈之れを誠にするは人の道なり〉を言いて、〈善を択び固く執る〉の下に、直ちに承くるに〈学問思辨篤行、果たして此の道を能くすれば、必ず明にして強なる36〉を以てし、又た承くるに〈誠・明37〉の義を以てす。次いで又た〈天下の至誠38〉と〈曲を致す39〉の能く〈至誠〉に至る者とを挙げて並べて之れを言い、之れを結ぶに〈至誠は神の如し40〉を以てす。次章に又た之れを承けて、〈之れを誠にするを貴しと為す41〉と曰うは、皆な〈之れを誠にする者〉を主として言う。〈之れを誠にする〉は、〈誠〉に至るの方にして、本より軽重を別ち等級を分ちて論を立つるに非ざるなり。又た按ずるに、先儒の〈誠〉と〈之れを誠にする〉とを論ずるは、一ら「私欲」の有無を以て之れを断ず[四]れば、則ち其の〈之れを誠にする〉所以の者は、其の善を長ずるに在らずして、其の悪を去るに在り。是れ其の択ぶ所は、則ち不善を択びて之れを去り、〈善を択びて之れを執る〉に非ざるなり。本文の謂う所の〈善を択ぶ〉とは、則ち其の要は〈学問思辨〉に在り。蓋し其の〈善〉に就きて当に為すべき者の中には、大小軽重有り、緩急先後有り、善不善の相い似て辨け難き者有り。苟も能く〈学問思辨〉し以て〈善を明らかにし〉、〈父子・君臣・夫婦・昆弟・朋友の交り29〉より、〈郊社禘嘗25〉〈九経32〉等に至るまで、講究習熟し、以て実事に施すべくして、而る後に時に臨みて〈篤く之れを行う〉は、是れ所謂〈道を脩むる1〉者にして、其の善先に入りて、中に充実すれば、不善の事は、由りて入る莫し。即ち「苟しくも仁に志せば悪無きなり[五]」とは、務めて其の悪を去らざるも、其の悪は自ずから消ゆるなり。蓋し是れ中庸の本旨なり。故に篇中に一も「人欲の私」等の字を下す者有る莫きなり。若し〈之れを誠にする〉を以て「人欲の私」有りと為せば、末流の弊に至れば、則ち〈之れを誠にする〉を平視し、〈善を択び固く執る〉を以て〈学知〉〈利行〉以下の事と為し、之れを貴しとせず。止だ「人欲を去る」のみを謂い、私欲浄尽[六]すれば、以て〈生知〉〈安行〉の域に到るべしとす。是れ人道を脩むるに務めず、直ちに天道を得んと欲するものなり。一超佛地[七]の説と、以て異なること無し。殊に知らず、子思の意、重んずる所は人道を脩むに在るが、故に〈之れを誠にする〉を以て貴しと為し、所謂〈天道〉とは、以て道の本づく所を見すのみなるを。其の道を脩むる所以の若きは、則ち中庸篇中之れを論じて備われり。豈に特に「私欲」の有無を云わんや。

【訳注】

（一）**其の中既に……**：「其の中既に」は、34節の「胸中に明らかに是の如くなれば而ち善、是の如くなれば而ち不善なるを知る」を承けており、「中在りて存す」は4節の「喜怒哀楽の未だ発せず。之れを中と謂う」、及びその釋義「其の未発の

して外に行動として表出することは、火や太陽が光を吐くような陽である。〈聖人の道〉は陽が陰を統べる。これはわきまえておかなければならない。さらに考察する。本節は、前節の〈天下国家を治める〉に、〈上役に認められて、民を治める〉が接続し、その根本が〈身を誠にし、善に明らかとなる〉ことであるとして〈誠〉が論じられている。すると、ここに述べられる〈誠〉は〈上役に認められ、民を治める〉根本であり、これもまた天下国家を度外視して、いたずらに自分自身に誠を積むことを説いているのではない。

○上では〈道は人に遠からず〉を述べ、これを〈父母に順なるか〉に本づける。次章ではこれを承けて〈誠は覆い隠せない〉を述べ、さらにこれを〈大孝〉〈達孝〉で承け、そして〈郊社禘嘗治国示掌〉にまで言及する。次いでまた〈国を治める〉には〈身を修め〉〈親に事え〉るべきことを述べ、この節でようやく〈親に順になるには、身を誠にする〉と述べて、〈善を明らかにする〉ことが〈身を誠にする〉方法であるとする。そして下文で、ようやく〈善を明らかにする〉方法を述べるのである。

35【原文】**誠者天之道也。**

《釈義》不可不知天。

誠之者人之道也。

《釈義》不可不知人。

誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也。

《釈義》承上言誠身皆明善之事也。

○性者天之所命、誠者自然而率性、與天道合。故曰天之道也。誠之者、脩人道而率天性、以人而脩人道。故曰人之道也。從容中道、自誠明之性、而擇善固執、自明誠之要。皆所以明善也。其中既明善、則喜怒哀楽未發、有中而存焉、故發皆中節也。擇善者與擇乎中庸同、卽学問思辨、所以明善之方。固執者、與守中庸同、卽篤行、所以誠身之方。皆脩道之要、而致中和之本也。

○按、先儒以不勉不思、爲生知安行、以擇善固執、爲學知利行。其言固是矣。然本文之意、先言聖人既成之德、以明擇善固執之功、可至於從容中道。卽生知學困、其知之一、安行利勉、其成功一之義、而非專主於分聖與賢之等級、如古今人表月旦評等之類[校一]也。故上文言三知三行之一、至此乃言誠之者人之道也、而擇善固執之下、直承以學問思辨篤行、果能此道、必明而強、又承以誠明之義。而次又擧天下至誠與致曲能至於至誠者、而並言之、結之以至誠如神。次章又承之、曰誠之爲貴、皆主誠之者而言。誠之者、至於誠之方、本非別輕重分等級而立論也。又按、先儒論誠與誠之、一以私欲之有無斷之、則其所以誠之者、不在於長其善、而在於去其惡。是其所擇、則擇不善而去之、非擇善而執之也。本文所謂擇善者、則其要在學問思辨。蓋就其善當爲者之中、有大小輕重、有緩急先後、有善不善相似而難辨者。苟能學問思辨以明善、自父子君臣夫婦昆弟朋友之交、至郊社禘嘗九經等、講究習熟、可以施於實事、而後臨時篤行之、是所謂脩道者、而其善先入、充實於中、不善之事、莫由而入。卽苟志於仁矣無惡也者、不務去其惡、而其惡自消。蓋是中庸之本旨。故篇中莫有一下人欲之私等字者也。若以誠之者、爲有人欲之私、至末流之弊、則平視誠之者、以擇善固執爲學知利行以下之事、不貴之。謂止去人欲、私欲浄盡、可以到生知安行之域。是不務脩人道、欲直得天道。與一超佛地之説、無以異焉。殊[校二]不知、子思之意、所重在脩人道、故以誠之爲貴、而所謂天道者、以見道之所本耳。若其所以脩道者、則中庸篇中論之備矣。豈特私欲之有無云乎。

【校注】

（校一）會澤家本では「之類」が消されている。

（校二）會澤家本は「特」を訂正して「殊」としている。

35【訓読文】**誠は天の道なり。**

《釈義》〈天を知らざるべからず[27]〉。

之れを誠にするは人の道なり。

《釈義》〈人を知らざるべからず[27]〉。

誠なる者は勉めずして中り、思わずして得、從容として道に中る、聖人なり。之れを誠にする者は、善を択びて固く之れを執る者なり。

て愛敬を尽くし、斯の心を推して以て母に事え君に事うるの資と為すは、其の本一なればなり。父は義を主とし、母は恩を主とす。君臣の際、義は恩に勝ち、二者を兼ねて併せ施す者は父なり」と説かれる。

（十二）**人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行う**：『孟子』公孫丑上のことば。

34【現代語訳】**すべてものごとはあらかじめ定めていれば成立し、あらかじめ定めていなければ成立しない。あらかじめ言葉を定めていれば時に臨んでつまずくことはない。あらかじめ事を定めていれば困しむことはない。あらかじめ行動を定めていれば失敗することはない。道を実行する際にあらかじめ定めていれば、窮することはない。**

《釈義》民を治めようとすれば、その根本に立ち返らなくてはならない。**下位にいて、上役に認められなければ、民を治めることはできない。上役に認められるには道がある。朋友に信頼されなければ上役に認められない。朋友に信頼されるには道がある。親に従順でなければ朋友に信頼されない。親に従順になるには道がある。見聞できない所に戒慎恐懼して身を誠にしなければ、親に従順にはなれない。吾が身を誠にするには道がある。学問思辨して善を択び、善に明らかにならなければ、身を誠にすることはできない。**

《釈義》〈九つの常経〉を承け、さらに〈他物を完成させる〉根本は〈自己を成し遂げる〉にあることを述べている。

○その根本に立ちかえるとは、20節の〈遠くへ行くには近い所から始める〉ことであり、その最も近いものが、そこに言う〈父母には従順なれ〉であった。『論語』には「孝弟は仁の根本である」とあり、『孝経』には「忠の心は君主に、順の心は年長者に移すべき」とあるように、〈上役に認められ、友に信頼される〉、その根本は〈親に従順である〉ことであった。しかしながら〈親に従順である〉根本は〈身を誠にする〉ことであり、〈身を誠にする〉根本は〈善を明らかにする〉ことなのである。〈自分にふりかえって〉とは、3節の〈見えない・聞こえない所にも戒慎・恐懼する〉ことである。〈誠〉は表裏に貫通しており、正大光明で、少しの虚偽もないものである。本節の〈身を誠にする〉は、21節の〈誠は蔽い隠せない〉に対応し、〈親に従順になる〉は、20節の〈父母には従順になれ〉に対応している。33節の〈九つの常経〉は〈民を治める〉ことである。すると、あらかじめ〈上役に認められて〉、はじめて〈民を治める〉ことができるのであり、以下、あらかじめ〈友に信頼され〉、はじめて〈上役に認められ〉、あらかじめ〈親に従順〉となって、はじめて〈友に信頼され〉、あらかじめ〈身を誠にし〉、はじめて〈親に従順〉となり、あらかじめ〈善を明らかにし〉、はじめて〈身を誠に〉できるのであり、それらはいずれもその本に立ちかえっているのである。そのため、まっ先にすべきことは〈善を明らかにする〉ことであって、〈善を明らかにする〉方法は〈学問思辨〉して〈善を択ぶ〉ことである。胸中にこのようであれば善、このようであれば不善であると明確に知ることは、孔子や孟子が言った「言を知る」ことであり、それが四端の心から発する行為である〈中を択ぶ〉根拠なのである。〈中（四端の心）〉とは〈天下の大本〉であるので、先に〈大本〉を確立する。〈すべてのものごと〉の事前にすべきことで、これより肝要なものはない。

○考察する。先儒は「真実无妄」と〈誠〉の義を解釈している。聖人や賢人が言う〈誠〉は、確かにこの意ではあるが、しかし、『易』の无妄の卦は「天下雷行」に本づいており、率然として相い応じるという義がある。今もしただ率然として感応するだけで〈誠〉を解釈すれば、虚霊が相い感応する義となってしまい、佛氏の莫妄想、および物来順応等の説と近いものになってしまう。それは虚静で物を照らすことであり、鏡月が影を含むような陰である。すなわち受け身である。聖賢が語る〈誠〉とは、中心、すなわち四端の心から発せられて虚偽がないことである。この心で父にお仕えすれば、愛敬の心によって父を愛敬することになり、君にお仕えすれば父を敬う心に基づいて、君を敬うことになり、民を治めれば人に忍びない気持ちによって、人に忍びない政治を行うことになり、内と外に隔たりがなく、偽りのない心によって物事に対応し、少しの飾りもなくなる。このように四端の心が中に充実

を以て〈身を誠にする〉の方と為す。下文に至り、乃ち又た〈善を明らかにする〉の方を言うなり。

【訳注】

（一）**立たず**：『釈義』では「不立」とするが、本来の経文は「廃」である。

（二）**孝弟は仁を為すの本**：『論語』学而篇のことば。會澤説は20節【訳注】（三）参照。

（三）**忠は君に移すべく、順は長に移すべし**：『孝経』（広揚名章第十四『孝経考』では第十章に相当）に「子曰く、君子の親に事えて孝。故に忠は君に移すべし。兄に事えて悌。故に順は長に移すべし。家に居りて理まる。故に治は官に移すべし」とあり、會澤は「孝悌を移して忠順を為す、衆（家か？）を以て官に移すは、皆な愛敬の推す所にして、身を立て道を行うの事なり」と説く。

（四）**言を知る**：『論語』堯曰篇に「孔子曰く、命を知らざれば、以て君子と為る無し。礼を知らざれば、以て立つ無し。言を知らざれば、以て人を知る無きなり」とある。また『孟子』公孫丑上に「何をか言を知ると謂う。曰く、詖辞は其の蔽う所を知る。淫辞は其の陥る所を知る。邪辞は其の離るる所を知る。遁辞は其の窮する所を知る。其の心に生ずれば、其の政に害あり。其の政に発すれば、其の事に害あり。聖人復た起こるとも、必ず吾が言に従わん」とある。會澤によれば、「言を知る」とは、人の言葉の是非得失から、その人の心を洞察し、中心から発動された行動か否かを伺い知ること。詳しくは「訳注稿（四）」「（余説）會澤正志齋の『易』乾卦の解釈と『中庸』について」九三・九四、参照。

（五）**真実無妄**：章句には「誠は、真実無妄の謂い、天理の本然なり」とある。

（六）**天下雷行**：『易経』无妄の卦は震下乾上であり、天の下に雷がある。象伝には「象に曰く天の下に雷行す。物ごとに无妄を与う。先王以て茂んに時に対たり（あ）て万物を育（そだ）う」とある。『周易本義』象上伝第三に「天下雷行し、震動発生し、万物各おの其の性命を正す、是れ物物之れに与うるに无妄を以てするなり。先王此れに法り以て時に対たりて物を育い、其の性とする所に因みて私を為さしめず」とある。天の下に雷が発生し、それによって万物は性命を正すため、无妄となる。先王はこれに法り、万物を養い、人々にその性に従った生き方をさせると説かれる。人は主体的に誠を実現するのではなく、先王に導かれて誠を実現する存在であり、発生源があって、それに応ずるものとされる。これを會澤は「率然感応」「鏡月」とし、陰とする。また、『周易程氏伝』には「无妄とは至誠なり。至誠とは天の道なり。天の万物を化育するは、生生して窮まらず、各おの其の性命を正す。乃ち无妄なり。人能く无妄の道に合すれば、則ち所謂天地と其の徳を合するなり。无妄に大いに亨るの理有り、君子、无妄の道を行えば、則ち以て大いに亨るを致すべし。无妄は天の道なり。……」とあり、无妄を至誠と説く。朱熹の説はこれを承ける

（七）**無妄想**：禅語の「莫妄想（まくもうぞう）」のこと。「思惟分別の心によって迷いが生ずるから、さとるためにはその心を放棄せよ、という意。禅語」（中村元『広説佛教大辞典』、東京書籍、平成十四年より）

（八）**物来順応**：『近思録』巻二に「夫れ天地の常なるは其の心の万物に普くして心無きを以てなり。聖人の常なるは、其の情の万事に順いて情無きを以てなり。故に君子の学は廓然として大公、物来りて順応するに若くは莫し」とある。また、朱子語類巻九十五、程子之書一には「趙致道問う……所謂万物に普くすとは、即ち廓然として大公の謂い、無心無情とは、即ち物来りて順応の謂い」と、「物来順応」は「無心無情」と仏教的に説かれる。

（九）**虚静の物を照らし……**：『朱子語類』巻九十六に「喜怒哀楽は乃ち是れ物に感じて有り。猶お鏡中の影のごとし。鏡未だ物を照らさざれば、安んぞ影有るを得ん」とある。

（十）**聖賢の所謂誠とは……**：伊藤仁斎は「誠は真実無偽の謂いなり」とする。仁斎説は次節【訳注】（二）に掲げている。また會澤は、「中心より発す」を四端の心から発すると解釈し、仁斎説を発展させていた。4節および拙論「日本近世における主忠信説の一展開　―会沢正志斎を中心にして―」（『中国文化　―研究と教育』第七十六号、二〇一八）参照。

（十一）**父に事うれば則ち愛敬の心を以て之れを愛敬し、……**：『孝経』士章第五（『孝経考』では二章に相当）に「父に事うるに資りて、以て母に事う、而して愛は同じ。父に事うるに資りて、以て君に事う、而して敬は同じ。故に母には其の愛を取りて、君には其の敬を取る。之れを兼ぬるは父なり」とあり、『孝経考』には「父に事え

孝、以及郊社禘嘗治國示掌。次又言治國宜修身事親、至此乃言順親誠身、而明善以爲誠身之方。至下文、乃又言明善之方也。

【校注】

（校一）會澤家本には「可」はなく、熱田家本には「可」が挿入されている。

34【訓読文】**凡そ事豫めすれば則ち立ち、豫めせざれば則ち立たず。(一)言前に定まれば則ち跲(つまず)かず。事前に定まれば則ち困しまず。行前に定まれば則ち疚(やま)まず。道前に定まれば則ち窮まらず。**

《釈義》民を治めんと欲すれば、宜しく其の本に反るべし。

下位に在り、上に獲られざれば、民得て治むべからず。上に獲らるるに道有り。朋友に信ぜられざれば、上に獲られず。朋友に信ぜらるるに道有り。親に順ならざれば、朋友に信ぜられず。親に順なるに道有り。諸を身に反して誠ならざれば、親に順ならず。身を誠にするに道有り。善に明らかならざれば、身に誠ならず。

《釈義》〈九経〉を承け、又た〈物を成す〉の本は〈己を成す42〉に在るを言う。

○其の本に反るは、則ち〈遠きに行くに邇(ちか)きよりする20〉にして、其の最も近き者は、則ち曰く〈父母には其れ順なるかな20〉なり。「孝弟は仁を為すの本(一)」にして、「忠は君に移すべく、順は長に移すべし(二)」。故に〈上に獲られ・友に信ぜらる〉、其の本は〈親に順なる〉に在り。而して〈親に順なる〉の本は、則ち〈身を誠にする〉に在り。〈身を誠にする〉の本は、則ち〈善を明らかにする〉に在るなり。〈諸を身に反す〉とは、即ち〈覩えざる・聞こえざる所に戒慎・恐懼する3〉の謂いなり。〈誠〉は、表裏洞徹、正大光明にして、纖芥(せんかい)の虚偽無きなり。〈身を誠にする〉は、以て上文の〈誠の揜うべからざる21〉に応じ、〈親に順なる〉は、以て〈父母には其れ順なるかな〉に応ずるなり。〈九経〉は〈民を治むる〉の事なり。然らば予め〈上に獲られ〉、而る後に以て〈民を治む〉べし。以下、予め〈友に信ぜられ〉、而して〈上に獲られ〉、予め〈親に順にし〉、而して〈友に信ぜられ〉、予め〈身を誠にし〉、而して〈親に順にし〉、予め〈善に明らか〉なりて、而して〈身を誠にする〉も、亦た皆な之の如し。故に事の予めするの極は、〈善を明らかにする〉に在り。〈善を明らかにする〉の方は、〈学問思辨36〉し以て〈善を択ぶ35〉に在り。胸中に明らかに是の如くなれば而ち(すなわ)善、是の如くなれば而ち不善なるを知るは、即ち孔孟の所謂「言を知る(四)」の義にして、〈中を択ぶ〉所以なり。〈中〉とは〈天下の大本4〉なれば、先に〈大本〉を立つ。凡そ事の当に予めすべき者は、焉(これ)より要なるは莫し。

○按ずるに、先儒は「真実无妄(五)」を以て〈誠〉の義を解く。聖賢の〈誠〉を言うも、亦た此の意無きに非ざるも、然れども无妄の卦は、天下雷行(六)に本づき、率然として相い応ずるの義あり。今若し専ら率然として感応するを以て〈誠〉を解けば、虚霊相い感ずるの義と為り、則ち佛氏の無妄想(七)、及び物来順応(八)等の説と相い近し。虚静の物を照らし、鏡月の影を含むが如き(九)者は陰なり。聖賢の所謂〈誠〉とは、則ち、言、其の中心より発して虚偽無し(十)。此れを以て父に事うれば則ち愛敬の心を以て之れを愛敬し、君に事うれば則ち父を敬うの心に資(もと)づきて之れを敬い(十一)、民を治むれば則ち人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行い(十二)、内外間無く、赤心を以て之れに処し、一毫の仮飾無し。中に充実して、形を外に発し、火日の光を吐くが如き者は陽なり。〈聖人の道47〉、陽を以て陰を統ぶ。此れ以て辨ぜざるべからざるなり。又た按ずるに、本篇の〈誠〉を論ずるは、上文の〈天下国家を治むる33〉の後を承けて、之れに接するに〈上に獲られ民を治むる〉を以てし、之れを〈身を誠にす〉〈善を明らかにす〉に本づけて言を為せば、則ち所謂〈誠〉は〈上に獲られ民を治むる〉の本にして、亦た未だ嘗て天下国家を外にして、徒らに一己の積誠を説かざるなり。

○上は〈道は人に遠からず〉を言い、諸を〈父母に順なるかな〉に本づく。次章は之れを承けて、〈誠の揜うべからざる〉を言い、又た之れを承くるに〈大孝22〉〈達孝25〉を以てし、以て〈郊社禘嘗治国示掌25〉に及ぶ。次いで又た〈国を治むる〉には宜しく〈身を修め〉〈親に事う28〉べきを言い、此こに至りて乃ち〈親に順なるは身を誠にする〉を言い、而して〈善を明らかにする〉

訳　注

會澤正志齋『中庸釋義』訳注稿（九）

松﨑　哲之（常磐大学人間科学部）

Translation with notes on Aizawa Seishisai's "Tyuuyou Syakugi" (9)

Tetsuyuki MATSUZAKI (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

六、論修道之要在誠身、禮與政之所以行也

34【原文】**凡事豫則立、不豫則不立。言前定則不跲。事前定則不困。行前定則不疚。道前定則不窮。**

《釈義》欲治民、宜反其本矣。

在下位、不獲乎上、民不可得(校一)而治矣。獲乎上有道。不信乎朋友、不獲乎上矣。信乎朋友有道。不順乎親、不信乎朋友矣。順乎親有道。反諸身不誠、不順乎親矣。誠身有道。不明乎善、不誠乎身矣。

《釈義》承九經、又言成物之本在成己。

○反其本、則行遠自邇、而其最近者、則曰父母其順矣乎。孝弟爲仁之本、而忠可移於君、順可移於長。故獲乎上信乎友、其本在順親。而順親之本、則在誠身。誠身之本、則在明善也。反諸身者、卽戒慎恐懼於所不覩不聞之謂。誠者、表裏洞徹、正大光明、無纖芥虛偽也。誠身、以應上文誠之不可揜、順乎親者、以應父母其順矣乎也。九經者治民之事。然豫獲乎上、而後可以治民。以下、豫信乎友、而獲乎上、豫順乎親、而信乎友、豫誠乎身、而順乎親、豫明乎善、而誠乎身、亦皆如之。故事豫之極、在明善。明善之方、在学問思辨以擇善。胸中明知如是而善、如是而不善、卽孔孟所謂知言之義、所以擇中。中者天下之大本、先立大本。凡事之當豫者、莫要焉。

○按、先儒以眞實无妄解誠之義。聖賢言誠、亦非無此意、然无妄之卦、本天下雷行、率然相應之義。今若專以率然感應者解誠、爲虛靈相感之義、則與佛氏無妄想、及物來順應等之說相近。虛靜照物、如鏡月含影者陰也。聖賢所謂誠者、則言其發於中心而無虛僞。以此事父則以愛敬之心而愛敬之、事君則資敬父之心而敬之、治民則以不忍人之心、行不忍人之政、內外無間、以赤心處之、無一毫假飾。充實於中、而發形於外、如火日吐光者陽也。聖人之道、以陽統陰。此不可以不辨也。又按、本篇論誠、承上文治天下國家之後、接之以獲上治民、而本之誠身明善爲言。則所謂誠者獲上治民之本、亦未嘗外天下國家、而徒說一己之積誠也。

○上言道不遠人、本諸父母順乎。次章承之、言誠之不可揜、又承之以大孝達

いだし、実践していたことが本研究により明らかとなった。

注

（1）『生活綴方事典』　編者　日本作文の会（一九五八年七月明治図書出版株式会社）五六五・五六六頁

（2）『国語教育方法論史』　著者　飛田多喜雄（一九六五年明治図書出版）一四〇頁

（3）『日本作文綴方教育史2大正編』　著者　滑川道夫（昭和五三年一一月国土社）三一四頁

（4）『国語教育研究大辞典』　編者　国語教育研究所（一九八八年明治図書出版株式会社）五八五頁　この田上新吉の欄の解説については浜本純逸が担当している。

（5）復刻版『国語教育』第四巻第十号　監修石井庄司　倉澤栄吉（一九九三年十月大空社）一二頁

（6）同書一四頁

（7）同書一九頁

（8）田上新吉の広島高等師範学校訓導としての奉職期間
『国語教育研究大辞典』では一九一七年～一九四二年三月とある。
『日本作文綴り方教育史2大正編』では一九一七年九月～一九四二年秋とある。

（9）復刻版『国語教育』第四巻第十二号　監修石井庄司　倉澤栄吉（一九九三　年十二月大空社）四二頁

（10）同書四二頁

（11）同書四二・四三頁

（12）同書四四頁

（13）同書四三頁

（14）同書四四・四五頁

（15）同書四五頁

（16）同書四六頁

（17）復刻版『国語教育』第五巻第一号　監修石井庄司　倉澤栄吉（一九九三年十二月大空社）五一・五二頁

（18）同書五二頁

（19）同書五四・五五頁

（20）『生命の綴方教授』　著者　田上新吉（大正十年十月目黒書店）七九～八〇頁

（21）同書六三・六四頁

（22）同書六九～七〇頁

（23）同書九六～九七頁

（24）同書九九頁

（25）同書一〇〇～一〇一頁

（26）同書二七六頁

（27）同書二七七～二七八頁

（28）同書二八〇頁

（29）同書四五三～四五四頁

（30）同書四七二～四七三頁

（31）同書五七三～五七四頁

（32）同書五九二頁

（33）同書三二四～三二六頁

遠ざかつてゆく。（十二月）

ここまで描写表現に注目して『生命の綴方教授』をみてきた。田上が文壇の思潮を大きく捕らえ、また片方でこの流れと対応する子どもの発達とその教授法を、目の前の子どもたちに焦点を当てながら研究していることが窺える著書となっている。右掲の文章も子どもの作品である。田上は毎日実際に教壇に立っていたこともあり、説明の一つ一つが具体的であり、指導法もたくさん紹介されている。勿論時代的な限界を感じる部分もあるが、時代を超えて、教鞭をとる者の基本的な姿勢と心構えを学ぶことができた。戦前、戦後の綴り方、描写表現指導のあり方をたどる上で、欠かすことのできないマイルストーンである。

田上は子供への描写表現教授に於いて最も重要なことを以下のように述べている。[33]

なほ又、描写といふ言葉の用ひられた其のはじめに於ては、一般に平面的な、純客観的な、悪く言へば写真的なものであつたのであるが、其れが印象描写の発生以後だんだん主観的、内面的な傾向を現はして来て、最近に至ってはいよいよ主観味の強い象徴的なものになつたのである。（中略）しかしながら作者として茲に注意すべきことは、あまりに主観的といふことを高調して、単なる説明に陥つてはならぬことである。「客観性」といふことはどこまでも描写の生命であるから、主観的の根拠の上に尚ほ客観性を帯びさせることを忘れてはならぬ。言ひ換へれば、作者は自己の主観によつて客観の対象を観照し対象の生命を直覚して依つて、主観客観の融合渾一された体験の世界を創造し、此の世界を如実に表現するところに、描写としての尤も光輝ある生彩が得られ、立派な芸術作品が生まれるのである。即ち、主観客観を渾一した体験の世界之に基づく如実なる描写、これが吾々の進むべき描写、否文章の道であらねばならぬ。

最後に尚ほ一言すべきことがある。それは小学校の綴り方にかうした手法をとり入れることに就いてゞある。小学校の綴り方だつて、其の中に芸術的表現のある以上、之を用ひることは決して不都合ではない。否、子供の表現そのものは、立派な描写である場合が多いのである。故に教師としては、適当な指導を行つて、之を一層立派なものにさしてやることが、極めて大切な義務であり、責任であるのである。唯、困るのは此の際描写を一種の型として子供に真似させたり、或は又徒に外面的な、所謂修辞学的な知識として之を教へたりすることである。かうなると、子供は勢ひ之が囚となることを免れることは出来ない。「子供は自然の芸術家なり」と誰やらも言つた如く、描写も子供の頭から自然に生まれたものでなければ駄目である。子供が物を観る態度、そこからして子供めいめいに適切な描写の工夫が生まれるところに、最も尊き子供の表現上の進歩がある筈である。そこに進むべき指導の道がある筈であると私は思ふ。

（中略は渡邊による。）

この引用部分は描写表現指導における重要な指摘がなされている。現在は、子どもから生まれてくる描写ということが忘れられ、まさにここで指摘している「描写を一種の型として子供に真似させたり、或は又徒に外面的な、所謂修辞学的な知識として之を教へたりすること」に陥っている点である。

田上は、「描くこと」に関して、描写を六つの類型に分け、表面から内面の心理まで描く段階を指し示している。それだけではなく、どうしたらその深さまで描くことが出来るか「みること」に着目し、「生活の観照」という言葉を新たに用いて教授していた。「生活の観照」つまり、日常生活の中で対象を自分の目で確かにとらえること、また、①体験―②反省―③再現―④表現―⑤再反省―⑥再現―⑦訂正という過程を提唱し、子どもたちにも「みること」と「描くこと」を繰り返し学ばせていた。大正一〇年の時点で、田上新吉は時代の先駆けとなる「みること」と「描くこと」表現の教授法を見

ろん生活の観照を根底に置きながらであるが、「なるべく客観的乃至描写的色彩を強くした表現をといふ程度で導けばよい」という。つまり、客観的な態度を持ち始める三・四年生から描写表現に触れさせていくが、客観的態度全盛時代となる五・六年生には主観的な態度にも改めて目を向けさせていく必要があり、主観的態度を基調としてその上に客観的な表現を乗せていく指導を求めていることがこの部分から明らかとなってくる。

一・二学年で触れた「観照」について三・四学年でこのように述べている。[30]

> 生活観照の態度を養ふことは、此のあたりの学年に於ける最も主要な任務の一つで、思ひ切つて言へ（ママ）此の態度さへ十分に養はれゝば、こゝらではもう八分通り成功したものと考へてよい。前の尋常一・二年時代に於ける此の態度は、まだほんの入り口であつたから、子供の摑むところは多く外形的、而かも概念的であつた。随つて彼等の記述は多く羅列的、お勘定的、すぢがき的であつた。こゝらでは更に一歩を進めて、具体的に、而かも内面的に観るやうな態度に導かなければならぬ。此の態度がだんだん養はれて来るにつれて、第二節以下に述べる主観的態度の記述にも、擬人体の記述にも、描写的の記述にも、自由作にも、すべてに一段の深みが加はつて来ると思ふ。所謂作者の態度を養ふとは、結局かうした態度を基底として文章をかくやうな態度を養ふことに外ならない。

本研究では描写は描くための技術だけではなく、みることが重要なのではないかという視点から進めている。この田上の「生活観照」に関する記述はそういった点からしても注目したい部分である。田上は、生徒に書かせた作品の中から、参考になる作品をいくつか取り上げ、子供達に鑑賞させている。その際に、いかに自分の内面を見つめたか、つまり「生活観照」がどのようになされ、それが作品の上にどのように反映されているか、その部分の指導を丁寧に行っている。ここに田上の綴り方指導、描写指導の基本的な流れがつくられている。

③尋常小学校第五・六学年

（三）で取り上げたように、田上は描写と説明は渾然一体となって合致するのが望ましいとの考えを持っていた。この考え方に基づき田上は尋常科五・六学年において以下のように述べる。[31]

> 次に今一つ近代思想の進化の過程をその儘に子供の表現に認めるといふ、例の私の考へから言へば、尋常四年から五六年にかけては、なんといつても客観的の高調時代であるが、六年頃から高等科にかけては、再三主観的傾向に入らうとする時代であるやに察せらるゝ。かうした意味から見ても、私は尋常五六年頃の児童の表現に、客観性と相並んで、否むしろ相伴うて主観性の大切なことを信ずるのである。切言すれば子供の主観性乃至直覚性を根本基調として、その上に客観性の衣を着せるといつたやうな考へで進むべきだと思ふ。
>
> （傍点は田上自身による。）

田上の綴り方指導の中で五・六年生から「詩を材料としての想像境の描写」という学習方法が紹介されている。子供の表現が客観的色彩を帯びるような材料をあらかじめ選んで提供し、「この句を読んで目に浮かぶ景色を写生的に綴つてみよ」と命じて綴らせている。[32]

> 莚着て牛の子通る時雨かな（尋六女）
>
> 時雨はまだやまない。窓の柱によりかゝつて外を眺めてゐると向ふの山影から牛の子がぞろぞろ莚を着てあらはれた。ずたずたとぬかるみの中を国道筋へと向つてくる。牛ひきの爺さんは鞭を持つて乱れがちになる牛の子の足を打つ。牛の子はときどきあやまるやうに「もーもー」といぢらしい声を立てる。町には早や電燈がついた。子牛の声はだんだん

ら、ある一つのものを猫くことで一切を代表させ、暗示させて、描かれた場面の奥行きを想像させる方法である。

田上はこのように描写の種類と内容に関して六種類に分類している。また、描写の表現方法の一つである比喩法についても四種類を挙げ説明している。

長くなるので、以下、要約して提示する。

○「直喩」比較するものと比較されるものとが明確になっている。形からいえば、「何は何のようだ」といったような式である。

「細長い薄紅の端に真珠を削ったような爪がついて、手頃な留まり木を旨く抱え込んでいる。」

○「隠喩」直喩を圧縮したような、譬えるものと譬えられるものとを打つて一丸にしたようないかたである。

［彼の久は石だ。］

○「提喩」一部分を描いて全体を代表させ想像させようとするいいかたである。

「奥の障子がさっと明いて中から鼻眼鏡が顔を出した。」

○「活喩」いわゆる擬人法のことで非情物に所謂感情の移入を行って之を有情に見せる態度である。

「頭の広い目付の愛らしい赤牛や、首の長い斑などが、ぞろぞろやってきて「御馳走」といわないばかりに頭を振ったり、しっぽを振ったりしながら、盥の方へ近づいた。」

田上は以上のように描写の種類、表現技法として比喩法を取り上げ、さらに会話表現も紙面を割いて説明している。これは大正時代の描写のとらえ方の状況をよく伝えているとともに、教壇に立って教える一教師でありながら綴り方に正面から取り組む田上の人間性をもよく表している。

(5) 田上における綴り方教授の実際

①尋常小学校一・二学年

田上は「客観より主観へ」と題してこの時代の子供の綴り方の特徴を次のように述べる。[29]

> 綴り方の材料となるものは、主として子供の日常生活圏内にあるものである。特に子供の日夕最も親しんでゐる「お父さん」や「お母さん」や「赤ちやん」や「猫」や「ヒヨコ」など所謂動的なものが、彼等に喜ばれる。彼達は自ら好んでさうした活々した材料を掴まへて、之を綴らうと試みるのである。
>
> 此の際教師として最も力を用ふべきことは、彼等のさうした態度をあくまで尊重して、内的に向はんとする子供の此の動きを益々伸ばさしてやることである。私の所謂「生活の観照」はかくしてはじめて誘致され、彼等子供の創作は茲にはじめてたしかな其の立脚地を得るであらう。

小学校一・二年生はただ思ったまま、感じたままを記述していくので羅列的であったり意味を成さない部分もあるかもしれないが、その中に出てくる自己の小さな主観（小主観）―好きだとか嫌いだとかいったような―を付け足したがる傾向にある。そういった傾向を旨くとらえて「観照」の態度も徐々に養っていきたいと田上はいう。田上の綴り方教授において「観照」という言葉は一つのキーワードになっている。「観照」と「鑑賞」が両面から支える中で綴り方の力が培われていく様子が随所に表れている。

②尋常小学校第三・四学年

尋常三・四年生は「自己の生活を主観的態度で表現するうちにも、少しづつ客観的態度の方に近づいてゆく傾向をもつて居る。そこで尋常三年の半ば頃からちよいちよいと」客観的態度の指導を行うようにするのがよい。もち

抑へて、虚心平気な冷静な態度で物を観なければいけない。―といふのであるから、之もまかり違えば結局は知的・機械的な観方にまで進まねばやまない。

（傍点は田上自身による。）

描写がいかにして取り入れられてきたか、その道筋をわかりやすく説明している。今日でも「楽しかった。」「大変だった。」とまとめてしまわずに楽しかったという言葉を使わなくても読者が「ああ、楽しかっただろうなあ」と感じられるように書いてみましょうといった指導は行われている。現在にも通じる点である。しかし、田上の意識は描写偏重に陥る危険を避ける方向に向いている。

田上は「説明」を主観的で概念的・抽象的であり時間的であるといい、「描写」を客観的で具体的であり空間的であると位置づけた上で次のように述べている。[28]

吾々は外界の対象物を如何にありのまゝに見て、そのまゝ再現しようとしても、吾々の眼が写真機械でない以上、それは及び難き欲望である。そこには自らなる主観の選択の加はることを、如何ともすることが出来ない。又、如何に描写がよいと言つても、つまらぬものを精細に観察して、だらだらと書くことは、読者の側から考へても、余りに有り難いことではない。簡潔なる説明は此の意味からも必要であらう。

以上述べたところを約言してみると、文章の極致は全く主観客観の合致にあり、説明と描写との融合にあると考へて差支へない。

（傍点は田上自身による。）

(4) 描写の種類

大正期までに行われてきた描写のありかたを田上は六種類に分け、この著書の中でまとめている。

長くなるので、以下、要約して提示する。

○「平面描写」「印象描写」自己の印象に忠実になり、五感の中でも耳と目を動かして描く。理路を追つて書くのではなく自分の目を刺激し耳に響いたものからポツリポツリと書いていけばよい。その問に何の脈絡もいらない。唯、自分の印象の最も強いもの即ち第一印象から第二第三と次第に弱い印象の方へ書き並べつつ進んでいけばよい。

○「感覚描写」目と耳だけの感覚の働きから、嗅覚・味覚・触覚といった感覚も働かせるようになつた。自己の印象に忠実にということから、自己の感覚に忠実にという段階になつた。

○「気分描写」感覚描写が一歩進んで気分描写になる。気分は心持ちであり情調である。感覚と気分は樹の幹と枝の関係のように感覚によつて気分がはぐくまれ、気分はまた感覚に影響を及ぼす。如何なる描写も作者の心持ちや気分などがあらわれていないものは生命が希薄である。

○「神経描写」官能的な感覚描写が内面的に進んで一種病的な気分まで描く。感覚描写が官能の末端に触れている、やや表面的なものであるのに対し、神経描写は頭の中に感じ精神に感じ、脳神経の中枢を突き動かされるより中心的なものである。感覚描写はふっくらとした感じであるが神経描写は尖ってピリッとした感じがする。

○「心理描写」内面的な傾向がますます進んで複雑な内面の心持や錯綜した気分までも描く。感覚描写や神経描写も含まれるが一層内面的な複雑な心持の変化まで描く。

○「象徴描写」複雑な錯綜した内面的な心持を表現しようとするには、普通の正面的な直接的な表現の仕方では単なる説明に堕してしまつて効果が出ない。そのため、暗示的・象徴的で間接的な表現になっていく。つまり、他の事物を持ってきてそれに自分の心持を寓し、或は之を以て自分の心持を暗示して読者にこれを想像させようとする描き方である。内面だけでなく外界での複雑厖大な事象の悉くを描写することは面倒で奥行きもないか

さらに田上は写実主義が事物を見ながら綴る指導を行っていくことに疑問を投げかけている。[25]

なるほど実事実物を眼前に置いての記述であるから客観的真を要求する知的の文章を綴る場合には甚だ都合がよいに違ひない。しかしながら何時如何なる場合でも実事実物を眼前に置いて綴らねば、本当の文章が出来ないといふ考へを、子供に植ゑ込んだり教師が抱いたりするやうになつたら、頓だ厄介事である。尤も私はさうしたやり方が全然悪いといふのではないが、とかく描写のための描写といつたやうな弊を誘致することを、念頭から取り去ることは出来ない。なほ又これと同時に、さうしたやり方以外の綴り方―例へば観察とか経験とかを後日になつて記憶想像の力を頼りに綴る綴り方―にも価値を認めない訳には行かない。特に複雑した事件の描写や、遠足の記事の如きものに於ては、即座に綴るといふことよりも、適当な時日―例へば二三日―を置いて後に筆をとつた方が、表現の効果を収めるに都合のよゝ場合が多い。何故なら、その若干の時日の間に、印象が適当に精選せられて単純化せられて、思想なり感じなりをまとむるに都合よくなるからである。此の立場から見ると、事実を眼前に見ながら文章を綴るといふことが、絶対的な優良手段であると断定する訳には行かない。

田上が実践の一人歩きの弊害を危惧していることがうかがえる。実際に、「描く」ことを生徒に意識させるためには、特に初歩の段階で、実際に実物を前にして言葉を選び、感覚や感じたことを言葉に置き換える作業を行うことは有効であると考える。ただ、それだけでよいと考える生徒や、それで十分指導したことになると勘違いしてしまう教師の存在を問題にしている。

時間の流れはときに篩の役割をする。したがって、現在でも、様々な事象の中から本質を取り出したり、特徴をつかんだりするためには、しばらく時間をおくことが有効であるという考え方に変わりはないように感じる。

(3) 田上における描写指導の基本的な考え方

田上はまず描写を以下のように説明する。[26]

然らば「描写」とは何を意味するか。私は此の問に対して、簡単にかう答へたい。それは―客観性を帯びた表現の手法―と。つまり題材に対する作者の態度から出発した表現の一手法に過ぎないのである。

（傍点は田上自身による。）

「客観性を帯びた」というところに田上の洞察の深さを感じずにはいられない。描写は客観的に突き放して私情を込めずに描くものであるとはいうものの、絶対的な客観視と言い切ることが出来るものではないからである。描写についてさらに具体例を挙げて説明している。[27]

□ああ美しき月よ。予は汝の清冷を愛す。

□自分は苦心惨憺の結果、遂に一つの機械を造ることに成功した。

といふやうな表現態度がそれである。然るにかうした表現は、読者の方面から言へばちつとも面白くない。即ち作者の心持、心境に同感が出来難い。共鳴が困難である。一体芸術翫賞の可能性はその具体的な所に存する。吾々は「美しい」という概念的な、抽象的な言葉のかはりに「美しい状態」を如実に目の前に見せるやうに書いて貰ひたい。作者として之を「愛する」とか「愛せぬ」とかは、読者のためには要らざる判断である。「苦心惨憺の結果」といふ筋を語るよりも、その「苦心惨憺」の状態をまざまざと目の前に展開するやうな書きぶりが欲しい。かうした欲求は芸術を味はうとする者の誰しも抱くところであらう。此の読者の立場、要求―そこから出発してかゝつたのが客観主義の芸術観であり創作態度である。而して此の態度は、事実をなるべくありのまゝに観て、それをそのまゝ再現しよう、さうするには、作者自身の感情は全く之を

まり自己の主観を透して選択された実在を受け入れることが直観なのである。随つて真の直観といふことは彼の写生主義一派の人々の考へてゐるごとく、然かく「写真的」なものでは決してない。又、写真的といふことは一般に平面的表面的といふことを意味する。本当の直観は事実の表面だけを見たのではいけない。深く其の内面にまで這入り込んでそこに流るゝ生命の実体に触れなければならぬ。これが又直観本然のはたらきであり、たしかな経験の実在である。かうした立場から考へると、所謂客観的事実も、単なる客観的実在のまゝでは文の材料とはなり得ないことになる。即ちその客観的事実が作者の主観によつて選択され、作者の生の奥底に触れて経験的事実となつた時、言ひ換へれば作者の生活化された時、そこにはじめて客観的事実が文材としての価値を生ずる。故に作者としては十分に透徹した、しかも生きた見方によつて其の事実を観察し醇化し、以て作者独特の生命を附与しなければならぬ。かうなると、もはや事実は単なる客観的実在ではなくなつて、驀地に作者の生命の中に飛び込んで来る。そこに所謂体験の世界は開け、文章の源泉は醸成されるのである。

「写真的」ということに関しては鈴木三重吉も『綴方読本』の中で詳しく説明している。三重吉古自身、写真のようにといっても、実際にできることではなく、いかに特徴を取り出して描けるかといったことの方が重要であると述べている。また、文章のなかで陰影が描かれ、深みがあり立体的な作品の良さを実例を挙げながら繰り返し述べている。

ここで注目したいのは「自己の主観を透して選択された実在を受け入れることが直観なのである。」「客観的事実が作者の主観によって選択され、作者の生の奥底に触れて経験的事実となった時、言ひ換へれば作者の生活化された時、そこにはじめて客観的事実が文材としての価値を生ずる。」という部分である。この後、描写についての田上の考え方をみるが、書くこと全般のみならず描写においても主観を通すということを田上は重視している。田上には、このときすでに「写真的」に描くとはいってもそこにはことばの限界があるという認識が存在している。「ありのまゝ」ということばの意味する所はそのことばのとおり「ありのまゝ」なのではなく、自己の主観を透して選択された実在を受け入れているということなのだと認識していたことがこの部分からわかる。

④想像力

写生主義に対してもう一つ田上が問題視したのは想像力を否定したと感じたことについてである。田上は先に出てきた「直観」が感覚・記憶・想像の三つの内容から成っていると説明する。この三つはそれぞれ分けて考えられるものではなく、渾然一体となって直観たりえていると述べている。[24]

然るに現今綴り方教授に携はる人の一部には、なほ事実の「ありのまゝ」の記述を高調するのあまり、此の想像を危険物扱ひにして退ける傾きがあるかに察せらるゝが、それは甚だしき了簡違ひであると思ふ。なるほど想像の働きも病的となつて現実を離れ、遠く空想の境にまで入つてしまつたら、それは勿論いけない。彼の浪漫主義の文学、及び自由発表主義の綴り方は、そこに一種の欠陥をもつてゐた。これは大に戒しむべきことである。しかしながら、この欠陥に陥るの心配があるといふ一理由を以て、直ちに想像そのものゝ価値を全然否定し、或は之を危険視するに至つては、これ明らかに自ら論理の矛盾に陥つてゐるもので、むしろ憐むべきである。

虚構作文の有効性が認められるようになってきたのは最近のことである。想像力をあえて育てようとしない、指導する中でできるだけ排除しようとする流れへの危惧を大正十年の段階で述べていることに驚かされる。

⑤事物を見ながら綴る指導

度に待ち、後者はこれを観察又は関係吟味の力に俟たねばならない。」—これが写生主義の主張である。この主張は之を理論の上から眺めて決して誤つてゐない。其の根底に対しては何人も異議を挾む者はなかろう。この点に就いて見れば写生主義は日本の綴り方教授界の上に大なる功績を残したと言ふべきである。

このように認めた上で、写生主義の綴り方教授法の問題点をいくつか指摘している。

「嘘を書いてはならぬ」ということから、「事実でありさへすれば何でも書いて良い」という方向に行ったこと、綴り方の題材選択の幅が狭まり狭義の日常生活に固まってしまったこと、想像力を尊ばなくなったこと、描写のための描写といった技術的な練習が中心になり、描写の部分練習などが盛んに行われた結果、作品として生命に触れていない器械的な個性を没却したものになっていったことなどである。

②平面的な描写

その中で平面的な描写に陥っていることの問題点を、以下のように五味義武・駒村徳寿により出版された『写生を主にしたる綴方教授細案』から子どもの作品を引きながら述べている。[22]

教室の西側のかべに二枚の塗板がかけてあります。その右の塗板のところに人の絵がかけてあります。その人はあたまチョンマゲに結つて顔にはしわがよつてゐます。顔の色はうすぐろくてひげはありません。

黒のもんつきの羽織を着て、胴の所に白いひもが結んであります。たてのしまのこまかい着物を着て、うすぐろいおびをしめてすわつてゐます。

右の手にはせんすを持つてゐます。左の手には何も持たずに、ひらいたま、ひざにのせてゐます。……（写生を主にしたる綴方教授細案より）

これは絵画を写生した文例であるさうであるが、私は此の文章から何等の生きた感じも得ることは出来ない。黒板の傍の壁に絵がかけてあつて、其の絵が人物画であることは分る。そして其の一人物が徳川時代の武士であること位は分るが、それが誰の肖像であるか、何をしてゐるか、全体にどんな感じがするか、そんなことは一切わからない。つまり人物画の輪郭を説明したに過ぎない。言ひ換へれば絵画を単に絵画として—むしろ紙の上にか、れた物質として—平面的に見てゐるに過ぎないので、その中の人物は全く生きたものとして取り扱はれてゐない。かうした絵の見方は要するに物的概念を認識するの外何等の生命に触れてゐない。極言すれば器械的な見方である。

田上は以上のように、写生主義の陥っている問題点を子どもの作文を例に引きながら具体的に指摘している。ここから「生命」を感じることのできる綴り方でなくてはならないという、『生命の綴方教授』執筆につながるテーマが見えてくる。

③「ありのまま」

写生主義の指導言として、写真のようにそのまま写し取るという考え方から「ありのまま」という言葉が頻繁に使われたが、そのことばについても、田上は以下のような考えから否定的である。[23]

通常我々は事実を「ありのま、に書くと言つてゐるけれども、それは純科学的乃至唯物論的の意味で言つてゐるのではない。「ありのま、」の事実を、自分の目で見て心でうなづいて書くのであるから、主観的に言へば「見たま、」「感じたま、」「思つたま、」を書くことになる。つ

四、『生命の綴方教授』

(1) 文章の本質

田上は文章の本質とは何かということを『生命の綴方教授』（一九二一年大正一〇年出版）の中で明確に述べている。この後、田上の描写に対する指導観をたどる上での基本的な考え方として重要である。田上自身の言葉の引用から、田上の考える文章の本質を見ておきたい。田上は以下のように語る。[20]

> 然らば文章の本質とは如何なるものであるか、此の問に対して私は次のやうに答へたい。
>
> ―即ち文章の本質とは「自己の生活（広義）を対象として綴らうとする作者の人格的生命の創造活動」そのものである。而して一般に人間の所謂「物的生活」は「精神生活」（内的生活）に従属し、而して内的生活の中核をなすものは人間の「自我」即ち「人格的生命」である。随つて本当の文章、少なくとも生命のある文章といふものは、すべて作者の人格的生命及び之によって統一された作者の内的生活から出で、生まれたものでなければならぬ。言ひ換へれば作者の物的（外的）生活の表現であると同時に作者の内的生活（心的生活又は精神生活）乃至その中核たる作者の人格の真実なる表現であらねばならぬ。
>
> （傍点は田上自身による。）

この言葉からは人格がある程度形成されている作者の像が思い浮かぶ。現代の子供の場合を考えると、その人格を形成していく場となることも多いように感じる。実際に書く時も言葉にすることで自分の考えに気づくことは多い。推敲する時、また、他の生徒の作品を読み合うなど鑑賞の場面においても、自他の見方や考え方を認識する機会になっているだろう。

またここでは「自己の生活（広義）を対象として」ということばに着目しておきたい。田上は写生主義を基にして行われている作文指導は見たことをありのままというあまり、「綴り方の題材選択の範囲が単なる児童の日常生活（狭義の）に固まった」と同著書の中で指摘している。想像力の必要性を喚起する田上はこの部分で広義という言葉を挟まずにはいられなかったのであろう。

(2) 写生主義

「みること」「描くこと」に直接関係する部分であるので、田上が写生主義のどの点を認め、どの部分に異を唱えているのかここで確認していきたい。

①写生主義の意義

田上は写生主義の意義を次のように認める。[21]

> 先づ写生主義は文章の本質に就いて余程徹底した意見を発表し、延いて綴り方教授の目的に大なる覚醒を呼起した。従来の擬古的形式主義及び自由発表主義が何れも空虚なる内容を擁した文学の遊戯に墜ちてゐたのに対して、且つは綴り方教授の研究が悉く其の根本を離れて瑣末なる方法上の議論に陥つてゐたのに対して、「文章の本質」を叫び「創作の養護」を主張した其の声はたしかに偉大であり、その態度はたしかに立派なものであつたと言はなければならぬ―。「文章は作者自身の心情が偽りなく現はれたものでなければならぬ。」「しかし作者の真情が忠実に写されただけでは名文たる資格に遠い。作者自身の人格や其の抱いて居る識見がどの位純粋であるか真面目であるか熱してゐるか豊醇であるかといふやうなことにすぐ関係して来る。」「ところが人格の高い人、熱情の燃ゆる人、それが必ず名文家たり得るかといふと必ずしもさうではない。其の表はさんとする思想を十分に表出せんには其の実行の上に修練を必要とする大小各種の事が存するのである。」「前者はこれを観照の態

とか客観的とかいふやうな、表現上に容易に認め得る態度は、教師の直接指導に待つべきであらうが、その前の物を見る態度、これは刺激による間接指導に待つより外はない。子供の心に刺激暗示を与へて、彼等の活きた目を開いてやるより外はない。その刺激は如何にして与ふるかといへば優良なる作品を読んで聞かせるに限る。それは読本の文でもよい。子供の文でもよい。教師の文でもよい。大家の文でもよい。之を数多く読んで聞かせて、作者の態度を想像せしむることだ。表現の用意を味はしむることだ。その前に教師が先づ物の見方、見方と表現といつたやうなことに悟りを開くことは勿論必要である。それで読本の文章を取扱ふに際しても、この工夫がいる。即ちその文章を透して作者が如何に物を見てゐるか、そしてそれを如何に表現してゐるかを察せしめ、此の作者が此の題材に対して此の時此の態度でこの言葉形式を用ひて表現しなければならなかつた其の真情実境に子供の想像を立ち到らしむることが大切である。かうした取扱が完全に行つた時、そこにはじめて子供の物を見る目は開け、表現の態度は確立するであらう。

田上は「作者の態度と綴り方との関係――その中で作者の態度は綴り方の根本であるということは最早茲にいふまでもなからうと思ふ」と言った上で、「ところが従来の綴り方教授では、表現の方法形式に就いてはいろ〳〵と工夫も凝らされ議論も闘はされてあるやうであるが、肝腎な根本問題としての物の見方その態度、見方と表現、表現の態度といふやうな問題に就いては之を等閑に附してゐたやうな傾向が見える。」と指摘している。子供の状況についても、「先づその根本の問題を解決して之が指導の道を講ずれば、表現の形式の如きは子供自らが立派に工夫し得るものであることを確信する」とした上で「彼等は先づ物の見方を知らぬ。次に表現の態度が混乱してゐる。」と鋭くその問題点を突いている。「綴り方を救済するなら先づ根本にかへつて作者の態度を指導せよ。」と強い口調で、形式重視の指導状況に警鐘を鳴らしている。この主張は、大正時代同様、現在の「書くこと」をも貫く、本質をとらえた課題意識であるのではないだろうか。むしろ、このように正鵠を射た指摘が大正九年になされていたにもかかわらず、現在も「物の見方」を重視する学習ではなく、形式を学習することに流れていることに不思議さを感じずにはいられない。現在もまた、田上の言うように、「彼等は先づ物の見方を知らぬ」状況にある。「肝腎な根本問題としての物の見方その態度、見方と表現、表現の態度といふやうな問題に就いて」、「その根本の問題を解決して之が指導の道を講ずれば、表現の形式の如きは子供自らが立派に工夫し得るものであることを確信する」という言葉は、まるで現在の「書くこと」指導に対してそのまま叫ばれている観がある。

田上はその根本を子どもたちに学ばせるための指導方法を提示している。「教師が先づ物の見方、見方と表現といつたやうなことに悟りを開くことは勿論必要である。それで読本の文章を取扱ふに際しても、この工夫がいる。即ちその文章を透して作者が如何に物を見てゐるか、そしてそれを如何に表現してゐるかを察せしめ、此の作者が此の題材に対して此の時此の態度でこの言葉形式を用ひて表現しなければならなかつた其の真情実境に子供の想像を立ち到らしむることが大切である。」その上で「子供の心に刺激暗示を与へて、彼等の活きた目を開いてやるより外はない。その刺激は如何にして与ふるかといへば優良なる作品を読んで聞かせるに限る。それは読本の文でもよい。子供の文でもよい。教師の文でもよい。大家の文でもよい。之を数多く読んで聞かせて、作者の態度を想像せしむることだ。表現の用意を味はしむることだ。」という。そして、「かうした取扱が完全に行つた時、そこにはじめて子供の物を見る目は開け、表現の態度は確立するであらう。」と改善すべき指導の方法を具体的に述べている。

大正八年の年末と大正九年の年始、一月号にわたり掲載された田上新吉の論文を中心に考察を行った。そこからは現在、「書くこと」また「描写表現指導」が如何なる状況に置かれているかを一つの側面から検証することができた。

大事にしていたことも読みとれる。これを何についてのどのような変容と田上は意識していたのであろう。この引用部分からは、表現が修正されるという変容があることへの気づきがあることが明確に指摘できる。それは、⑦で行われる二度目、三度目の表現の修正を「訂正」という言葉で表しているからである。また、「体験――反省――再現といふ過程が幾度も幾度も繰り返されつゝ進行するのであると見るが至当である」からは、「見ること」の変容も田上の意識の中にあることが窺える。「見ること」の変容が「表現」の変容になることも、この繰り返しの図解が示している。それがさらに「経験を思い出す際の受け止め方、心の深さや感覚の鋭さの変容」として②「反省」の言葉に込められ、「見ること」の変容、「受けとめ」の変容、「表現」の変容の過程が「幾度も幾度も繰り返されつゝ進行する」と言わんとしていることが読みとれる。

さらに田上は、先の引用文の後、次のように述べている。[18]

> さて私は茲に表現の態度といふ言葉を用ひた。それはものを見る態度と同一でなければならぬ筈であるが、唯前者は無意識的に働き、後者は表現の際（特に其の中の反省の際）に意識されて一の羅針盤の働きをなすといふ点が異なつてゐる。
>
> （傍点は田上自身による。）

ここで言う「前者」とは文脈から推し量るに「ものを見る態度」、先の引用部分からいえば、「単に人間として物を見る場合」や「一般の人間」がものを見る態度を指していると考えられる。それに対し、「後者」とは、「表現の態度」、言い換えれば「作者として物を見」、それを「表現」する時の「態度」を指すものと考えられる。田上は、「単に人間として物を見る」場合には、無意識的に見ているだけであるのに対し、「表現の態度」は、無意識的に働くものではなく、意識されて働いており、更に言えば、繰り返される②「反省」の段階や、⑤「再反省」の度に、羅針盤のような働きをしているというのである。つまり、一般の時よりも、作者として対象をどう見たかや、どのような態度でその対象を表現しようと考えるかということは②・⑤の過程を進む時に強く意識され、一種羅針盤のように、こちらの方向に進めていこうと方向を示す役割をすると言っている。それは、変容を意識していたことに他ならない。意識的に変容を引き起こすことを指導の意図としていたかどうかは、上記の「意識されて」だけでは残念ながら判断しかねるが、書き手の中に変容が起こること―「見る」段階での変容、「受けとめ」の段階での変容、「表現」の段階での変容、それぞれの段階を行き来する最中で起こる変容―を田上が明確に認識していたことがここから読みとれる。

その田上はこの論文の後半で次のように述べている。[19]

> 作者の態度と綴り方との関係――その中で作者の態度は綴り方の根本であるということは最早茲にいふまでもなからうと思ふ。ところが従来の綴り方教授では、表現の方法形式に就いてはいろ〳〵と工夫も凝らされ議論も闘はされてあるやうであるが、肝腎な根本問題としての物の見方その態度、見方と表現、表現の態度といふやうな問題に就いては之を等閑に附してゐたやうな傾向が見える。私をして言はしむれば、先づその根本の問題を解決して之が指導の道を講ずれば、表現の形式の如きは子供自らが立派に工夫し得るものであることを確信する。私は是まで多くの子供の綴り方に接してその欠陥を調べたが、その結果は私が今述べたやうな事を裏書きすべき証左が歴々として認められる。即ち彼等の綴り方の欠陥は、その中より語法・文法・文字の誤用を除いては、残りの殆んど全部が態度の上の欠陥である。彼等は先づ物の見方を知らぬ。次に表現の態度が混乱してゐる。いやこれは子供の綴り方だけではない。堂々たる国定の読本に尚且つ此の態度上の欠陥がざらにある。事茲に至つては又何をか言はう。私は叫ぶ。「綴り方を救済するなら先づ根本にかへつて作者の態度を指導せよ。」と。
>
> さて然らば作者の態度は如何にしてこれを指導するか。その中で主観的

られたまま、何かを表現しようとすると、視野が極端に狭くなり、本来であれば感じ取れるような、そのものを包む空気感であるとか、背景とのコントラストであるとか、においであるとか、その時の音等、肌で感じていたものが遮断されて、ぽっかり真空の中に浮かんでいたかのような、影を持たない存在としてしか感じられない場合がある。科学的な見方に徹する時には、記録をしながら対象を観察する姿勢も重要であろうが、ここで田上が述べているとおり、特に、芸術的な見方を求められている場合には、「自己の感情を対象に移入して之と同一体になるべき芸術的態度には、どうしてなり得よう」ということである。

二点目は「作者として物を見た場合はその対象を眼前に置いた時の感情又は思想の流れを後から一旦反省して、頭の中にそのまゝ再現してみなければならぬ。そして始めてそこに之を如何に表現すべきかの工夫が入用になつて来る。表現上の工夫としては先づ表現の態度を意識することである。次に表現の形式を考へなければならぬ。形式上の要素として最も主要なるものは言語意識である。語義とか語感とか、語法とかいつたやうなものがこれである。この用意が出来てはじめて表現にかゝり得る――綴る仕事に取りかゝり得るのである。」という点である。この部分は現在と比較してみると、気づくことが多い。今は、「この構成を、この表現方法を学ばせるために、この題材で書かせる」という教材の提示の仕方が多くはないだろうか。それが本来は逆であることをこの部分は気づかせてくれる。例えば、対象に感動した思いがあった場合、それを思い出した時に、もしくは忘れたくないとの思いから、書きたい思いに駆られ、さて、どのような書き方をすれば自分の見たものや感じたものが表せるかと考え、「では、こんな書き方をしてみよう」と表現の仕方を検討するのが本来の「書く順序」であったはずでは無いだろうか。特に、心を動かされたことによって表現が生まれる「描写」の場合は。読み手に、その時書き手が味わった感覚が生き生きと伝わるように表現することを求められた時、その根本にはそれに耐えうるだけの実体験が、感覚や感動が無ければ、表現の限界を求めることはできないと、田上は指摘しているのではないだろうか。

三点目は、「今この過程を図解して見ると次のやうである。／体験――反省――再現――表現――再反省――再現――訂正／時として吾々は対象物を前に置いて綴る場合がある。この際に於ては、この体験――反省――再現といふ過程が幾度も幾度も繰り返されつゝ進行するのであると見るが至当である。」という部分である。説明の手続きとして、この図解には「再現」が二度出てくるなど、説明の時に区別することが難しいため、次のような番号を付けて考えていきたい。「①体験――②反省――③再現――④表現――⑤再反省――⑥再現――⑦訂正」。本発表、「大正期『国語教育』誌における描写表現指導に関する考察7」では、「一、研究の目的」で述べているように、「描写表現指導」が「みること」との関連に注目することにより、書き手の認識の変容を促し、さらにその変容を自覚的にとらえる機会を得る学習の場となるのではないかとの仮説に立ち、研究を進めている。それは、「書き手がある事象の具体的な部分を丹念に描こうとつとめることは、その部分をよりよくみようとする行為につながる。すると、以前感じていたのとは違うみえ方に気づき、選ぶことばも変わってくる。その言い表し方ではまだ足りないと感じれば、さらによくみて、何とか別の言い方であらわそうと努力する。その行き来のあいだに生じている無自覚な認識の変容を、過去の自分の作品との比較や、他の書き手の作品の学び合いを通して、自覚的にたどり、またさらに新たな対象へと認識の変容を可能にしていく学習になると考えるからである」という意識から出発している。田上のこの図解は、極めて近い内容を伝えているように読みとれる。まずは①の体験があり、その体験が如何なるものだったのか②として反省し、その後、③で「作者として物を見る」立場のものとして経験したことを自分の中で再現させ、④の表現する段階に入る。その後、②・③・④の反復として⑤・⑥・⑦の段階が示されている。「時として吾々は対象物を前に置いて綴る場合がある。この際に於ては、この体験――反省――再現といふ過程が幾度も幾度も繰り返されつゝ進行するのであると見るが至当である」という言葉からは、その反復の中で生じる変容を

からうとか、この木を売つたら何程の金にならうとか、この木からは良い材木がとれようとか、或は又あの小僧は此の桜の枝を折つた公徳心のない奴ぢや、といつたやうな具合に、自己とか他人とか社会とかを対象として事物を利用し、行為を判断しようとする態度――それが即ち実践的態度である。

（傍点は田上自身による。）

以上のように述べ、「要するに人類の現実的生活の向上を目的として、一切の事物を道徳的に実用的に見て、之に価値判断を下す態度――それが実践的態度である」と説明している。

田上はいわゆる作者の態度を上記の三つにわけることにより、「読み方教授」と「綴り方教授」の指導内容の相関が、明確になることを意図していたことは先に見てきたとおりである。

それでは、その作者の態度が書く時にはどのように変化すると田上は考えているのかを、以下で見ていきたい。少し長くなるが、本研究の中心部分と直接関わる部分であるため、その部分を引用する。[17]

先づ単に人間として物を見る場合には、之を表現しようといふ目的欲望を伴うて見るのではない。だから、之を見て居る間は、今自分は如何なる態度で見てゐるかといふことは意識しない。従つて私が前に述べた三つの態度は、後から考へて見て、成る程自分は今芸術的態度で見てゐた哩といふ風に気がつくといふ程のことに過ぎない。作者としての見方も矢張りこれと同様である。如何に表現の目的欲望を持つてゐるとしても、その目的欲望を真向ふに振りかざして、その事ばかり考へてゐたら、肝心の物の見方はおジャンになつてしまふ。殊に自己の感情を対象に移入して之と同一体になるべき芸術的態度には、どうしてなり得よう。

たゞ、作者として一般人間と異るところは、それから以後の問題である。一般の人間であるならば、此の物を見る態度から醒めた――対象から離れた――後に於て、そのまゝ意識は対象から遠ざかつて、或は消え去つてしまふことがあつても一向問題にならない。けれども作者として物を見た場合はその対象を眼前に置いた時の感情又は思想の流れを後から一旦反省して、頭の中にそのまゝ再現してみなければならぬ。そして始めてそこに之を如何に表現すべきかの工夫が入用になつて来る。表現上の工夫としては先づ表現の態度を意識することである。次に表現の形式を考へなければならぬ。形式上の要素として最も主要なるものは言語意識である。語義とか語感とか、語法とかいつたやうなものがこれである。この用意が出来てはじめて表現にかゝり得る――綴る仕事に取りかゝり得るのである。今この過程を図解して見ると次のやうである。

体験――反省――再現――表現――再反省――再現――訂正

時として吾々は対象物を前に置いて綴る場合がある。この際に於ては、この体験――反省――再現といふ過程が幾度も幾度も繰り返されつゝ、進行するのであると見るが至当である。

ここで、田上が語っていることは注目に値する。

まず、田上が言うのは、「作者の態度」になる前の、書く前に見ている時の態度についてである。田上は次のように言う。「如何に表現の目的欲望を持つてゐるとしても、その目的欲望を真向ふに振りかざして、その事ばかり考へてゐたら、肝心の物の見方はおジャンになつてしまふ。」と。この田上の指摘は子ども達に作文を書かせる時、指導者が大事にしたい注意点を押さえている。書く前、対象を見、対象を捉えるただ中にある時、特に熱心な指導をする場合に、子どもたちを対象に集中させたいため、「どうしても、これについて書かなくてはならない」という思いや、必要以上に「どう書こうか」という気持ちに追い詰めてしまうことがある。しかし、それは「目的欲望を真向ふに振りかざして、その事ばかり考へてゐたら、肝心の物の見方はおジャンになつてしまふ」というのである。このように指摘されてみれば、思い当たるところがある。「このようにしなければいけない」と緊張を強い

吾々が花を見て美しいと感じ、月を眺めて悲しいと感じ、劇を見て面白いと感ずるなど、すべて吾々の心が事物に対して主情的に働く時、之を芸術的態度と名付けることが出来る。何となれば、対照物に生命を認める時、はじめて情が動くからである。この意味からして芸術的態度とは趣味に生きる態度だといふことも出来る。（中略）

之を要するに芸術的態度は対照たる物象に感情を移入してそのもの、生命を認め、然して之と共に生きる態度である。今一つ言葉を換へて言へば、主観と客観とが合体してそこに生ずる美的想像の世界に遊ぶことである。この態度で見る時天地間のありとあらゆる物象は悉く有情に見えるのである。

（傍点は田上自身による。）
（中略は渡邊による。）

田上は「芸術的態度」とは「之を要するに芸術的態度は対照たる物象に感情を移入してそのもの、生命を認め、然して之と共に生きる態度である。今一つ言葉を換へて言へば、主観と客観とが合体してそこに生ずる美的想像の世界に遊ぶことである」と述べる。

次に科学的態度である。「見ること」や「描写表現」とは直接関わらない項目であるが、田上の言う「科学的態度」から逆に「芸術的態度」や後に述べられる「実践的態度」との区分が明確に伝わってくるため、以下で確認したい。[15]

科学的態度――それは物質的に物を見、論理的に事を究むる態度である。之を他の言葉で言へば学究的に事物を見る態度である。例へば茲に一頭の名馬・一羽の孔雀が居るとする。今若し彼等が芸術家の美的観象に照らされたとしたならば彼等はそれ〴〵に特殊の生命を付与せられて一種いみじき絵画彫刻となり、或は文学となつて、彼等の肉体は死して土となるとも、彼等の人格的生命は永遠に衆人憧憬の的となるであらう。けれども彼等が一旦動物学者の俎上に乗せられて研究の材料になつた時、彼等はもはや一種の物質として取扱はれ説明の材料となるに過ぎない。是は何属の何類に属する動物である。この骨格は○○で人間の骨格の○○に相当する。血液は、内臓は……といつたやうな具合に科学の分解的のメスは遺憾なく容赦なく彼等の身上に振はれるのである。動物学者はかくして彼等の物質的本質を、或はその機能を系統的に説明しようと努めるのである。動物学者のこの態度が即ち科学的態度である。

（中略）

平たい言葉で要約していふならば、科学的態度は事物の真を究めて之を系統的に説明しようとする学問的態度である。事物を常に客観的に眺めて事物個々の関係を推究しようとする思索的態度である。

（傍点は田上自身による。）
（中略は渡邊による。）

この部分からも、芸術的態度を田上がどのようにとらえていたかが読み取れる。

次に実践的態度についての部分を見ていきたい。[16]

実践的態度――それは言ひ換へれば道徳的態度或は実用的態度といつたやうなものを一緒にした態度である。科学的態度が只管事物の真を究め、その物の本質を明かにして学術的に概念法則を拵えようとするに対して、実践的態度では如何に之を人間生活に応用すべきかを工夫する。又芸術的態度が只管美的想像の世界に生きようとするのに対して、実践的態度ではあくまで人間生活の現実世界にとゞまつて行為の道徳的判断を試みようとする。例へば茲に一本の桜がある。恍然とその花の美に見惚れて我を忘れるのは芸術的態度である。その花の一枝を折り、一花をむしり取つて分解し、花弁は、蕋は蜜線はと研究するのは科学的態度である。共に実践的態度ではない。この桜の木を村の学校に寄付したらよ

度で見如何なる態度で如何に表現してゐるかを感知すること」が求められ、それがそのまま「基礎的の綴り方教授である」という。「読み方と綴り方との関係―それは根底を主としてこゝに置くべきものであると私は信ずる」と言い、更に「私の読み方教授乃至綴り方教授は、根底をこの作者の態度に求め、これを立脚地として読み方綴り方相関の教育を行ひたいと思つてゐる。これが私の主張である。」と言うのである。

田上は上記の指摘の上に立って、「作者の態度」――「作者が如何に事物を見、如何に表現してゐるかの根本問題」として「みる」態度について、次のように言及している。[12]

> 私が今茲に見るといふ言葉を使つてゐるのは、通常目で物を見るといふやうな単なる視覚の作用ばかりをいふのではない。花を見る、劇を見るは勿論のこと、橋上に笛を吹いてみる、楼上の吟声を聞いてみる、人の話を聞いてみる、花の香りを嗅いでみる、蜜をなめてみる、起きてみる、寝てみるなど通常直観とか経験とか言はれて居る事柄を含むところの見るである。更にそればかりではない、歌に詠まれた吉野山の景色を想像してみる、過去の行楽を追想してみる、この命題は果たして正しいかを判断してみる、廃物利用の方法を工夫してみる、この行為の善悪を道徳的に判断してみる、その他一切の頭の動きを包含するところのみるである。つまり思索と体験、それ等の一切を包含するところのみるなのである。
>
> （「見る」・「みる」の傍点ルビは田上自身による。）

田上が、このように「みる」を広義で解釈するのには、分類を「芸術的態度」・「科学的態度」・「実践的態度」と三種類に分けることと密接につながっている。また、なぜ、三つの態度に分けられると考えたのかも以下の部分から理解することができる。[13]

> 従来行はれた文章分類の仕方としては、先ず散文・韻文といふ分け方がある。次に議論文・説明文・叙情文といつたやうな分け方がある。その他実用文と美文とか、何とかにとか種々雑多な分け方が行はれて居り、且つ読み方教授ではそれに伴ふ種々の取扱も工夫されて居るやうである。けれどもそれは一般的に見れば、主として文章を形式の上から眺めた分類法である。それであるからして、文章の形式的方面の取扱を考へる上には都合がよいかも知れないが、私が前に述べたやうな読み方綴り方相関の教授を行ふ上から見ると、そこに幾多の故障が起つて来ると思ふ。先づその主なるものを挙げて見ると、第一に生きた文章取扱が出来ない。読み方教授が一種の形式説明学に堕してしまふ傾向がある。従つて読み方は文章の型を吟味することであるといふ誤謬が子供の頭を支配するやうになる。その結果は子供の頭が型に支配されて極めて機械的な融通のつかぬ頭になつてしまふ惧がある。第二にはそれが因になつて綴り方の上に一種の因習的型式の模倣を誘発し醸成する。かくて綴り方は前に述べたやうな一種の機械的な遊戯となり、遂に自殺となつて了ふのである。（中略）
>
> そこで私はかうした形式的方面からの分類を一切避けて（中略）、文章の核心たる作者の態度に立脚して之を分類し研究しようと思ふのである。
>
> （中略は渡邊による。）

以上の考えから、田上は「作者の態度」に焦点を絞り、「芸術的態度」、「科学的態度」、「実践的態度」を掲げることになる。

田上は「芸術的態度」を次のように説明している。[14]

> 芸術的態度――といふのは世に所謂美的態度である。物象に対して之が生命を認め之と共に生きる態度である。（中略）

ない。従つて綴り方として得るところは死したる型式の模倣である。かくの如くにして綴り方は一種の遊戯に堕落し、終に精神的自殺となり了つた」と田上は指摘し、他の訓導達が盛んに、各々「〇〇の綴り方教授法」と題して研究を進めている中にあって、「文章の形式」の指導、「語句」の指導、「修辞」の指導に終始していないか、警鐘をならし指導の内容の見直しを求めている。田上が考える、読み方教授と綴り方教授との関係は以下のように述べられている。[11]

一体文章といふものは之を形式の方面から見ればまことに種々雑多な相を具へて居ると思はれるが、之が題材を作者の立場から見たならば、それは悉く作者自身の思想感情であらねばならぬ。即ち作者自身の心的内容であらねばならぬ。それが外的の刺激によると、内的の思索に基づくとに関わらず、物と事との如何を論ぜず、すべて之を一括して題材即ち作者の心的内容と見ることが出来る。さて作者がこの題材を如何に見、如何に表現してゐるかを洞察研究することは単にその文章を理解し翫味する上に於て必要なばかりではない。更に之を綴り方の方面から見れば、作者としての態度即ち如何に物を見るべきか、如何に之を表現すべきかを工夫する上に有力なる参考となるのである。作者としての生きた目を開くべき刺激として必要なのである。大きく言へば綴り方は人の問題である。その人を作る上にかうした取扱が必要なのである。

之を要するに、その文章を透して、作者が題材を如何なる態度で見如何なる態度で如何に表現してゐるかを感知することは、一面から見ればこれ徹底的の読み方教授であり、他の一面から見れば基礎的の綴り方教授である。読み方と綴り方との関係――それは根底を主としてこゝに置くべきものであると私は信ずる。

私の読み方教授乃至綴り方教授は、根底をこの作者の態度に求め、これを立脚地として読み方綴り方相関の教育を行ひたいと思つてゐる。これが私の主張である。

（「さて」・「私の」などの傍点ルビは田上自身による。）

田上が「その文章を透して、作者が題材を如何なる態度で見如何なる態度で如何に表現してゐるかを感知することは、一面から見ればこれ徹底的の読み方教授であり、他の一面から見れば基礎的の綴り方教授である」と指摘している、この部分は現在にも通じる論点である。「読むこと」の領域では何を目的として、どのような力をつけることを目指すのか、「書くこと」の領域で学ぶ内容と「読むこと」の学習内容は、子供の中でどのように相関していくのか。田上は、作者が何を見、どのようにとらえ、何を伝えたいと考え、それをどのような言い回しや表現で伝えようとしているか、それを徹底的に洞察し読み味わうことが「読むこと」で学ぶべき内容であり、同時に綴り方の基本となる学習事項であると述べているのである。これは、まさしく現代にも通じる大変重要な指摘である。現在、「読むこと」の領域として、ある教材を学んだ後、そのまま「書くこと」の領域に移行し、「読むこと」で学んだ教材の形式に添って自分で書いてみようという単元構成が目立つようになっている。田上は「かうした形式的方面の関係は一種の文型を教へるに過ぎない。従つて綴り方として得るところは死したる型式の模倣である。（中略）かくの如くにして綴り方は一種の遊戯に堕落し、終に精神的自殺となり了つたのである。」とすでに大正時代に現在の国語科教育の陥る課題を見据えていたかのような指摘を行っている。

作品は「之が題材を作者の立場から見たならば、それは悉く作者自身の思想感情で」あり、「作者自身の心的内容で」あり、「すべて之を一括して題材即ち作者の心的内容と見ることが出来る」と田上はいう。まず、「読み方教授」では「作者がこの題材を如何に見、如何に表現してゐるかを洞察研究すること」が求められることを言う。そして「綴り方教授で作者としての態度即ち如何に物を見るべきか、如何に之を表現すべきかを工夫する」ことを「読み方教授」との関わりの中で学ぶ事を学習することが重要であることを指摘している。「読み方教授」では「その文章を透して、作者が題材を如何なる態

大正八年の段階で、日本の文芸思潮は（6）の表でいうところの第三期自然主義から十年、第四期の新浪漫主義に移行し、進化する途上にあると田上は認識していた。まさにこの先の進む道、体系を考える地点にさしかかっていることを自覚的に捉えていたことをこの文章から読み取ることができる。

田上のこの論文からは、西洋と日本両方を比べながら文芸思潮を分類し振り返ることにより、これまで綴り方指導が辿って生きた過程と今後を見通す一助としようとした意図が見えてくる。綴り方教授について、写生主義一辺倒だった指導に行き詰まりを感じ、そこからどう方向転換を図るべきなのか模索していた様子が浮かび上がってくる。

三、田上新吉「作者の態度より見たる文章の分類と其の取扱」

田上新吉は一九一七年（大正六年）九月から、広島高等師範学校訓導となり、一九四二年（昭和一七年）三月[8]退官するまで二五年間奉職する。その間、友納友次郎（一九一二年（明治四五年）～一九一九年（大正八年）広島高等師範学校訓導）と同職となる。

ちょうど友納と同じ職場にいた二年目、田上は「作者の態度より見たる文章の分類と其の取扱」という論文を執筆し、大正八年十二月号と大正九年一月号の二回にわたり『国語教育』に掲載される運びとなった。

田上はこれらの論文によって、「読み方教授」と「綴り方教授」の関係を考え、「大きな国語教育という立場からみた読み方及び綴り方の進むべき道を開拓して見たい」と、その趣旨を明確に述べている。「読み方教授」と「綴り方教授」の教授法相関を大局的な観点からとらえた論文のため、前半部分は特に直接「見ること」や「描写表現」に関わらない記述が多いが、最終的に、なぜ、どのように「見ること」や「描写表現」指導を行うのかという点に迫るため、田上の論の順序に沿って見ていきたい[9]。

> 私がこれから述べようと思つてゐることは、一面読み方教授上の問題であると同時に、他の一面から之を見れば直ちに綴り方教授上の問題である。かう言つたならば読者諸君は已に私が読み方綴り方の関係を論ずるのだといふことを推知されたであらうと思ふ。さうである。私は茲に真の意味に於ける読み方綴り方の関係を考へて見たい。そして此の問題を解決することによつて、大きな国語教育といふ立場から見た読み方及び綴り方の進むべき道を開拓して見たいと思ふのである。

田上は「一面読み方教授上の問題であると同時に、他の一面から之を見れば直ちに綴り方教授上の問題である」と言っており、この時すでに田上は、「読むこと」と「書くこと」を二領域として分けて考えるべきでないと考えていたことがこの文から窺える。また、「私は茲に真の意味に於ける読み方綴り方の関係を考へて見たい。そして此の問題を解決することによつて、大きな国語教育といふ立場から見た読み方及び綴り方の進むべき道を開拓して見たいと思ふのである」という真摯な強い言葉から、現在にも通じる課題にすでに向き合っていたことを推しはかることができる。

上記の文章の後、田上はさらに次のように述べている[10]。

> ところが、従来読み方綴り方の関係として取扱はれたのを見るに、それは主として文章の形式であつた。語句であつた。修辞であつた。かうした形式的方面の関係は一種の文型を教へるに過ぎない。従つて綴り方として得るところは死したる型式の模倣である。（中略）かくの如くにして綴り方は一種の遊戯に堕落し、終に精神的自殺となり了つたのである。
>
> （中略は渡邊による。）

「読み方」の学習を「綴り方」の学習に生かそうとする場合、それは「文章の形式」の学習や「語句」の学習、また「修辞」の学習であったりはしたが、残念ながらその根底に流れる作者の思索を学びとる学習ではなかったことが述べられている。「かうした形式的方面の関係は一種の文型を教へるに過ぎ

に認識し指導を行っていたかたどりたいと考えている。特にここでは大正十年に出版された著書『生命の綴方教授』と、大正八年と大正九年に雑誌『国語教育』に掲載され、内容的にも『生命の綴方教授』に繋がっている論文二つ「綴方教授最近の傾向を論ず」と「作者の態度より見たる文章の分類と其の取扱」を取り上げるものとする。

二、「綴方教授最近の傾向を論ず」

「綴方教授最近の傾向を論ず」は『国語教育』大正八年十月号に掲載された田上新吉の論文である。『国語教育』は大正五年一月に創刊され、昭和一六年三月まで刊行された国語教育の月刊誌である。主幹は保科孝一である。

ここでは「見ること」「描くこと」に迫るため、まずは田上の論に従い、田上の見方による文学思潮の転換点と綴方の傾向との接点を見ていきたい。田上は「先づ西洋に於ける近代文芸の思潮を鳥瞰的に大観して見たい」と言い、以下のようにまとめている。(5)

西洋近代以後の文芸思潮とその変遷

第一期　古典主義（十八世紀末葉まで）
　　合理的・常識的・形式的・模倣的

第二期　浪漫主義（十八―十九世紀）
　　空想的・感情的・主観的・自由奔放的

第三期　自然主義（十九世紀中葉）
　　現実的・理智的・客観的・科学的　物質的　論理的

第四期　新浪漫主義（自然主義より約十年後―現代）
　　現実的・主情的・主観的・象徴的神秘的

このように、西洋近代の文芸思潮を四つの時期に分類している。その上で「次に私は我が国に於ける綴方教授の歴史的瞥見を試みてみたい」として、先の西洋文芸思潮と比較しながら日本における文芸思潮を以下のように述べている。(6)

西洋近代文芸の思潮と、我が国に於ける綴方教授の主張とを対比した一覧表を作つてみたいと思ふ。

（上、西洋文芸思潮、下、日本綴方主張）

第一期　古典主義・・・・・・・第一期、模倣主義
　　特徴、（形式的・模倣的）
　　―（十八世紀末まで）―・・―（明治三十二年頃まで）―

第二期　浪漫主義・・・・・・・第二期　自由発表主義
　　特徴（空想的・感情的・主観的・奔放的）
　　―（十八・九世紀より）―・―（明治三十二年頃より）―

第三期　自然主義・・・・・・・第三期　写生主義
　　特徴（現実的・理知的・客観的・科学的）
　　―（十九世紀中葉より）―・―（大正二年頃より）―

第四期　新浪漫主義・・・・・・第四期　？
　　特徴（現実的・主情的・主観的）
　　―（自然主義後十年）―・・―（？）―

この表の第四期に書かれている「？」と「（？）」は田上自身が書き記した記号である。この二つの「？」が重要な点になっている。その部分について、田上は以下のように記している。(7)

要約すれば、浪漫主義・自由発表主義に出発して、自然主義・写生主義の門を経過したところの新浪漫主義、之が発生を進化論的に眺めたものは、これやがて進むべき我が綴方の縮図でなければならぬ。そこに進むべき我が綴り方の体系が見出されなければならぬ。

一、研究の目的

作文教育における「描くこと」の学習は単に描写表現という一表現技法を学ぶことだけではなく、「みること」との関連に注目することにより、書き手の認識の変容を促し、さらにその変容を自覚的にとらえる機会を得る学習の場となると考えられる。

田上新吉は、「友納友次郎の課題主義と芦田恵之助の自由選題主義の論争の時期に、広島高師に在職、つぶさに、このふたつの主張を吟味検討し、新浪漫主義思想に立脚して、新しい綴方教育体系を樹立した」と評価される[1]、綴り方教授において大正期を代表する指導者かつ研究者の一人である。

田上新吉研究はこれまでその多くが生活綴方成立史の観点から進められてきている。

> 生命主義の綴方は「芸術的陶冶価値を鼓吹したこと」「文章の認識を深くしたこと」「自作中心の指導過程を開拓したこと」などの力説で、行き詰まっていた実践界に新風を送り、この道に寄与するところも多かった。しかし、人々の心を引きつけた生命観や芸術的価値観がやや抽象的・神秘的で具体性に欠け、形式強制のうらみもあって、実践的影響はあまり強くなかった。それよりも、綴方教授で「生活を指導する」ことを意識的に取りあげたことが、生活主義の綴方、あるいは生活本意の綴方への一つの動因となっている点、この史的意義をわたしは高く評価したい

このように飛田多喜雄は述べている[2]。この飛田の言説を踏まえ、滑川道夫は以下の様に位置づけている[3]。

> ここに見るような史的意義は、いずれも、「綴方の視点を生活的に転換させた功績は大きい」（峰地）という点に関わっているのである。教師中心から児童中心へ、教授から学習指導へ、生活即教育的志向へ、我が国の教育全体が視点を移動させようとするこの時期の思潮にさおさしながら、田上自身が「生命主義」から導かれる「生活主義」へ展開したように、後続の綴方教育書のほとんどが、この書の影響を受けているといっても言い過ぎではない。

また、『国語教育研究大辞典』において、田上の史的位置づけとして以下の様に浜田純逸は記している[4]。

> 田上は（中略）、哲学上の新理想主義に立脚して「教育の如きも子供の生活そのものに即して行われるべきもので言い換えれば生活即教育である」という考え方を導き、文学上の新浪漫主義から「文章とは作者の生活の真実なる表現である」という考え方を導いた。わが国の綴方教育史に「生活」概念を導入したのであった。田上の「生活」概念は、個人の直感的体験としてとらえるのであって社会的な広がりを持ってはいなかったが、「生活」の表現と指導とを教育の内容として正面に据えた点において、峯地光重、滑川道夫などの綴り方に大きな影響を与えた。

これらを見ても、田上新吉の綴り方教授論は生活綴方の観点から史的位置づけがなされてきていることがわかる。

これらを踏まえた上で、本論文においては、表現指導、特に「みること」「描くこと」に関わる田上新吉の指導観を明らかにしたいと考えている。書き手がある事象の具体的な部分を丹念に描こうとつとめることは、その部分をよりよくみようとする行為につながる。すると、以前感じていたのとは違うみえ方に気づき、選ぶことばも変わってくる。その言い表し方ではまだ足りないと感じれば、さらによくみて、何とか別の言い方であらわそうと努力する。その行き来のあいだに生じている無自覚な認識の変容を、過去の自分の作品との比較や、他の書き手の作品の学び合いを通して、自覚的にたどり、またさらに新たな対象へと認識の変容を可能にしていく学習になると考える。こういった「みること」と「描くこと」の往還を、大正時代の田上がどのよう

研究論文

田上新吉における描写表現指導観

渡邊　洋子（常磐大学人間科学部）

Tanoue Shinkichi's way of Thinking of the Methods of Descriptive Writing in Japanese Composition Class

Yoko WATANABE（*Faculty of Human Science, Tokiwa University*）

Tanoue Shinkichi was a *Kundo* (elementary school teacher) of Hiroshima Koto Shihangakko during the Taisho Period (1816-1942). His way of thinking influenced the methods in *Seikatsu Tsudurikata* from the later Taisho Period to the early Showa Period. Until now few people have examined his ideas about descriptive writing. When we teach descriptive writing to students in Japanese composition lessons in elementary school, we often teach how to describe only the apparence of something. As a result many students can perceive only the outside of the objects. However, Tanoue Shinkichi was different. He claimed *Kansho* (the way of observing something's true quality beyond it's surface (観照)) is important. In other words, we should observe not only the outside of objects, but also the inside, and consider how to put them into both words. After putting them into words, we repeat this process of *Kansho* in a cycle, allowing students to see their true quality. This paper closely examines Tanoue Shinkichi's way of thinking and aims to clarify the significance of his method of learning about descriptive writing.

中が乙二を敬慕していたことは、この旅日記を通読すれば明らかだが、乙二の娘、きよ女とも親しい。

きよ女宅で湖中は、世捨て人と見せかけた行脚俳人（職業俳人）を批判する文を遺している。その際に引用しているのが、『俳諧寂栞』（文化九年刊白雄著）の一節である。

少年の人産業ひまある時は、俳諧をなすべし。俳諧をなせバ多く鳥獣草木の名を覚ふ。且、年中の行事、古歌、古事の意をも伝へ知る也。（中略）すべてのもの、あはれなることをもさとり、月花に対してもおもしろきといふ心も出るなり。又、老若隔なく、談話の助となる故に、俳諧はすべし。俳諧師にはなるべからず。是産を破るをにくめバなり。

教養を深めるために俳諧をするのは推奨すべきことだが、むやみに俳諧師を目指すと破産するという白雄の言葉に湖中が共感したのは、自身が今回の旅を経験して多くの俳諧師と触れ合う中で実感したことなのであろう。

その後湖中は帰路の旅に向かうのであるが、その内容については次篇にて述べることにする。

文之の娘白之（通称豊）の句、「送る人おもひ切とてしぐれけり　白之」が刻まれている。

多賀城碑は江戸時代初期にこの地で発掘された奈良時代の石碑である。多賀城の創建と改修について伝えるこの碑を芭蕉は壷の碑と勘違いしているが、その点について湖中は「大にあやまれり」と述べて、現在の定説につながる考証を記録している。壷の碑は、青森県上北郡七部町坪にあった石のことをいう。坂上田村麻呂が弓のはずでこの地が「日本の中央のよし」を書き付けた十四五尺の大石だが、千人の人の力でこの大石を移動し、千引（ちひき）神社の地下に埋めたという。青森県が日本の中央というのは現代の感覚では奇妙だが、千島列島までを国土に含むとすれば中央になるという考えである。

（八）塩竈・松島・仙台

湖中が積年の念願である松島湾を眺めることができたのは、五月十八日の夕刻であった。御釜神社の神釜は体調が悪かったため見学しなかったが、長久保赤水の『東奥紀行』の一節を引用している。翌五月十九日には松島湾を舟で周遊している。湖中は富山（とみやま）について、「松島の景ハ富にあり」、「天下無双の絶景なりとぞ」と紹介している。富山は駕籠で行くには困難な険しい山であるから、湖中は富山行きを計画しなかったのであろう。

湖中の旅よりも三十八年昔の寛政元年（一七八九）、のちに水戸俳壇の指導者となる遅月上人は、実際に富山観音堂（松島町手樽字富山）を訪ねている。遅月は「松嶋の遠景いはんかたなし。」と述べ、「秋風や千しまに配る浪の花」の一句を遺している（拙稿「遅月上人の松島紀行」常磐大学人間科学部紀要第３４巻１号　２０１６年）。

五月二十二日、塩竈にいた湖中のところに、地元の俳人魚行が訪ねてきた。魚行によれば、近年までは多くの風士がいたが、大方は亡くなってしまったという。文政十年の時点で魚行が八十三歳であること、雪中庵蓼太門であったことは、本文によって判明する。

現地の人の言葉通り、塩竈、松島にも俳人、文化人がかつて多くいた。例えば、塩竈神社祠官の藤塚知明はこの地を代表する文化人であった。字は子章、呼名は式部、塩亭と号す。桃生郡大須濱（石巻市雄勝）の漁師の子として生まれ、宝暦八年（一七五八）頃祠官藤塚知直（歌学、神道学者）の養子となり、娘の順を娶って家職を継ぐ。「名山蔵」という私文庫に多くの蔵書を集めた知識人である。知明の歓待により、遅月は藤塚知明の歓待を受け、寛政元年（一七八九）十一月二十六日～寛政三年（一七九一）五月二十日まで十九ヶ月ほど塩釜に滞在した。寛政七年（一七九五）には『花勝美考』を著し、花かつみはノハナショウブであると提唱して支持を得た。寛政十年（一七九八）宝筐印塔事件の思想的主導者として桃生郡の瀬上家に謫居の身となり、寛政十二年（一八〇〇）没、六十二歳。

白坂文之は塩竈の遅月門人である。天明七年（一七八七）野田の玉川に能因歌碑を建立した。寛政元年（一七八九）には水戸から来訪した遅月上人に揮毫を依頼して「芭蕉翁松島吟並序碑」を松島雄島に建立した。この石碑は『奥の細道』の松島のくだりを遅月が揮毫し、「朝よさを誰まつしまぞかた心」の芭蕉発句を添えたものである。

他にも、遅暁（白坂文吉。東月堂。遅月門人）、沙月（塩竈の人。父は大肝入の山三郎、平林斎と号す）、佳堂（菊池新四郎。塩釜の人）がいた。

享和三年（一八〇三）塩釜神社の文治燈籠を囲む柵の石柱に、白居、文之、魚行ら四十四名による句が刻まれた（拙稿「遅月上人の松島紀行」常磐大学人間科学部紀要第３４巻１号　２０１６年）。彼らのほとんどはこの世を去り、湖中が訪れた文政期には魚行一人くらいしか有力な人はいなくなっていた。

魚行は湖中に次のようなエピソードを語っている。五、六年前（文政四、五年）、ある旅人が松島の客舎扇屋に泊まろうとしたが、一人旅の士は怪しいと判断して扇屋は宿泊を許さなかった。その際に旅人は「ながめ捨て帰らんもをし中〳〵にきりたちかくせ千しま松しま　よミ人しらず」と詠み残して行ったという。この人物がいったい誰であったのかはわからないが、文政四、五年頃に訪ねて来た風客の正体に興味をそそられる。

五月二十四日、湖中は塩竈を去り、仙台の松井きよ女宅の世話になる。湖

古翠と別れた湖中は五月十四日、山形県南陽市川樋を経て上山市に訪れる。上山において湖中は「義を守りて此城に死たることなど思ひ出てそゞろにあはれ也。」と畑谷城防衛戦に思いを馳せて江口光清を偲んでいる。

江口光清については、「江口五兵衛光清（こひょうえあききよ）～文武にすぐれた勇者～」片桐繁雄著　２００９年　最上義光歴史館ホームページ　最上家をめぐる人々２２）が参考になる。特に連歌作家としての光清にスポットをあてた点に心惹かれる。片桐繁雄氏によれば、光清は畑谷城防衛戦において上杉軍の調略に応じず最期を迎えるまで忠義の心を貫いたという人柄に加え、古典文芸に通じた優れた感性の持ち主であったという。光清は連歌十四巻に参加して七十六句が確認され、文禄二年（一五九三）二月十二日興行の連歌では、山名禅昭、景敏（連歌師里村昌琢の前号）と付合をしている。

秋の雲まよふあとより晴れ渡り　　禅昭
　つばさ離れず雁わたる空　　光清
　はるかなる田づらも色になりそめて　景敏

（六）新山・関沢・笹谷・川崎・茂庭

五月十五日、湖中は山形から東に向かい、阿古耶の松を見物できずに通り過ぎた。阿古耶姫は、信夫郡司の中納言藤原豊充の娘で、千歳山の古松の精と夫婦仲になった。だが、古松は名取川の橋材として伐採され、嘆いた姫は仏門に入り山頂に松を植えて弔った（謡曲「阿古屋の松」）。本文では実方朝臣がこの松を訪ねたことを述べているが、それは『平家物語』巻二「阿古屋之松」のことである。「陸奥のあこやの松に木がくれて出づべき月の出やらぬかな」（『夫木集』）の歌により、実方は阿古屋の松が陸奥にあると思っていた。だが、それは陸奥と出羽がかつて一国だった頃の和歌で、阿古耶の松が出羽にあることを老翁に教えられた、という内容である。

湖中はさらに山形市新山、関沢を過ぎて笹谷峠を越えた。ここでは有耶無耶の関の場所について考察している。有耶無耶の関は笹谷峠の南にあったという説（仙台のきよ女）と、山形県と秋田県の県境の三崎峠（岩城の露柱）にあったという説があり、現在も特定できていない。湖中は乙二、きよ女父子の笹谷峠説を支持したいようだが、「後の風騒人をまつ。」という客観的なまとめ方をして中立を保っている。

笹谷駅から柴田郡川崎町今宿野上町までの間の二里ほどは、天明二年（一七八二）～天明八年（一七八七）にかけて人々を苦しめた天明の大飢饉以来無人となってしまった地である。湖中は「古戦場に臨たるより一際ものあハれにおもはれ侍る。」と痛切な思いを述べている。

その後湖中は茂庭、鉤取、長町を経て、仙台に向かう。

（七）塩倉・宮城野・多賀城碑

五月十七日、仙台に来た湖中は、塩倉町（仙台市青葉区支倉町）の松井きよ女を訪ねる。きよ女は岩間乙二の娘で、仙台藩医で漢詩人として名高い松井梅屋（元輔）に嫁ぐ。弟は十竹と号す。のちに溶々と号し江戸に出て庵を構えた。乙二三回忌追善集『わすれず山』編。八月没、六十八歳。湖中は乙二を慕い、今回の旅できよ女の世話になるのだが、夫である松井梅屋と交流したかどうかはわからない。

その後、湖中は玉田横野、野田の玉川を通過し、多賀城碑を見ているが、いずれも『奥の細道』に取り上げられている名所である。研究者としての湖中の探究心がこれらの考証から窺える。

玉田横野は、『奥の細道』に「玉田（たまだ）、よこ野、つゝじがおかはあセび咲比（さくころ）也（なり）」と述べられた場所である。玉田は仙台東照宮東北の丘上、横野は仙台東郊。つつじが岡は宮城野原の西、今の榴岡公園である。「取りつなげ玉田横野の放れ駒つつじが岡にあせみ咲くなり」（源俊頼『散木奇歌集』）と古歌にあるが、湖中が旅した文政期には馬酔木の花はなく、茶店の鉢に一本植えてあったのをみつけただけであった。

野田の玉川は、①福島県いわき市小名浜の玉川、②岩手県九戸郡野田村玉川、③宮城県の多賀城市と塩竈市の境界、の三説を挙げている。天明七年（一七八七）、塩竈の俳人白坂文之は、野田の玉川（③）に能因歌碑を建立している。「夕されば汐かぜこしてみちのくの野田の玉川千どり鳴なり　能因」を正面に刻み、碑陰には「玉川や田歌ながるゝ五月雨　文之」の句と、

この後、湖中は米沢でも歓待されるが、紫明からの添書がその一助となっていた。米沢で湖中は「暮に及び芙山訪来て風談あり。これハ紫明より添書有たる故也。」と記して、紫明に感謝している。この記述は、二本松俳壇と米沢俳壇の結び付きの強さを示唆している。紫明は文政十二年（一八二九）三月十八日、六十九歳で没した。

本章における二本松俳壇の与人と紫明の事柄については、『俳人塩田冥々―人と作品』（矢羽勝幸・二村博共編著　二〇〇三年象山社）をもとに述べた。

（四）笹木野・李平・板谷・米澤

五月八日、湖中は二本松の加藤紫明宅を出立する。福島から米澤街道に入り、李平（すもだい）（福島県庭坂字神ノ森）で日暮れになったので宿泊する。当地は家の数二十五六戸の淋しい土地で、夜は嵐となり、家の戸がバタンバタンと鳴る不快な家で何度も夜中目を覚ました。翌朝の九日、宿の主人が短冊を求めたので二、三書き与えたというが、湖中が宿泊した宿名は記されていない。

その日は山形県米沢市板谷の駅長宅に泊まった。板谷の入口にあった米澤番所で駕籠を降りるよう指図されるが、蹇足（けんそく）（しびれによって不自由）である旨を門人の規外が伝えたところ、融通を利かせてくれた。五月十日は大沢（山形県米沢市大沢）を経て米沢城下に来て、宮沢素白を訪ねたが既に亡くなったという。米沢では赤井白平、芙山、稲丸、村六、春二、桐水、以文、宗碩といった俳人と交流するが、未詳の人物たちである。

五月十二日、湖中は米沢において芭蕉の俳諧に関して講釈をした。本文によれば、「わりなく（強引に）望れ侍りて祖翁の俳諧二巻を講ず。」とある。湖中が米沢藩の人たちにどのような講釈をしたのかは、『俳諧鳶羽集』（文政九年成稿　湖中著）から想像がつく。同書は芭蕉が参加する十一巻の連句に湖中が注解を加えた書物である。奥書によれば、文政九年八月発端、九月稿成、文政十年正月に謄写されている。つまり、今回紹介する奥羽紀行の数ヶ月前である。『俳諧鳶羽集』より、巻頭歌仙の第三までを紹介しよう。

猿簑集　元禄三年

鳶の羽もかいつくろひぬ初時雨　　去来

しぐれのやがて降出んとして、雲のへりきは立て広がり来たる頃、かならず鳶の五ツも三ツも羽をのして舞あがるもの也。其鳶の羽ぶりを刷（かいつくろひぬ）と作したる景の句なり。

時節　一吹風の木の葉しづまる　　翁

時雨の来らんとする折に、極て一陣の風落るなり。其風止てのち、はら〳〵と降出る常の事也。此脇は発句の前へ置て見るべしと或人の説あり。

太山　も丶引の朝からぬる丶川越て　　凡兆

風の木葉の静まるといふを山野の体と大やうに見なして付る第三の仕方也。

去来の発句、芭蕉の脇、凡兆の第三までを抜粋したが、それぞれの句について解説が加えられている。湖中が米沢で行った講釈も、このような内容を平易に解説したのであろう。文政期において芭蕉の作品について解説させるならば、『俳諧一葉集』、『俳諧鳶羽集』の編著を遺した湖中こそ最適の人物であったといえよう。幻窓湖中が芭蕉研究者として在世当時から高名な存在であったことがこの記述から判明する。

（五）大橋・川樋・上山

五月十三日、米沢を出立した湖中は、山形県南陽市大橋で菖蒲と燕子花を眺めつつ、赤湯温泉に向かった。この地で乙二が冬籠りをして「大河〳〵に月日を願へ谷の梅」と詠んだことに触れ、亡き乙二に思いを馳せている。湖中は大拱（福島県矢祭町）でも乙二の言葉を引用しており、湖中が乙二を敬っていたことがわかる。

湖中は赤湯温泉で高橋古翠と会うことを楽しみにしていた。古翠は川西町大塚の乙二門人で、乙二は古翠宅に滞在して付近の俳人の指導をした。燕子花見物に外出していた古翠であったが、初夜（午後八時頃）には戻り、共に俳諧に興じた。古翠とは気が合ったようで、「古翠ハ風流のしれものとかねて聞しにまさり、其胸中一点の滞なく、常に近づかまほしきをのこ也。」と評価している。

日本一の笑ひ好なる自笑齋のあるじ、詣うで来ていえらく、こゝに可笑（わらうべき）事の侍り、必よ臍にも沙汰はし給ひそ、とてさし出せる物あり。取て見れば「黒塚集」となむ題して、むかしなつかしう、おかしミさびしびに心あだなるあり。

社交的で笑顔の絶えない与人の作風は、擬態語の使用、小動物詠という点において一茶の作風と通じるところがある。

黄鳥（うぐいす）の握りつめたる小枝かな　与人（『粟蒔集』）
御仏の花を引こむねずみ哉　与人（『粟蒔集』）
すくと立て啼といふ也月の鹿　与人（『磯まくら』）
色こめて誰がつくりけん小町雛　与人（「春興摺」）
露はらり花の散るより見事也　与人（『随斎筆紀』）
ふしの間や芦の葉末に秋ハ行　与人（『随斎筆紀』）

末尾の二句は『随斎筆紀』に一茶が記録した与人の句である。

文政二（年）十月一日黒塚集添一通
文政三（年）二月十一日届　二本松根本与一兵衛（『随斎筆紀』）

と一茶は記しており、『黒塚集』が届いた折の与人書簡から一茶が抜き書きした句である。「露はらり」という表現は一茶が『七番日記』（文化九年の箇所）に書き留めた自身の句と表現が共通する。

露はらり〳〵大事のうき世哉　一茶（『七番日記』）
露はらり〳〵世の中よかりけり　一茶（『七番日記』）

現代ではこういった作品を一茶のみの個性として片付けてしまう傾向があるが、今後広い見地で化政期俳人の作品を見つめ直していくことが必要である。与人が一茶の影響を受けたという可能性は否定できないが、一茶と与人が面会したり、頻繁な書簡のやりとりがあったことは今のところ確認できない。おそらく自笑斎与人は自ら軽妙な作風を好んで詠んでいたのであろう。

文政五年（一八二二）二月二十六日、会津喜多方の関本如髪は二本松の与人宅を訪問している（『東日記』）。

いざまづ自笑斎（与人）まで杖を曳ん。花ハ人をまたず、時は失ふべからずと翁（冥々）をすゝめてしぶらふてよろぼへる手を取て昼より出たつ。暮んとする頃這つく。あるじ「思ひがけなき喜び徳一つ得たり。」など例の笑ひ〳〵自ら火を吹き豆腐などはやして小杯をさへ添して終夜語る。

突然の来客にも常に笑顔でもてなす与人は、周囲の人に親しまれる存在であった。もし一茶と会うことがあったならば、守谷の鶴老や、日暮里の一瓢のようにすぐに意気投合したことであろう。自笑斎与人は天保九年（一八三八）十一月二十日、七十歳で没した。

与人宅に立ち寄った五月二日の夕刻、湖中は加藤紫明（しめい）を訪ねている。紫明も与人と同様、二本松八丁目の俳人である。金沢屋忠兵衛。憚斎、二峰楼と号した。文化十三年、（一八一六）『玉ひろひ』編。文政五年（一八二二）、紫明は会津喜多方の関本如髪の招きで冥々と共に会津に行き、会津俳壇の人々と風交している（『東日記』）。

与人、紫明がいた二本松八丁目は、俳諧の盛んな地であった。それは東北俳壇を代表する俳人、塩田冥々（しおためいめい）社中の有力人物が集っていたからである。冥々は本宮町（現福島県本宮市）の蚕種商、行商の傍ら関東、信濃地方において活躍した。冥々が存命であれば、湖中もこの旅で冥々と交流したであろうが、冥々は文政七年（一八二四）閏八月二十二日、八十四歳で亡くなっていた。紫明は与人とともに二本松俳壇の中心人物となっていた。本文によれば文政九年（一八二六）秋、紫明が別家を作っていたことが判明する。湖中と紫明が親しく交流したことは、本紀行文に湖中と紫明の両吟半歌仙、紫明発句による湖中、規外、太民との四吟半歌仙が『三月越』の紙面を割いて掲載されていることで明白である。水戸から二本松まで十七日というペースで旅をしてきた湖中一行は、紫明宅に五泊（五月二日～八日）しているのも両者の親密さを物語っている。紫明の作風は平明温雅であり、そういった面でも湖中とは気が合ったのかも知れない。

子またずも寒むがらせけり寒念仏　紫明（「冬興」）
誰やらがしだり柳を潜るらむ　紫明（『傀儡師』）

賀川の八幡神社境内の枝垂桜の下に竹馬、英之、阿堂とともに芭蕉句碑「世の人の見つけぬ花や軒の栗」を建立している。雨考は文政十年（一八二七）七月六日に七十九歳で没している。辞世句は「わが命どの朝顔の露ならむ」。湖中が「七十九齢といひつれど健にして」と述べたのは同年の四月二十九日で、雨考が亡くなる六十五日ほど前のことであった。四月三十日には雨考と湖中は終日風譚している。雨考との談話で思うところがあったのか、その晩湖中は清貧の理想、家族らの係累を抱える者の苦しみを天命として受け入れるべきことを文章に綴っている。

（三）日和田・二本松

五月一日に須賀川を出立した湖中は日和田のかつみ屋という店で昼食を食べた。そして浅香山を訪ねる。浅香山には日和田の丘説と片平町の額取山説があるが、湖中もその点に言及している。当時の地元の人の話では額取山説が有力であったことがわかる。

また、詠み人知らず「みちのくのあさかの沼の花かつみかつ見る人に恋やわたらむ」（『古今集』）で知られるかつみ草は、古くは真菰のことと考えられていたが、近世に入ると小ぶりの菖蒲（ノハナショウブ）説が有力となった。ノハナショウブ説を唱えた書物として代表的なものは、寛政七年（一七九五）に塩竈の藤塚知明が著した『花勝美考』である。「あやめ草引く手もたゆく長き根のいかで安積の沼に生けむ　藤原孝善」（『郁芳門院根合』寛治七年（一〇九三）の和歌などをその根拠としている。松平定信、大原幽学もまたノハナショウブ説を支持した。『花勝美考』には、

常のあやめの花に似て少しこぶりなり。色は京紫の少し赤味つよし。此花二本松あさかの里に沢山野山にも有。

とある。

湖中が本文で「葉は麦のごとく花ハ銭のかたちに似たり。」「花かツみハ菖蒲の小なるものにして、花三ひら也。葉も細くちひさし。」と記録してるのもノハナショウブ説である。湖中が『三月越』において、「よその地にうつし植れバ極て枯るといふ土人の申ける。」「いつの年にや庵にうつし栽たりしが、終に枯うせし。（加藤紫明談）」とあるように、移し植えると枯れるという性質を地元の人と二本松の紫明の両者から聴取している点は興味深い。

明治九年（一八七六）六月十七日、明治天皇が行幸したの際、日和田の横森新田の休息所において、「菖蒲に似て最些小き花」なるヒメシャガを花かつみであるとして供した。それ以来ヒメシャガが花かつみとされて昭和四十九年（一九七四）郡山市の花に制定された。

『三月越』における湖中の記録は、文政期に主流であった「花かつみノハナショウブ説」の一例として貴重な記録である。

五月二日、本宮の森田屋に宿泊した湖中は、奥州街道沿いの杉田宿の北に建立された実方の歌碑を見物している。「はる〴〵ここへ来た杉田（北杉田）」を掛詞にした歌で、文政九年（一八二六）に建てたばかりの碑であったが、これは実方の歌ではないという。歌枕を地元に設けたいという我田引水の願いによって作られた石碑のようである。現在、七夜坂という砂利道の奥州街道旧街道（工場の裏道）にこの七夜桜の再建歌碑（昭和二十二年再建）がある。

二本松若宮町の根本与人宅には前日の五月一日に着く予定だったようだが、湖中は一日遅れて到着した。「すすのこ」と呼ばれる安達太良山でとれた竹の子の羹を御馳走になり、主人である与人の深情に触れている。現代ではその存在を注目されない与人であるが、化政期俳諧における一茶調について考える上で看過できない俳人である。

与人は二本松八丁目の人で、本宮町の塩田冥々に師事した。文化七年（一八一〇）八月、冥々に伴って三春、小野新町を通過して湯本、勿来の関、小名浜海岸に遊んでいる。記念集『磯まくら』（与人編）は江戸の夏目成美、白石の岩間乙二にも配本され、成美は「くり返し熟読仕候。おもしろき御紀行、実に甘賞仕候。紀氏（貫之）が古体ありといふべし。」（冥々宛成美書簡）と賞賛している。

与人は自笑斎と号したが、文政二年刊『黒塚集』に冥々が寄せた跋文から、編者与人の人柄が窺える。

がいた。湖中は尾花庵方居に依頼され、四月二十三日に句帖の序文を草している。この句帖の現存は確認できないが、太田を通過する俳人たちから句をしたためてもらうためのいわばサイン帳である。その序文を担うのは一廉の人物でなければならない。湖中は文政期における常陸俳壇の中心的存在であったため、方居は湖中に序文を依頼したのである。

（二）町屋・折橋・河原田・須賀川

四月二十七日、太田の尾花庵を発った湖中は、日立市東河内町にある玉簾の滝を見て一句詠んでいる。玉簾寺には立ち寄っていない。常陸太田市折橋では、駅長の向かいに住み、燕や雀が巣を作りやすくするために板を幾つも打ち付けた家に立ち寄っている。心優しい主人の人柄に湖中は心惹かれている。

明神峠を越えて福島県東白川郡矢祭町大珙（おおぬかり）に来た湖中は、この辺りの眺望について「鴨の羽色なる水、蜘蛛手にながされる」という乙二の言葉を引用している。乙二は化政期の東北俳壇を代表する俳人であるが、四年前の文政六年（一八二三）に亡くなっている。湖中は亡き乙二に思いを馳せつつ色彩豊かな大珙の水辺の景色を眺めたのである。

久慈川上流の伊香川を徒歩で越え、棚倉城を見物した湖中は、西白河郡中島村川原田に至る。そこで中島村の人は古来誰も煙草をのまないという風習に興味を抱き、「珍ら敷處也。」と述べている。

四月二十九日に須賀川に到着した湖中は、石井雨考と市原多代女に会う。両者とも当代の著名俳人であったが、二人と接した湖中の評価が対照的になっているのは面白い。多代女について湖中は、「女性なれバ風譚はか〴〵しからず。」と軽視している。湖中が須賀川に来訪した際、多代女は病後により症状が良くないという理由で探題句会に参加したものの句を詠まなかった。この時点で多代女は五十二歳になっており、十年前の文化十四年（一八一七）には『あさか市集』を編集している。三十一歳で夫が病没したのを機に、雨考の勧めもあって俳諧を始めたが、まだこの頃までは雨考の後ろ盾が大きかったことが判明する。多代女はその後九十歳まで生き、幕末期を代表する女流俳人となるのだが、五十歳当時の多代女に対する湖中の評価は辛辣である。

一方、雨考に対しては、「兼て文音し居けれバ旧識のごとし。七十九齢といひつれど健にして風流又他にこへてめで度老人也。」と好意的で評価も高い。湖中がこの旅の一会で見抜いた通り、雨考は有力な俳人であった。雨考は青年の頃、地元の指導者二階堂桃祖に師事し、夜話亭と号した。雨考二十八歳の時、桃祖から夜話亭の有様を記した「夜話亭記」を贈られている。夜話亭は須賀川の鎮守諏訪神社の付近にあり、その南隣に我が国銅版画の始祖である亜欧堂田善（あおうどうでんぜん）が住んでいた。雨考と田善は親しく、田善の息子静庵に雨考の娘しうが嫁いだ。文化七年（一八一〇）頃、雨考は自身の「老けりな花見るまでを人まかせ」を発句として成美と士朗が脇と第三を付け、西国地方の俳人たちが自筆で一句ずつ付ける付廻し歌仙を興行した（拙稿「化政期俳人の西国志向 - 翻刻石井雨考発句付け廻し歌仙」２００８年『二松俳句』刷新第２６号所収）。文化十年（一八一三）十一月、石川郡泉村の乙字の滝不動堂境内に、江戸の如意庵一阿が「五月雨の滝降りうづむ水かさ哉」の芭蕉句碑を建てた折、雨考は一阿の代理となって衝にあたっている。文化十一年（一八一四）に雨考が刊行した『青かげ』は、乙字の滝を描いた田善の銅版画が挿入されている。また、『青かげ』には「曽良旅日記」の写しが一部掲載されているため、古くから注目されていた。一茶の庇護者として知られる江戸の夏目成美は『青かげ』の跋文で次のように述べている。

須賀川の雨考ハわれと甲子をおなじうしてそのこのめる所もまたおなじ。わが年をおして人のおいもしらるゝにかれハ老てます〳〵すこやかに五百里のみちを笠かろげに出たちてわが幽扉をおどろかす。たがひに命なりけりなどいひ〳〵も多くの年へだてしふる物がたりくづし出てなきミわらひみ月もおちぬ。

成美と雨考は同い年ということもあって懇意だった。文政五、六年頃に発行された「正風俳諧師座定」という俳人番付では「世話人」の欄に雨考が載っており、全国的にもかなりの知名度があった。文政八年（一八二五）には須

廿四日、松井氏に遊て題庭植上枯木

　月の夜に半分残せ散松葉

　つまみ来て窓につけるや蝸牛

其夜**石膽**訪来る。風談深更に及ぶ。

廿五日、むだ書して遊ぶ。其詞、

　四時を友として遊ぶ人ハ人のおかしからずと捨ほかしたる物におかしき處のありとてひとりよろこぶ事あり。ある隠者の言葉に盛年にして廣莫野に玄珠をうしなひ、又これを無何有郷に拾ひて後、はじめておかしきとおかしからぬとの味ひを知べしといはれたり。頭陀袋を首に引かけて世を捨しと見せかけ、人のあはれびを乞ありく世捨ずものあり。人のおかしといふ物ハ其人の先に立ておかしとして人の情をむかふ。終に此事を業と覚て月花ハ風雅の外の事のやうになし果て、生涯をあやまるうろたへ行脚少からず。されバ「俳諧ハすべし。俳諧師にはなるべからず。」（『俳諧寂栞』）といふ世語ハ尊き詞なりけり。

其夕横田氏**亀丸**より消息ありて、發句あまた贈らる。

　明まいぞ此名月が過去になる　　亀丸

　野の蝶の草うつりして人につく　　、

（注釈）

○魚行・塩竈の人。桃井氏。大島蓼太門。蓼太が明和二年（一七六五）に仙台に訪れた際に入門した。文政十年に八十三歳であった。

○『俳諧寂栞』・中興五傑の人に数えられる加舎白雄が著した俳論書。文化九年刊。

四、『三月越』（往路篇）考察

　文政十年（一八二七）四月十九日、湖中は松島を目指して水戸を旅立った。『常陸俳諧散歩　活躍する遊俳たち』中根誠著　２０１８年４月　暁印書館）には、筆写本『奥羽日記』をもとにした「『奥羽日記』行程のあらまし」（大森昇）が掲載されており、旅の概略を俯瞰することができる。更に湖中の旅日記の特質を理解するためには、本稿で紹介する自筆本を解読して湖中と東北俳人たちとの具体的な交流と各地の俳壇状況、歌枕等の伝承検証について着目することが肝要である。本章では作家、研究者という二つの顔を兼ね備えた湖中の旅の実態について、若干の考察を加えたい。

（一）水戸・額田・太田

　湖中は芭蕉が『奥の細道』の旅に出た四十六歳の頃から松島に行きたいと考えていたが、「貧とほだし（自由を束縛するもの、足かせ）」に繋がれて五年以上が経過してしまったと述べている。湖中が念願の奥羽紀行に出ることができたのは五十二歳の時である。旅を延期させた「ほだし」について、湖中は具体的に言及していないが、その一因としては『俳諧一葉集』の校訂作業の遅延があったことが挙げられよう。湖中は『俳諧一葉集』の序文を文政十年（一八二七）八月に草しているが、序文には「かれに訂しこれに正すに、非あり是（ぜ）有て、空しく村肝をきざミて（深い感銘を受けて）功なし」と、校訂に苦労したことが記されている。湖中が『灰価値一葉集』の最終校訂を依頼したのは、江戸の豊島久臧である。文政十年（一八二七）四月十九日、五十二歳の年にようやく奥羽の旅に出立できることになったのは、『俳諧一葉集』の行程作業の目処が立ったためであろう。

　旅の同行者となったのは門人の規外と太民である。湖中は痿疾（しびれ）により足が不自由であったので移動は駕籠である。駕籠者には先棒、後棒の二人が必要であり、常に合計五人で移動していたと考えられる。次号で紹介する（復路篇）において湖中は旅中の願いとして、「極りなく愚なる夫にあハじとおもふ（この上なく愚かな駕籠者にはなるべく会いたくない。）」と心情を吐露している。長旅を駕籠で移動しなければならない湖中特有の所感である。旅の延引の一因として湖中は「貧」を挙げているが、旅に出るためには健常者に比べてかなりの駕籠代が必要となる。それでも旅を敢行したいという思いを七年間持ち続けたのであるから、この旅に懸ける湖中の強い意気込みを観取することができる。

　見送りには常陸太田の勝村方居、筑波郡北條町の市村眠石、門人の左程ら

るものいひ島に舟を半引あげて昼餉を喰ひ、小貝拾ひなどして爰かしこの嶋〳〵にためらひつゝ夕汐を待て石舎の庭まで舟を入んとするに、いまだ高きが故に潮のさし来らず。江上の釣舟處〳〵に碁を敷たるやうに見ゆ。棹郎云、汐竈より松島まで江の中二里餘、東西三里東南大洋の方ハ洲を築たるがごとく岩石横たハりて洋よりはこび来るあら浪をよけ、其間に迎門四有て、潮の満干にしたがひ海水西にかよひ、東にながる百舩出入する事安くして、絶間なし。其潮にのりて鱈（はも）、鱸、黒鯛、鰈（かれい）、鰹（ぼら）など云魚、おほく入といへり。しかるに此棹郎汐時をしらず。覚束なき舟師なりけらし。日西山に落て石舎に帰る。

月と日ハかはらぬものを千松しま

夜坐しゾかに眼をふたげば、しま〳〵のおもむきうかび出て再び其景に対するがごとし。

雄島籬が嶌の外其名雅ならず、惜きこと也。

子の刻ばかりと覚ゆる頃、ふと転寝の目さめて起上りたるに片われ月山の上に昇、江上の潮湛（たたた）て水面いさゝかの風もなかりけるが水鶏の声そちこちに聞ゆ。物あはれなるさまいはむ方なし。

哥人のたゝくとよみし水鶏かな

廿日、予と**規外**といさゝかなやむ處ありて終日筆をとらず。眠り臥。

此浦に舟虫といふものあり。かたちハ蟀（こおろぎ）の羽のなきがごとく、色も又是にひとし。庭中にも舟中にもおほくあり、人音を聞てハ足はやく散乱する虫なり。

廿一日、少し快く筆をとりて遊ぶ。

石亭ハ泥土をたゝみあげて地をならし、造りなしたる家屋也。故に潮の満る時は庭、上屋渡水となりてあたかも浮島に似たり。

青東風や障子にうつるむら鴟

涼風の目に見へ来るや千賀の浦

まがきが島もほど近し。あまの小舟漕つれてさかなわかツ声〳〵にと書給ひし。今も猶折からのさみだれに簑笠着つれて釣人の小舟さしちがふさまいづちの浦にも有ならひながら、處がらこそいとあはれなれ。

あはれさはあまといふ名よ五月雨

さかなわかツ處を寺島河岸といふ。又新河岸といふ。

（頭注）古今　大哥所　みちのくのいづくはあれどしほがまのうらこぐ舟の綱手かなしも　藤原清輔　塩がまの浦ふく風に霧はれて八十島かけてすめる月かな

廿二日、僑屋のつれ〴〵なるまゝに此里の風士を問侍りしかバ近き頃まであまたありけるに、大方ハ黄泉にゆきて、今ハ只**魚行**といふ老人ひとり残れりとて来りける。其齢八十三と云。雪中庵**蓼太**の門に遊びしといへり。其句、田中氏ハ常に居住の事に心を尽し、作り文かゝれけるに、ことし春の半過る頃一夜の風にさそはれて空しき人の数に入給ひしを悼て、

藿の普請にぬらす袂かな　　魚行

老人の志にめでゝ書付侍りぬ

ながめ捨て帰らんもをし中〳〵に　　よミ人しらず

きりたちかくせ千しま松しま

魚行云、五、六年松島の客舎扇屋と云に獨旅の士来て日をかさねて泊り居けるを、其ほとりのものども、士のひとり旅ハあやしとて、扇屋に其ことわりいひてかの士を立せける。士此哥を床の間に残し置て往しとなり。

廿三日、予も**規外**も少し快きまゝに仙府に帰らんと立出る。日既に午にちかし。庭上より千賀の浦、まがきが島を見やりて又来る事のかたしと袂をぬらす。

磯の香はいづちもあれど風かほる

高崎、**中田**、**南宮**など云里〳〵を過るに植はじめたる小田處〳〵にありてうれし。「風流のはじめや」と云吟おもひ出られ侍る。

旅人の噺して居る田植かな

此夜仙府の松井氏をあるじとす。母子懇にあるじせらる。**玄鶴**に告て**規外**ともに服薬す。三四貼にしてやがて癒たり。

一見の後城址の北の方をめぐりて田畑の間の径を行。汐竈道加瀬塘（つつみ）といふ沼の上に出る。此辺りの麦都て大也。膏腴（こうゆ）（肥えた土地）の地と見ゆる也。

（頭注）顕昭『袖中抄』云、石文とハ陸奥のおくにつぼの碑あり。日本のはてといへり。但田村将軍征夷の時、弓のはずにて石の面に日本の中央のよしを書付たれバ、いしぶみと云といへり。『新撰哥枕』に信家従侍の申ししハ石面長サ十四五尺斗なるに文を彖り付たり。其北をつぼと云。私云、みちの国ハ東のはてと思へど、蝦夷の島ハおほくて千島とも云。陸地をいはんに日本の中央に見侍るニぞ。以上『袖中抄』。土人云、南部北郡野辺地と七戸の間に、坪村石文村坪川あり。昔石文ハ坪川の岸にありしをいつの頃にかありけん。其郷の主の惑ること有て、此碑を山の中へ引て埋む。其上に祠を建て石文明神と祭たり。石甚重かりし故に、千引の石ともいひしと也。多賀城ノ事始テ見ニ『続日本紀』聖武帝天平九年夏四月ノ紀一。

（注釈）

○塩倉町・仙台市青葉区支倉町。

○玉田横野・玉田は仙台東照宮東北の丘上、横野は仙台東郊。つつじが岡は宮城野原の西、今の榴岡公園。

○南部七戸の坪村・青森県上北郡七戸町坪。

○『袖中抄』（しゅう）・平安末期の歌学書。二十巻。顕昭著。文治年間（１１８５～１１９０）ごろの成立。万葉集から堀河百首ごろまでの歌集・歌合から約３００の難解な歌語を抄出・解釈したもの。

○野田の玉川・歌枕。多賀城市と塩竈市の境界にある。「夕されば汐風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり　能因」（『新古今集』）

○多賀城の碑・江戸時代初期、多賀城碑は宮城県多賀城市市川で発掘された。坂上田村麿が弓の弭（はず　弦を引っ掛ける金具）で「日本の中央のよし」と記したという壺碑とは別のものだが、芭蕉が来た当時は多賀城碑が壺の碑であると考えられていた。

○信家・桃山時代の鐔工（たんこう）。鉄の鐔に毛彫りの文様やその題目、兵法の歌などを刻し、金家と並ぶ名工といわれた。甲冑師明珍派の名工信家とは別人とされる。生没年未詳。

（八）塩竈・松島・仙台　五月十八日～二十五日

汐がまに至る。既に申の刻に近し。比丘尼坂を下り、明神の前を過て旅店石屋喜戸治といふもの、家に止宿す。実に東の端の亭にして、居ながら塩浦を見わたし、まがきが島、千賀の浦、末のあたりにあり。此舎の右の方ほど近き所に古へ明神の塩を煮給ひしと云。釜四ツあり。予少しなやむ所有たるが故に、往て見ず。

赤水曰、街中有二小祠一、側置二古釜四一祝奴語曰、此往古明神所レ煮レ塩物也。釜中之水大旱不レ涸尤妙二眼疾一と云々。

藻塩草ニ昔田村将軍征二蝦夷一時、炊二五万八千人兵糧一此釜也云。

兎角する間に夜に入て、月ハ山と海とのさかひより出るほどに、風景一変してしばし人境の外に坐するがごとし。

まツ島やねがひの外の夏の月

十九日、東の方わづかにしらみ月ハ在明にて江上の松しめりかへりてそゞろにへなる景気筆端舌頭に懸らず。きのふ約し置たる棹郎の来りて、満潮の間の出舟を促すほどに、朝餉そこ〳〵に打喰て卯の半刻斗り小舟に打のり破子竹筒など取入れて纜（ともづな）を解。天気上もなく清朗にして先ヅ東の方に金華山ほのかに見ゆ。

（頭注）ながむれバハ十島かけて朝みどり霞ぞたてる汐がまの浦

それより島〳〵の数を尽すばかり眺めゆきて雄島に舟をよする頃ハ、稍午にちかし。

（頭注）雄島一作二御島一相伝日本武尊舩着二此島一故曰レ御　風雅　明わたるをしまの松の木の間より空にはなる、あまのつりぶね

月見が崎、松島の宿は北にあり。五大堂福浦島ハ東にあり。其辺りにあるをすべて九の島と云といへり。富山又其向ひにそびえ立、行程弐里といふ。諺に松島の景ハ富にありと云、天下無双の絶勝なりとぞ。又舟を汐竈の方にかへす。はじめの舟路と引ちがへて沖の方の島〳〵をめぐり、汐干島に隣た

馬せずに通ったので、神罰により落馬して死んだ。

○阿古屋の松-山形市の東部、千歳山にある松。阿古耶姫の伝説で知られる。

○有耶無耶の関跡は現在でも笹谷峠の南（宮城県柴田郡川崎町今宿字川岸）説と三崎峠（山形県飽海郡遊佐町と秋田県にかほ市の県境）説があり、特定できない。

○露柱-本文により岩城（福島県いわき市）の俳人であったことがわかる。露沾系の人であろう。

○清女-岩間乙二の娘。弟は十竹。仙台藩医松井元輔に嫁ぐ。のちに溶々と号し江戸に出て庵を構えた。乙二三回忌追善集『わすれず山』編。八月没、六十八歳。

○野上-宮城県柴田郡川崎町今宿野上町。

○貴船の神の祭り-京都の貴船神社で行われる御更衣祭。旧暦四月一日に行われ、虎杖（いたどり）祭とも称された。神社付近の山間から虎杖を採取してその多少を競い合った。

○茂庭-仙台市太白区茂庭。

○鉤取-仙台市太白区鉤取。

○長町-仙台市太白区長町。

（七）塩倉・宮城野・多賀城碑　五月十七日～十八日

十七日、**福島**より左にわかれてこのかた辛じて**板谷**、**笹谷**の嶮岨を経て、山川草木の眼に飽きぱかり覚たるに、きのふ仙府に至、旅愁を養ひしかバいさゝか古郷の思ひ侍る。

　青空の五月にあふや鳶の声

朝の間消息して午時過より塩倉（シクラ）町の松井氏**きよ女**を訪、風談日暮に及ぶ。松島一見の後又訪ん事を約して旅店に帰る。

　茂賈、**東丸**に消息し侍りしが、田舎へ出て居合せざりしかバ一面せず。

　兼て文音のありしが、折のあしく憾を残せり。

十八日、朝とくより**松島**見にとて**汐竈**に行行程四里半。原町を過るほどに躑躅が岡釈迦堂ともいふ右の方にあり。**玉田横野**ハ左りの方にて原町のうしろにあり。

「とりつなげ玉田横野のはなれ駒つゝじが岡にあせミ花さく」といふ

　古哥ハあれど、今つゝじが岡にたへてあせみなし。茶店のをのこ鉢に一もと植て置り。其の名残をとゞめけるしるしなりといへり。

（頭注）哥枕　みちのくのつゝじが岡の草つゞらつらしと君をけふぞ知ぬる躑躅が岡一本に櫺岡とありとぞ。

原町を出はなれたる松の並木の間より、東にあたりて宮城野の原見ゆ。四面田につゞきて其境に松むら〳〵とありて平なる廣原也。木下天神の杜など其うつりに見へて一眼の中にある田圃すべて廿万石の所務ありと云。

　青いのみをミやぎのといふ五月哉

燕澤の碑大元の僧佛光禅師の建る所せハ道の東南にありて近しといへども夫をわづらハすが故に一見せず。

案内今市など云宿を過て、市川村入口に小橋あり。其ながれを市川と云。野田の玉川もこゝに落入るといへり。

　勿来関と関田の間に玉川あり。其ほとりの人のいふに此玉川ハ能因の哥ありたるながれにまぎるゝ事なし。何やらの文にも玉川ハ勿来に近しとあり。又、**野田**といふ所に寺ありて其事證とするに足ものありと云。又南部にあるを実といふ人あり。仙臺にあるを実といふ人あり、後の騒客をまツ。

（頭注）「能因法師　夕されバ汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥啼なり」

多賀城の碑を見る。道より南にあたりて三丁ばかりにあり。実に山川の外の古みこれに及ぶものあらじといふべし。

　世人此碑を壷の碑と云。大にあやまれり。壷碑ハ南部七戸の坪村にあり。日本中央の四字あるのみ。しかれども其處の人惑る事ありて、これを埋み石文明神と号す。故に今はなし。碑ハ多賀城修造の碑にして南部にある壷の碑にハ拘らず。風土記の誤より多賀城を壷の碑といひ謬りしとなり。

み猶其父乙二の説を聞しと覚ゆれバ実事なるべし。

規外云、「夫のいひしと**露柱**の説ハあやまりなるべしと覚ゆ。後の風騒人をまつ。

道路の左右熊笹あり。絶頂に至て殊におほし。もし**笹谷**の笹の謂ならんかしらず。東の方へいさゝか下りたる處に観音堂有。其堂守、物うりひさぐをかしき法師の業也。これも又人を済度するのひとツにやあらん。此ほとり残雪或ハ三十間あるひハ五十間とつゞきたる上をゆく。深さ三尺ばかりと覚ゆ。戌亥の方にある舎を千軒沢といふ。そのかみハかほどの人家ありし處と云伝へ侍りしとぞ。なほ下りゆくほどに、老樹森々と茂りあひて日月の光りを見ぬ方おほし。例の異禽しバ〳〵啼中に、慈悲心と啼し一声を聞、なか〳〵聞ことの安からぬ鳥と思ひけるに、これも又行脚の一徳にてぞ有ける。駒鳥、翠雀（るり）かしましきまで囀る。其間三里ばかりの間とおぼえたり。

春にして五月の空を山の鳥

笹谷の驛に下る。これより仙臺の封彊なり仙臺の番所有。それより**野上**の里に至る間、二里餘の所人家一宇もなく誠に無人声也。道の左右昔ハ田圃のさまあり。葭芦生茂りたるハ小田の跡、萩芒の見へたるハ畑の跡なるべし。四十年前の飢饉より斯なり行しやと懐舊に涙を落す。古戦場に臨たるより一際ものあハれにおもはれ侍る。野上の入口に幅十間ばかりのながれ有て橋を渡す。土人北川と云。

よしきりや馬のめろ〳〵きびしがる

尻敷に帋杖折（いたとり）や鰍（やもり）つり

新山より此ほとりまで五里ほど峠の前後帋杖おほし。此頃人のたけをこすばかり也。七八月頃の長思ひやらる。**貴船の神の祭り**にも是に及ぶもの有べからず。

此夜、**川崎**驛よし田屋に泊る。いぶせきやどり也。仙府へ十里と云。

南天に草しもつけや旅のやど

十六日、朝とく舎りを出てやがて濁りする川の侍しかバ其名を問しに北川と前川の落合たるながれといふ。さて名取川はいづちのほどにやと重て問侍れバそれハ名取郡より出て仙臺の城の北を流れ海に入といひ侍る。これ土人のしらざる也。其後仙府の帰路に増田、中田の間にて名取川の橋をわたる。城より二里ばかり南にあり。

五石、**赤石**、**茂庭**の間道ハ名取川の左右にして又山坂おほし。此ほとりより真竹の林を見る。竹の林を見ぬ間三十餘里とおぼゆ。

芍薬に覆ひをするや麦こなひ

茂庭驛を出て二處山越あり。西にあたりて丸く高き山の侍りしかバ其名を問けるにおどかもち又云うどかもちと云といへり。かねて聞ぬ茂庭山といふありと。もしこれらにも侍るにやとおもはる山越の頂の處より、東の方打ひらけて海漫々と湛へたるが里を打こして見ゆ。其中に金華山ほのかに聳立り。名取川足の下より海に向てながれ、風景いふばかりなし。濱邊まで四里ばかり有といふ。

人のすむところハくぼし夏の海

鉤取といふ驛に至る。

枝ながら覆盆子さげゆく女かな

早乙女の声かけてゆく隣かな

長町驛を過て廣瀬川一名青葉川といふ橋を渡りて、

此橋を渡らず左にきれて西に行バ仙臺の城南大年寺瑞鳳寺へ至るといふ。

衢（ちまた）を行事一里十二町其中芭蕉逵（つじ）ありにして国分町に至。清水（シヅ）野屋に舎る。数日を経て鮮魚を喰ふ。丙穴の魚といふとも此味ひにまさるべからず。

傳記曰、青葉山往古神仙窟也。仙人時々飛二遊于松島一故曰二仙臺一といへり。

水府より米澤まで五十五里ほど、米澤より仙臺に至て三十餘里と覚ゆ。

行程すべて九十里ばかりなるべし。

（注釈）

○実方・平安時代中期の歌人。左近中将藤原実方。笠島の道祖神社の前を下

かげり石といふ。）川口驛に至。小雨降出たり。矮屋の庭に大柳ありて街へさしかゝりたり。

旅人に五月を見せる柳かな

上山に至。城ハ町の西山の半腹にあり。又湯家〳〵に有といふ。頗繁華の地也。昔**江口氏**の父子義を守りて此城に死たることなど思ひ出てそゞろにあはれ也。松原驛を過て半里にたらず、洲川と云あり。急流なる山川なれバ仮に橋をかけて人をわたす。高水に至てハ其幅数丁あると見へて砂石を田の中に積たる處いくらも見へ侍る。川の岸に**片谷地村**と書たる杭あり。其かみは谷地なりけらしといひし。翁の句のありし處なるにやとおもひて、土人に問侍れバ**谷地村**ハこれより二里ばかり北に在といへり。此夜山形の城下旅籠町の佐久間屋に舎る。城ハ平地にて街の東にあり。往昔**義光**の代の名残をとゞめけるにや、町の数おほく繁栄の地也。二日町と云より十日町といふまで有と云めづらしき名なり。

（注釈）

○大橋 - 山形県南陽市大橋。

○赤湯 - 南陽市赤湯温泉。

○川樋 - 南陽市川樋。

○中山 - 山形県上山市中山。

○上山 - 山形県上山市。

○江口氏 - 安土桃山時代、最上氏の家臣江口五兵衛光清（ごひようえあききよ）のこと。

（六）新山・関沢・笹谷・川崎・茂庭　五月十五日～十六日

十五日朝、とくやどりを出侍るに天気快晴也。町家数丁を過て田べりの道に至る。米澤より山形まで大かた北に向ひ来りしが、俄に真東に向ふ。**実方**朝臣の尋曳給ひしといへる**阿古屋の松**ハ南の方一里ばかりにありて、是よりほのかに見ゆると人のいひしが、かれのこれのと問侍る間に行過たり。跡にておもへども及ず、東北にあたりて山川の鳴音烈しく聞ゆ。これ則最上川の水上なりといふ。其川にそひ行て橋を渡る。

山〳〵の五月の露やもがみ川

水の漲り落て突あたる巌石の上に庵を掛造りにしたるあり。絵に見るがごとし。異やうなる趣を好る人と見へたり。此ほとりの道、石のおほくして田の畔を石垣に作りたるなどいくらも有。**新山**の驛に至る（山形の番所有）。もがみ川の橋をこへるより道路すべて嶮し。**関根**（沢）の里ハ坂道也。そこへ家をだん〳〵にひとつ〳〵作りたり。其数二十軒ありといへり。其めぐりの山〳〵にうるハしき声して啼ものあり。何といふ鳥にやと問バ「鳥にあらず。麦蝉と云虫なり。」といへり。数をしらず啼處有。又閑古鳥多し。すべて異なる鳥、ことなる木草ばかり也。其中にはこね草（クサ）と云ひとつ名の知たるもをかし。たとへ西上人をいざなひ申たりともいぶせかり給ふべき山里なりけり。

麦蝉につられてのぼる峠かな

新山より**関根**（沢）までなべて陟り坂にて**関根**（沢）より一里半ばかり、まことに険しく羊腸といふべし。時をうつして攀るまゝに、終に笹谷のいたゞきに至る。登り来たる方を顧ればれバ最上の庄の人家、木立などの光景こまやかにならべたるがごとく見渡さる。それより七八丁の間平地也。雪の頃、旅人の道ふみたがへん事をあはれびたるにや。しるしの竿といふものを處〳〵に立置り。これ奥羽の境といふ折〳〵しら雲を吹かけ来て伴ふ人のうす〳〵と見ゆることあまたゝびなり。

涼し過ておびゆるばかり雲の中

規外云、「夫云はゞかりの関これなり。」と。**太民**云、「絶頂の観音堂の鐘の銘に有耶無耶の関とありと云」。**岩城**の**露柱**に面会の時、此関の事を尋侍りしかバ、「うやむやの関ハ出羽の北方庄内の近くにあり。」と云。或人の説に笹谷を有哉無哉の関、大河原をはゞかりの関、伊達の大木戸を下ひもの関と云。

（頭注）桃隣が『むつ千鳥』に云、「坂田を一里出てうやむやの関あり。」『東鑑』に「大関笹谷峠の事なり。奥州にありと云々きさかたのうやむや覚束なし。」と書り。

仙府の**清女**「**笹谷**をたしかにうやむやの関なり。」と云。これハ此地をもふ

○峨眉山・中国四川省にある山。中国三大霊山（五台山、天台山）の一つ。中国仏教の聖地。杜子春は峨眉山の仙人に教えを乞うた。
○絡繹（らくえき）・人や馬の往来が絶え間なく続くさま。
○稲丸・未詳。津軽出身の瓜坊門人井上稲丸は文化五年八月六日没なので別人。
○古翠・出羽（山形県）川西町大塚の豪農。高橋九兵衛秀興。蕉圃亭。乙二門人。乙二は古翠亭に滞在して付近の俳人を指導した。文政八年『松窓乙二発句集』（文政八年　一具、古翠編）。嘉永四年（一八五一）二月二十二日没。
○かるさん・現代のズボンに似た動きやすい形状の袴。もとは十五世紀以降に渡来した南蛮人が着用したもので、近世には大工、左官、手代、魚屋主人などに用いられ、農村の仕事着にも取り入れられた。

（五）大橋・川樋・上山　五月十三日～十四日

十三日。午に近く客舎を出。町家十餘丁を過。反取に出て東北に向ふ。右の後に吾妻が嶽、左りのうしろに朝日が嶽と山に抽（ぬきん）て立り。兼て聞し飯豊山会津より越後へこえる境と云西の方へ天をさゝえて横をりふせり。戌の方に三角に聳たるを箕おもて山と云。昔平家の残黨此麓に隠れ住しとて今も多く人家ありといへり。亥の方に山〳〵ひまなくかさなれる上に月山見ゆ。一面に雪をかぶりて少しもことなる色なし。かたちまどかにして峰より月の出かゝりたるがごとし。これ月山の名なるかしらず。行程廿餘里と云。

山〳〵の影をくばかり月の山

大橋と云驛に至。此わたりの田土堅うして春耕し置、日和に数日乾し槌或ハ斧のむねにて打砕き其のち雨を待。又ハ水を引入れて植代となす。上田ハなべて斯のごとしと人のいひき。又田べりの溝に菖蒲と燕子花おほし。

さげて出る田槌の障るあやめかな

其夕**赤湯**の油屋に舎る。これ**古翠**の此處にありと聞て、其近き家に宿をもとめし也。町ハ裏と表とありて数百の軒をならべたり。温泉の壺只一ツと云。街の入口石の木戸あり。此地はかの**乙二**が冬籠して、「大河〳〵に月日を願へ谷の梅」と口ずさびし處也。しかれども時鳥の啼わたる時節にて、其梅も青葉茂れるもなかなり。

実になりし梅にかさなる月日かな

日暮前消息して**古翠**を音信侍れバ、其宿の主のいふに、「けふハ友のありてあたり近き沼に杜若見に行し。」と云。初夜近き頃、あわたゞしく戸を敲く音あり。則**古翠**の訪来れる也。俳諧数刻に及ぶ。連にありし**暁花**と云老人しきりに帰らん事を促すによて別る。

此花を見て帰るさに

杜若提てもどかしわたし舟　　古翠

湖は見古したれどほとゝぎす　　、

古翠ハ風流のしれものとかねて聞しにまさり、其胸中一点の滞なく、常に近づかまほしきをのこ也。其明る日ハ法用のありて二里斗りよそなる寺へゆくといひて、かれも誠に名残を惜ミ侍る。互に旧友のわかれにひとしかりし。

十四日、舎りを出て三四丁ばかり左ハ裸山にて其腰をめぐり行。右ハ東南に打ひらけたる田圃也。其中に大沼ありて燕子花多し。其花田間の溝までひまなく咲つゞけたり。これきのふ**古翠**が見に行たる處也。

朝風やひさげて見たき燕子花

土人に問侍れば、此沼鯉鮒おほしといへり。釣舟三艘ばかり見ゆ。絵に書る姿ありてなつかし。

さゞなみのきゆれバ浮るぬなは哉

川樋の驛ハ山の半腹をきりならしたる里にて、いぶせきせき家のみおほし。

さみだれに雀子の啼軒端哉

いとひ啼も老鶯のあはれ也

此ほとり桑漆の林ありて、道の傍又あざミの花咲つゞけたり。

山草に昼の露見るついりかな

中山驛米澤の番所ありを出たる道の東に大石あり。八間四面ありと云（土人

影峰の上に落かゝるを眺やりてかの**峨眉山**のおもむきも斯やなど思ひやられ、又わが常陸と五十里の風土のたがひに驚く。

このあたり冬のけしきを夏の月

十日の朝、舎りを出るよりやがて峠にかゝる板谷峠といふ。巌石峨々としたる裸山也。松抔飛〳〵にありて、雪ハ道の傍に残り、寒風膚を裂ばかり吹て、唇の色ある人なし。一里ばかり登りて、側の立場の一ツ家あり。桑の芽いまだ筆の先ほどにて黄鳥の声處〳〵に聞ゆ。きさらぎ末の心地せらる。

うぐひすよなれバ老ともおもふまじ

大澤の驛に下る。**庭坂**より六里餘。其間道の左右馬酔木ひまなく有、花半開きたり。

にくまるゝいろとも見へず花あざみ

それより**米澤**へ出る。山間の道谷川の音と瀧の響と耳に絶ず。或ハ桑、或ハ漆の大樹、左右並木のごとくすべて此山路の桑みな古木也。

桑を下より切ざる事を土人に尋侍れバ、下より截さふらへバ雪におされて枯候故に大木となし、葉をのみ摘候と答へたり。

米澤の藩半里ほど有といへる處に、百歩に餘る土橋あり。至て急流也。

夜見なバあはれなるべし芹の花

城下に至て本町と云所の福島屋に宿す。其あるじに先ヅ宮崎氏**素白**といふ人無事にやと尋侍りしかバ、いつやらの年はかなくなられしとこたへたるに、俄に胸ふたがりていひ出べきこと葉もなし。予より十ばかりも弟なりける人かと思ひ出て袂をしぼる。

黄なる清水のみにゆかれし人こひし

赤井氏**白平**といふ藩中の人、其家に居合せて知人になる。暮に及び**芙山**訪来て風談あり。これハ**紫明**より添書有たる故也。

十一日朝の間閑を得たり。

旅寝の願ひ久しく侍て、去年の春「蝶鳥にふまれてみたや草枕」といひ出たるに終に旅人の数に入て水村山郭にさまよひつゝたのしミくるしみ行こへて家にありし安佚の折とは懸隔のたがひありて、時により吾我を忘るばかりにおぼゆ。

芍薬の古みをしらぬ旅寝かな

笹木野より**米澤**まで、十餘里、男女老たるも若きも**かるさん**といふ物をはく。股引はきたる人を見ず。又牛多し。七ツ牛三ツ馬也。竹の林曽てなし。米澤近き處にて、紫竹と淡竹と交たる小藪二處見たるのミ。桶のかつらハ割たる竹を牛馬にて福島の方より付送る事絡繹としておびたゞし。

午時過、**稲丸**、**文来**訪来る。風譚一時ばかり。夜に入て**村六**、**春二**、**芙山**、**桐水**など来れり。**桐水**雲洲と云薬を贈れり。竹股氏の家傳にして打撲、きり疵、血留に妙也といへり。

おの〳〵探題あり。

竹植てむしろの上の夕餉哉

もの語聞うよ黍を蒔男　　稲丸

下略

十二日。けふまで三日、烏燕雀の外絶て鳥の声を聞ず。其夜きのふの人〳〵外に、**以文**、**宗碩**など来り、わりなく望れ侍りて祖翁の俳諧二巻を講ず。又、此日**大塚**の**古翠**に逢ばやと**太民**をして消息し侍れバ、赤湯といふ處へゆきしと其家のもの、いひおこしぬよと、翌ハ赤湯にゆかんと人〳〵にわかれを告、**芙山**仙府までの驛路及び其行程を詳に書付て贈る。深切なる雅人也。

（注釈）

○斎藤桂裡 - 『傀儡師』（文政三年　松堂編）に福島の人として入集する。

○羊腸 - 羊の腸のように山道が幾重にもくねり曲がっている様子。

○澤元愷 - 平沢旭山。江戸時代中期の儒者。山城出身。寛政三年（一七九一）一月十五日没、五十九歳。『漫遊文草』は天明七年序。

○東朝 - 米沢の和田東潮。福島生まれ。江戸の羽田忠庵に入門。元禄二年（一六八九）頃嵐雪に入門。宝永三年（一七〇六）四月三日没。

○李平（すももだいら）- 旧米沢街道の宿場。福島市庭坂字神ノ森。

○板谷 - 山形県米沢市板谷。

る。

（四）笹木野・李平・板谷・米澤　五月八日～十二日

八日、松島の月心にかゝりて一折もまたでいとまを告て出る。夜雨降晴て朝日はなやか也。旅情かぎりなくおかし。

雨かわく松の朝日や夏ごゝろ

半里ばかり行たる茶店の前に紫陽花に似たる花の鞠をくゝりたるやうに咲り。幹ハ梅もと木葉ハ桜のおもむきあり。

しらぬ花はしらず見て行夏野哉

根子村といふ所を過る。此ほとり蠶を養ぬ家なし

夏草の桑になり行はたけかな

福島に至る。斎藤**桂裡**に文音して道を左にとり、米沢街道に入て西に向ふ。

著莪の花清水にあふも遠からじ

笹木野といふ驛に至る。はじめて右手の方に高山を見る。後におもふにわすれず山ならん。一里ほど過て庭坂の驛に至しかバ寒風烈しく吹て布子を二ツかさね着たり。そこを出るに三四丁より道険しくなり、終に**羊腸**の地を登ること二里ばかり、人おの〳〵肌につめたき汗をながせり。左右の樹老て日を見ぬ處どころ多く目なれぬ草木、耳馴ぬ鳥の声ばかり也。絶頂に至、木立絶たる處より福島の川股などいふ村〳〵眼の下に見ゆ。土地の人只山坂なりといひしが、なか〳〵の峠にてありけり。庭坂峠といふなる由、山蘇鉄鳳鳥草おほし。

はらばふて清水のみけり山の上

西にあたりて吾妻が嶽といふ大山あり。こなたの道と只谷ひとつを隔たり。残雪むら〳〵とありて物冷じき山のかたちなり。

安達太郎、吾妻次郎といふよし**澤元愷**が『漫游文草』に見えたり。**米澤**の**芙山**云、「これ則わすれず山也。」と。然れども不忘山は苅田が嶽土人蔵王山といふの事にして**芙山**の説は誤れり。又云、「祖翁奥羽行脚の時福島より左にきれ西に向て板谷まで行給ひしが、如何思しけん、**米澤**の**東朝**といふものに消息し給ひて又福島に引かへされしと云伝へ侍る。」と語る。虚実知べからず。

谷ハ人の手してきりたるごとく、底までハ百間餘あらんと覚ゆ。水の音幽に聞へて眩くばかり也。峠をのぼりつめて聊下り行處に**李平**といふ驛あり。家の数わづかに廿五、六と見ゆ。日の暮侍るまゝに詮方なく舎りを求む。吾妻が岳の七合目といふ。なべての里よりは二里ばかりも高かるべし。夜嵐烈しく吹て雨はこぼすやうに降たり。いぶせき家の戸鳴わたりて目の覚ることあまたゝびなりしが、明がたより日和につきて子規の二声三声啼過るより、漸く人境の心地せられける。

雨はれや李平（すもだいら）のほとゝぎす

九日の朝、舎りを出んとする折、わが名を聞知て短冊を望れたり。やがて二三句書て打くれながら出ぬ。これより**板谷**の里まで二里、すべて下り坂なりと歩のいひけるが、はたして左右生茂り草木野鳥庭坂峠にひとし。其下りゆく所、尺地も平かならず。東西の人家に一里ばかりはなれたる谷間に産が沢といふ家居只ひとつあり。斯ても住るゝものかなと思はれ侍る。其傍の谷水漲り落る所に橋を渡せり。陸奥、出羽の境といふ。

兒に来る靄になれけり谷の家

山彦の帰る筋あり葛若葉

山の半腹を切ひらきて道となせる所ハ谷数十丈の下にあり。行路の底に瀧の音聞ぬ。其間十町程と覚ゆ。下り〳〵ゆくほどに又漲り落る川ありて橋を丈夫にかけ渡せり。水底も岸も皆岩なり。それより峻しく陟ること数町にして板谷に至る。驛長が家をかりて一泊す。西風烈しく雨落て峠をこゆる事難しと人のいへバ也。

板谷の入口に米澤の番所あり。道すがら夫のいひけるハ屋形も下乗し給へバ、予にもをりよと云。**規外**をやりて**蹇足**のわけをことわりたれバ、関守聞とゞけて乗ながら通せられたり。

関こえてすつぱりと呑む清水哉

此舎の軒端の山あづま岳せ雪むら消て風の声颯々と聞へ、九日の夜の半輪の

寒がりが来てハ碁の手にさしを入　〃
　鬮にして汲居風呂の水　中
木母寺の煤け雀も岡ありき　明
　若和布をひねる春は来にけり　中
女樹男樹の花ちらほらと咲移り　明
　尾が落るよりかはヅ啼立　中

其二

けしの花折分別のかはりけり　紫明
　をりふし影を見せるよしきり　湖中
細ながき山下町の有あけて　規外
　茶釜鳴せる工夫する秋　太民
芋汁に飲せられたる旅戻り　中
　ゑのころ汚す袖蓑の袖　明
手にかゝる物を残さず打くれて　民
　曇りぐせつく鎌倉の空　外
嫁取に篠のあれこむ麦の痩　明
　隣と雇にしたる小盥　中
すハ〳〵と檜木こつぱの匂ふ月　外
　鳥居見こしの槙の霧晴　民
丈草ハ露寒しとて舟嫌　中
　あけそこなひて飛す窓蓋　明
引市に見えぬ羽織の置どころ　民
　当馬がなけば枸杞の芽をふく　外
おもふさま廣がりかへる花の雲　明
　穀雨をまてる旅の約束　中

四日、**太民**をして**川股**の**黙巣**に文音す。道あしくして訪ことかたしと**紫明**がいひたれバなり。

五日、

又もけふかつみ問かへすあやめ哉　黙巣
　麦秋や痩竹の子も鎌次手　〃
　壁土をはこぶにさはる牡丹かな
粽をもてなされて、
　解捨た笹におどろくちまき哉　紫明
　おほよそにきのふは過てあやめ草
此夜別家の戸近く水鶏の二声たゝきたる。折にふれてあはれ深し。
　給仕子に下駄をはかせぬ水鶏哉
又はじめて蚊の声をきく
　ねまりけり蚊の来る薮を垣隣
餘興
　菖蒲さして籠の小鳥をしづめけり　紫明
　夏山うけに奈良茶賣家　湖中
賭の碁も打きらず舟つきて　規外
　わすれたやうに雨の降止　太民
居風呂の入人はづれし宵の月　中
　節〳〵祝ふ早稲の穂かへり　明
　透垣を見こす紫苑の花もなく　民
　一身田へぬける裏町　外

（注釈）

○浅香山・采女「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわがおもはなくに」（『万葉集』）で知られる歌枕。

○紫明・二本松八丁目の人。加藤氏。金沢屋忠兵衛。惲斎、二峰楼と号した。文化十三年『玉ひろひ』編。文政十二年三月十八日没、六十九歳。

○与人・二本松若宮町の人。酒造業。屋号は油屋。通称根本与一兵衛。本宮の塩田冥々門。文化七年『礒まくら』編、文政二年『黒塚集』編、文政八年『其白髪集』編。天保九年十一月二十日没、七十歳。

○黙巣・本文により川俣（現福島県伊達郡川俣町）の俳人であることがわか

七月六日没。七十九歳。

（三）日和田・二本松　五月一日～七日

五月朔、**須賀川**のやどりを出て**笹川**の驛に至。阿武隈川は道につきて北に向ふ。東は相馬、三春の山、西ハ会津根、安達太良嶺つらなり、雪の有處道より近く見ゆ。

阿武隈川ハ街道にそひて東の方を流る。桑折の驛まで斯のごとし。其間廿里餘と云。

日和田驛に至て昼餉をしたゝむるに、其茶店の名をかツみ屋といふに戯て、「かツみ屋にめしくふけふは五月かな」といひつゝ笑ふも旅の一興なり。

祖翁の紀行に檜皮宿と書れし處也。今なべて日和田と書と見へたり。此宿を出はなれて八丁ばかりに浅香山、道の東にあり。其裾道へ出、はる山の頂に横に廣がりたる赤松あり。山のかたちひらめにして塩尻をふせたるが如し。静なる姿あり。此ほとりにある山々かたち大かた似かよひたり。又、時鳥多く啼所也。實ハ二里ばかり西にあるをまことの浅香山と云といへり。山の井もかつミも其山の麓にあり。葉は麦のごとく花ハ銭のかたちに似たり。よその地にうつし植れバ極て枯るといふ土人の申ける。是の傍の山ハまことの浅香に彷彿たる故、人〳〵斯ハいふとぞ。

紫明云、花かツみハ菖蒲の小なるものにして、花三ひら也。葉も細くちひさし。いつの年にや庵にうつし栽たりしが、終に枯うせしと語れり。

うつし植れバ枯るといひし土人の言葉にあへり。

（頭注）友人池原長兵衛より西にあり。浅香山へ往しが、まことしきもの一もあらず。古はこなたこそなつかしけれといはれたり。

此日、二**本松**に舍を求め置て**与人**を訪んとせしが、とかく隙入ありて道はかどらず。日西山に落かゝりたれバ、本意なく**本宮**驛森田ヤにやどる。嵩の湯ハ安達太朗嶺の半腹なりしを侯の多く人歩を費して麓に引れしとぞ。行程四里半と云。二日舍りを出て**杉田**の宿を過るに、去年いとなみしと藤中将實方朝臣の碑を見る。其哥。

なゝよざくらはる〴〵こゝへ来たすぎ田いつかみやこへかへる身なれバ

なゝよ桜と云あり。まことに大樹也。しかれども哥ハ實方朝臣のよみ給ひしものにあらず。偽なりと其ほとりの人いへり。さも有べきことなり。

二**本松若宮町**の**与人**を訪るをかさねて留飲を憂ひながらつとめて一時餘の風談あり。深情かぎりなし。兎角するほどに昼餉もてなされける中に笋の羹あり。あるじの云、「これハこれ安達太郎嶺のすゝの子といふもの也。かの山の北かげの雪中に出るといへり。味ひ侘て甚性そゞろに珍しく覚ゆ。

すゝの子の折にふれけりあだゝらね

やがていとまを告侍るに、名残をしげに見えたり。

其日未の刻過る頃、**八丁目**驛に**紫明**を訪侍れバ悦びあわて、去年の秋造りしと云別家にとゞめて懇にあるじせらる。其妻殊にかひ〴〵しくもてなして、野菜ハ実に春泥坊底の数を尽すといふべし。しばらく旅愁を忘るゝばかり也。其日の暮より雨降出て三日をやみなし。日々俳諧に遊ぶ妙をえたる心地ぞする。其亭の名を問にいまだ名をおふせずといへり。其心のほど又なつかし。道すがらのいひ捨を好みにまかせて書付たれバ巧拙の論詳にありて後脇を起す。

一雨晴過ぬ夏野の放し馬　湖中

おもふつぼなるはツ時鳥　紫明

皃洗ふながれハ石をめぐり来て　中

朔日毎に見ゆる垣賣　明

拾ふたる程槿さへなめぬ月の後　中

火の香を嗅に蟀の来る　明

ほつこりと霧吹かゝる川岸通り　中

十の字河童かしなくしたり　明

ゆくりなく男ざかりの昼寝ずき　中

水こひ鳥のおほき室の津　明

捨て置もの、直(値)をもつ祭り前　中

雪菜ばたけの地子まかる月　明

夏川の青きが中や山の雪

河原田の驛に至。此一村すべて煙草を呑ず。何故とはなしに古よりの事也と云。珍ら敷處也。驛を出れバ渺々たる郊原にて土地高し。**中畑**と云驛に近き所又廣原あり。左右柴胡多し。花はうす雪の降たるがごとく見ゆ。

糸柴胡出たる入日の見處か

其山間にて須賀川も三里にたらずと聞て、

西の木の花も近しと郭公

申の刻ばかり須賀川驛に至て、市原氏**たよめ**を訪て面会す。女性なれバ風譚はかゞしからず。やがて其隣家仙臺屋にやどりをもとむ。**たよめ**訪来りて探題に及ぶ。然れども病後瞑眩の気味有とて一句を吐ず。**雨考**訪来る。兼て文音し居けれバ旧識のごとし。七十九齢といひつれど健にして風流又他にこへてめで度老人也。

探題

大ぶりな蝙蝠飛や追手前　湖中

年魚賣に詞かけけり嗣の中　雨考

有明を押込やうに夏の山　規外

麦秋や畑かけ廻る傳馬ふれ　太民

三十日、**雨考**来て終日風譚あり。夜に入てむだ書して遊ぶ。其詞。

たからおほけれバ身を守るにまとしといはれたれど、財多きハ常に足りて、融通滞ることなく萬に心忙しからず。いきのびる心地せらるべし。しかれども人前ハ心に快からざる處あらん。貧ほど心の安きものはあらじ。しかれども、妻子の後悔を持居る人はこれにまさるくるしびハあらじ。旦夕せがまるゝ声の耳の底に入て心にゆるがごとし。併人前ハ心に快き處あり。夭寿、貴賤、貧福ハ命なり。ねがひて至る處にあらず。

（注釈）

○町屋‐常陸太田市町屋。

○玉たれの瀑布‐日立市東河内町の玉簾寺境内にある滝。

○玉簾寺‐一六七八年、徳川光圀が創建した寺。光圀が所持した聖観音像を本尊にした。安産祈願の寺として知られる。

○折橋‐常陸太田市折橋。駅長宅の向かいの心優しい主人の家には燕、雀が多く集った（本文）。

○境の明神の坂‐明神峠。常陸（常陸太田市徳田町）と陸奥（福島県矢祭町大拱）の境にある峠。

○大拱（おおぬかり）‐福島県東白川郡矢祭町大拱。

○松窓‐岩間乙二の号。乙二は陸奥白石千住院住職で、当時の東北を代表する俳人。文政六年（一八二三）没、六十八歳。湖中はこの旅の仙台で、乙二の娘きよ女が嫁いだ松井家の世話になっている。

○戸塚‐東白川郡矢祭町戸塚。

○伊香川‐矢祭町を流れる久慈川上流の川。

○棚倉‐福島県東白川郡棚倉町

○釜子‐福島県白河市釜子。

○大熊川‐福島県西郷村を流れる阿武隈川の源流。

○『東奥紀行』寛政四年刊　長久保赤水著

○河原田‐西白河郡中島村川原田。この村の村人は古来皆煙草を呑まないという（本文）。

○中畑‐西白河郡矢吹町中畑。柴胡が多い（本文）。

○瞑眩‐漢方薬服用後、一時的に症状が悪化する現象。

○たよ女‐奥州須賀川（福島県須賀川市）の大庄屋市原寿綱の末子。分家の養女となり、十九歳で会津の松崎常蔵を夫に迎え、三子をもうけた。三十一歳で夫が病没し、実兄綱稠、石井雨考の勧めで俳諧を始めた。文化十四年（一八一七）『あさか市』編集。幕末期の東北を代表する女流俳人。慶応元年（一八六五）八月四日没、九十歳。

○雨考‐奥州須賀川（福島県須賀川市）の人。石井勝右衛門。夜話亭と号す。二階堂桃祖に学んだ。雨考の夜話亭は須賀川の鎮守諏訪神社の付近にあって、その南隣に我が国銅版画の始祖亜欧銅田善が住んでいた。雨考の編著『青かげ』は、田善の乙字の滝の銅版画が一枚ある。文政十年（一八二七）

家作るもくろミいくつ夏の山

町屋驛より西にある山ハいにしへこがねをほりしと云。里川の底より過て宿の下まで堀通したる處といへり。

玉たれの瀑布ハ道の東にあり。木立のひまより落て音寒く聞へ、精舍ハ見へずながら奥深くおもはれ侍る。

夏ありて僧も住やら**玉簾寺**

此ほとりより北、大方雑役馬をつかふ。

馬の子はかはゆきものよけしの花

折橋に至る。驛の長が向ひにある家のあるじ心優しかりけるにや。燕に巣を作らすとてちひさき板打付たる處、いくらといふ数をしらず拵置り。さて其萱家のおもてに向たる扇の間とやらいふ所を雀のおのれと孔をあけ巣作るさま十五六ばかりあり。家のめぐりなべて斯のごとしとおもはる。玄鳥をあはれぶのあまり雀も斯なつきしやとそゞろあはれに思はれ侍る。燕雀の声其ほとりかまびす（し）きまで聞ゆ。其主の心かへす〳〵もなつかしかりけり。

鳥の巣に空をしまるゝ四月かな

大中、小中、徳田を過、境の明神の坂を越て陸奥の地に入。夕暮の空すみわたり、何とハなしに心細くおもハれたるうつり、ふと我宿の事こまやかにおもひ出られ侍て、

見かへらじ麦の穂まねく坂の下

都も遠くなるみかたとよみ給ひしこと、旅せぬ身にはさも有なんなどおほよそにのみ聞なし侍るぞ口をしき。

大拱（おおぬかり）の驛米屋に舎る。かの**松窓**のいひし、鴨の羽色なる水に蜘蛛手にながれさる。

鹿垣の里やうの花閑古鳥

つとぬいて見らるゝ麦の黒穂かな

又

去年からかゝりて麦の黒穂かな

麦のへり苗代の畔いかめしき木をもて結廻し猪鹿を防ぐと見へたり。此ほとり三里ばかりの間かくのごとし。

廿八日、大ぬかりの舎りを出て下関に至る。其間一里ばかり東西の山かさなりて朝日いまだ道を照らさず。露置餘したる小草、旅人の踏たる跡も見へず、しづかなりしを郭公の初声耳を驚し侍る。かゝる處にして旅の情のわすれがたき所有。

遠里の鶏の朝声ほとゝぎす

田野にかゝる

十ばかり代かく馬やほとゝぎす

戸塚の驛を出て、伊香川あり。わが常陸にながれ来る久慈川の水上にして、つねにかち渡り也。いさゝかなる雨にもとまると云。

時鳥雨は翌ふれ伊香川

此川を東に見てゆくこと一里ばかり、

年魚とりの裾よごしたる柳かな

東館といふ宿を過て野原の道にかゝる

むら雨や河原柴胡の花の跡

一雨晴過ぬ夏野の放し馬

橋をわたり坂をのぼりて**棚倉**の街に入る。一堆の山をならして四方の崖を要害になしたる城と見ゆ。行路暫時の早卒つぶさに見る事あたハず。跡に聞バ日の本三名城の一なりと或人いへり。此夜**釜子**の驛水戸屋に泊る。

みじかさに夜とおもはれぬ旅寝かな

舎りを出て半里ばかりにして大熊川有。甲子山より出て白河を水上とす。此わたり源ちかきが故に水いまだ細く舟を用るに至らず。洲をはさミて橋を三ツ渡せり。十日ばかり前の雨に橋落て歩行わたり也。

おほくまをかちでこゆるや夏ごゝろ

赤水の『**東奥紀行**』に云、大熊の瀧を水上とする故に此ほとりを大熊川と云と也。

湖中云、下流に至ていづれのわたりよりか阿武隈川と唱。

此處よりはじめて那須甲子の山〳〵見ゆ。いづれも残雪所〳〵にあり。

左程ハ此行にもれたる事をうれひ、田彦まで道送りして袂をわかつ。

道橋のつくろひすむや時鳥

と云句を駕籠に投入て去。あはれさしばらく止ざりけり。澤、堤などいふ田野を過る。

子に痩た鳥はねありて若葉かな

むら雨を願ひ過たるわかばかな

額田驛に至。祖翁の「つゝじいけて其かげに干鱈さく女」と口すさび給ひし。今目の前に有茶店のありさま、藤の花の軒よりたれ、若楓の袖垣にあまりて狭き見世の曲突のあたり奇麗にうつはものあざやかに洗ひ立て打ならべたる。いヅちもかはる所のなき。

昼過の長き卯月の日ざし哉

太田に至る。往昔、佐竹の戈の墟也。山岳こゝにはじまりて、陸奥の果までつゞくといへり。尾花庵に着。日いまだ七ばかり也。

蕗の葉に菓子もる庵の奢かな

廿日より廿六日までとゞまり侍る。北條の石翁予が跡を追来りて倶に仮寝す。其間俳諧及び題を探て遊ぶ。

うの花に隣の杵のひゞきかな

濱ものゝ仰山ほめるあやめかな

蕗賣の城下かせぎやほとゝぎす

郭公大寺の坐しき明てあり

田から出てうつくしがるやわか楓

俳諧二巻あり。略す。

方屋[居]句帖をつくりてこれに序あらんことを乞。其詞、

乾坤の風狂人、よし野、松島に杖をひき〳〵暫くもとゞまらざる。しかも元の人にあらず。白河に褻なりをつくろひ、勿来の浪に裾をぬらし、山館野亭のくるしびたのしび、寒来暑往の旅店に結び捨たる句を一冊子にこひうけて長く窓下のたまものとなし、千里の風光をまのあたりに備へ置て、騒客の心をくみしり、遊びごとのはたはりを廣うせんとねがふものは、太田の街に家居する尺窓方居也。此ことのなかだちしてはし作るものハ水府の隠士幻窓湖中也。

丁亥初夏下弦

（注釈）

○規外、太民-旅の同行者。湖中の門人。規外は水戸藩中下街の矢野勇蔵。別号に尺巣。

○杜年-鵜殿平太衛門。水戸藩の湖中門人。幻窓と号して南酒出（那珂市）の片岡家に寄寓した。

○田彦-茨城県ひたちなか市田彦。

○澤、堤-現在のひたちなか市佐和から那珂市堤辺り。

○額田-茨城県那珂市額田。芭蕉百回忌にあたる寛政五年、地元の中島五峯は「松風の落葉か水の音涼し」の芭蕉句碑を建立した。

○つゝじいけて-「躑躅生けてその陰に干鱈割く女　芭蕉」『舶船集』所収。

○佐竹の戈の墟-佐竹氏の戦場跡の意だが、ここでは居城跡の意か。馬坂城跡は平安時代末期に佐竹昌義が築いた城。北に鶴が池、西南は湿地帯が広がる自然の要塞であった。

○北條の石翁-筑波郡北条町（現茨城県つくば市北東部）。石翁は、北条新町の名主市村庄次郎（俳号眠石）のことであろう。北条の宝安寺境内に、「おほかたの月は忘れてけふの月　松下亭眠石翁」の句碑がある。眠石は龍ヶ崎の杉野翠兄の門人。文政十一年（一八二八）没、七十二翁。

○方居-太田の人。勝村氏。文久二年（一八六二）没。太田尾花庵は一世芝六、二世山東、三世一径、四世方居と継承され、明治まで続いている。

○下弦-旧暦22日、23日。

（二）町屋・折橋・河原田・須賀川　四月二十七日～三十日

廿七日　尾花庵を出てみちのくに赴く。道里川に臨むことあまたゝび。

・笹谷・茂庭・仙台・塩釜（宮城県）

（復路）仙台・岩沼（宮城県）・中村・鹿島・長塚・広野・久之浜・平・湯本・植田・勿来（福島県）・平潟・川尻・小木津・常陸太田・水戸（茨城県）

二、幻窓湖中について

「幻窓湖中」は、水戸藩士岡野重寿の二男、岡野重成の俳号である。通称は庄八で、前号は野雀、寥窓である。寛政二年（一七九〇）十六歳の時、痿疾（手足のしびれ）により俳諧を志すようになり、二世湖中の近藤助五郎に師事する。寛政八年（一七九六）頃、京都の古学庵仏兮が水戸に来て、笠原山銀河寺の住職となった。湖中は仏兮に師事し、二人で芭蕉全集『俳諧一葉集』の刊行を企画することになった。寛政十一年（一七九九）七月十四日、彼は二世湖中（水戸藩士近藤助五郎敬恵号）から号と点印を譲られる。これを機に野雀の号を改め、寥窓湖中と号する。ところが、文化元年（一八〇四）九月十三日、師の仏兮が比叡山に向かうために甲斐の鰍沢を船で渡った際、船が転覆して母と共に溺死してしまう。それ以来湖中は『俳諧一葉集』の編集を一人で進めることになった。文化七年（一八一〇）、自身の屋敷内（水戸市城東三丁目一番）に離れ家の四壁堂を結んで幻窓と号する。湖中が住んだ武家屋敷は水戸城の最東端で、本城防衛の最先端に当たる下級武士が多かった。仏兮没後二十三年が経過した文政十年（一八二七）、湖中はついに芭蕉作品集『俳諧一葉集』を刊行した。その四年後の天保二年（一八三一）二月二十六日、湖中は五十六歳で没した。薬王院（水戸市元吉田町）に葬られた。

「湖中」号は三世まで継承された俳号である。芭蕉の一番弟子榎本其角から宗匠としての点印（「雪月花」「芭蕉葉」「半面美人」の三種）を譲り受けた江戸座の深川湖十は、そのうちの一つである「半面美人」の点印を太田湖中に託した。其角の点印を託されたのが一世湖中の太田資胤である。資胤は棚倉藩主太田資晴の二男に生まれ、水戸藩家老太田資真の養子に入る。一世湖中が俳号と点印を水戸藩士近藤助五郎敬恵に譲ったのは天明二年（一七八二）十二月である。二世湖中の近藤は十七年間湖中号を用いた。「湖中」号と「半面美人」の点印は水戸藩士（武家俳人）によって継承されてきた。

※参考文献『幻窓湖中』（有馬徳　一九八三年　筑波書林）

三、『三月越』（往路篇）翻刻と注釈

凡例

一、原本に章立てはされていないが、便宜的に（一）～（八）の章段に分けて見出しを付加した。

一、翻刻の表記は原文の文字、仮名遣いをなるべく用いるようにしたが、濁点は適宜補った。

一、翻刻本文ではわかりやすさを考慮して便宜的に次のような付加を行った。

①人名は太字ゴシック体、地名、寺院名、書名等は太字明朝体で表記した。

②筆者の湖中自身が添えた小字の注釈はＨＧＰ教科書体で表記した。

③考察で扱う要点となる箇所には便宜的に傍線を引いた。

（一）水戸・額田・太田　四月十九日～二十六日

三月越　奥羽日記

ばせを翁は四十六のとしの春奥羽の旅寝思ひ立給ひしと聞へけるに、予も其齢を過る頃よりしきりに松島の仮枕といふものせまほしと思ひつれど、道の神のうけひき給ハざるにや。貧とほだしとにつながれて、五とせに餘る月花を過したり。そも〳〵西上人の御身にてすら捨給へバこそ棄給ひたれ。何ぞ我身の軽きことハこれに似るべくもなしと、終に狂者の挙動をかりて文政十丁亥卯月十九日といふに先ヅ茅屋をもぬけ出ぬ。

子を寝せぬほどはたゝきそやよ水鶏

規外、太民を伴ふ。那珂川の岸上にて見送りの人〳〵に別る。

松島の蚊に喰るゝぞうらやまし　**杜年**

送別の句あり。一里ばかりゆきて漸旅の上とは心付侍る。

けふからハわが野山也ほとゝぎす

自筆本の表紙左上には題簽があり「三月越」と墨書されているが、これは湖中の自筆ではなく、旧蔵者の水口豊次郎（雅号は天つ雁）が付記したものである。見返しの部分には題簽と同じ太字の筆跡で、

幻窓湖中自筆稿本（俳諧一葉集著者）

三月越　奥羽日記

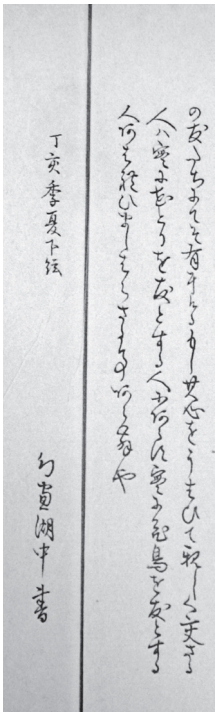
丁亥季夏下紘（※）と巻末ニアリ。文政十年なり。一葉集と同年か。巻頭の文に見れば湖中五十一才ならん。

と水口氏による書き込みがある。この旅は水口氏が推定する通り、『俳諧一葉集』を刊行した年と同じ文政十年（一八二七）であるが、旅をした年齢は五十一歳ではなく五十二歳である。本文の最初のページには陽刻楕円印で「水口」の押印がある。巻末には、「水口あまツ厂（天つ雁）」と墨書されている。水口豊次郎は静岡県島田の人で、号は天つ雁。伊豆の俳人瀧本連水に師事した。大正四年（一九一五）頃、東京建鉄に入社し、重役となって昭和四年（一九二九）に退社。晩年は俳諧研究を行って俳書、短冊等を多く蒐集した。

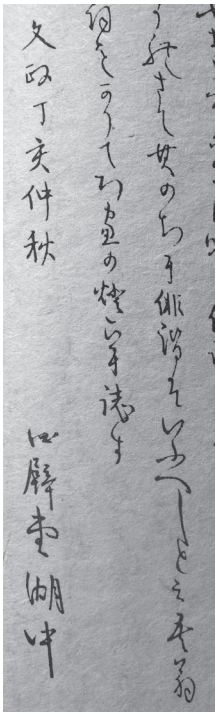
水口氏が自身の蔵書を湖中自筆稿本（写真Ⓐ）と断定した根拠は記されていないが、氏の見解には賛同できる。自筆本における細字の丁寧な筆使いと、整然とした小字の字配りは、『俳諧一葉集』（写真Ⓑ）のそれと同一人物の筆跡とみてよいだろう。写し漏らしが多々見受けられる筆写本（写真Ⓒ）常陸太田市立図書館蔵本）は、その点において『俳諧一葉集』の板下となった湖中の筆跡とは別の人物の手によるものであり、そのことは堀辺武氏が推定した（「常陸太田市立図書館蔵　幻窓湖中著『奥羽日記』」（『郷土ひたち』61号　平成2011年3月　郷土ひたち文化研究会）通りである。

本稿では『三月越』における湖中の旅の行程を便宜的に（往路篇）、（復路篇）の二篇に分けることにしたが、往路、復路の大まかな行程は以下の通りである。

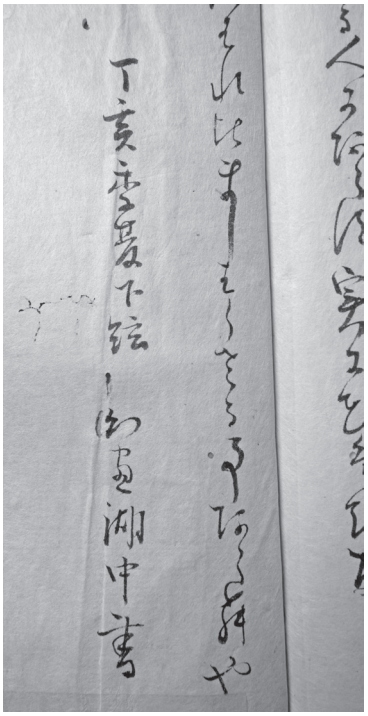
（往路）水戸・常陸太田（茨城県）・大共・棚倉・須賀川・日和田・二本松・庭坂（福島県）・李平・米澤・大橋・中山・山形城下（山形県）



写真Ⓐ　天理図書館蔵湖中自筆本



写真Ⓑ　架蔵『俳諧一葉集』



写真Ⓒ　常陸太田市立図書館蔵筆写本

研究論文

幻窓湖中の奥羽日記『三月越』（往路篇）

二村　　博（常磐大学人間科学部）

Travel Journal Written by Genso Kotyu in the Tohoku Mitsukigoshi(Outward way)

Hiroshi NIMURA（*Faculty of Human Science, Tokiwa University*）

This paper examines the contents of the haiku of Kotyu, who traveled the Tohoku region during the Edo Period. Kotyu is the person who edited the first Basho Complete, and was welcomed by haiku poets in each region on his journey. Uko, Tayome, Shimei, Yojin, Kosui, Kiyojo, and others who welcomed him were famous haiku poets in the Tohoku region in those days. In this paper I will examine the outward way of travel.

はじめに

幻窓湖中は最初の芭蕉全集『俳諧一葉集』（文政十年　仏兮、湖中編）を編集した水戸の俳人である。『俳諧一葉集』が刊行された文政十年（一八二七）の夏、湖中は水戸から塩竈、松島まで旅をしている。常陸太田市立図書館が所蔵する『奥羽日記』（筆写本）はその旅の様子を窺い知ることができ、『常陸俳諧散歩』（中根誠箸　暁印書館　２０１８年）によって同書の翻刻が通観できる。だが、堀辺武氏は「常陸太田市立図書館蔵　幻窓湖中著『奥羽日記』」（『郷土ひたち』６１号　平成２０１１年３月　郷土ひたち文化研究会）と題して同書の翻刻を発表した際、「この本は原本ではないと考えられる。」と推定している。そして、肝心の湖中自筆原本の所在は茨城県内ではこれまで不明であった。

筆者は奈良県にある天理図書館の綿屋文庫目録を閲覧した際、湖中自筆本の奥羽日記『三月越』が同館に存在することを知った。湖中自筆本（天理図書館本）と筆写本（常陸太田市立図書館蔵）を対照すると、写本にはしばしば写し漏らした箇所がある。また、湖中は旅先で文政期における陸奥著名俳人たち（雨考、多代女、紫明、与人、古翠、きよ女ら）と交流しているが、その点に関する考察はこれまで皆無である。

本稿は、天理図書館綿屋文庫が所蔵する湖中自筆本の奥羽日記『三月越』を底本とした翻刻に注釈を施し、内容の考察を加えるものである。尚、本稿では（往路篇）として水戸から塩竈までの行程を扱い、（復路篇）は次号において考察する。

一、『三月越』解題

『三月越』の書名の由来は、『奥の細道』において「武隈の松」を眺めた芭蕉が、「桜より松は二木を三月越シ」と詠んだことを踏まえたものである。この旅で湖中も武隈の松付近を訪れて同地の歌枕について触れている。湖中が実際に旅した期間もまた文政十年（一八二七）四月十九日から六月二十二日までであったので、文字通り「三月越し」の旅であった。

執筆者一覧（掲載順）

崔　蘭英	人間科学部	准教授
北原スマ子	明治大学	兼任講師
辻川美和	人間科学部	助教
二村　博	人間科学部	助教
渡邊洋子	人間科学部	准教授
岡部玲子	人間科学部	教授
大道一弘	人間科学部	助教
森本　俊	人間科学部	助教
桑原秀則	総合政策学部	助教
上野真悠子	人間科学部	助教
Kevin McManus	人間科学部	助教
松﨑哲之	人間科学部	准教授

編集委員

Kevin McManus　腰本さおり
旦 まゆみ　永野　勇二　渡邊 洋子

常磐大学人間科学部紀要　人間科学　第36巻　第1号

2018年9月30日　発行
非売品

編集兼発行人　常磐大学人間科学部　〒310-8585　水戸市見和1丁目430-1
代表者　河野敬一　電話　029-232-2511（代）

印刷・製本　山三印刷株式会社

ISSN-0289-9760

HUMAN SCIENCE

(Faculty of Human Science, Tokiwa University)

Vol. 36, No. 1 September 2018

CONTENTS

Articles

Fundamental Research on the Human Network Intellectuals in East Asia from the Transitional Stage to "Modern Times": Focusing on Koa Board and the Asia Association ····· L. Cui & S. Kitahara 1

The Bed Tricks in John Fletcher's Plays ····· M. Tsujikawa 11

Travel Journal Written by Genso Kotyu in the Tohoku Mitsukigoshi (Outward Way) ····· H. Nimura 110（一）

Tanoue Shinkichi's way of Thinking of the Methods of Descriptive Writing in Japanese Composition Class ····· Y. Watanabe 86（二十五）

Research Notes

A Study on Appoggiaturas in Music by Chopin ····· R. Okabe 21

Set-theoretical Formulation of Concepts Revisited ····· K. Daidoh 31

Framework of Tokiwa English Curriculum (FTEC): Theoretical Background and Implementation ····· S. Morimoto, H. Kuwabara, M. Ueno & K. McManus 41

Translation with Notes

Translation with notes on Aizawa Seishisai's "Tyuuyou Syakugi" (9) ····· T. Matsuzaki 66（四十五）

Edited by Editorial Committe
Faculty of Human Science, Tokiwa University
Mito, Ibaraki 310-8585 Japan